

INDEX

研究室名	キーワード	頁
機械システム分野 MECHANICAL SYSTEMS ENGINEERING		
熱エネルギー工学	燃焼、伝熱、エネルギー、環境、安全工学	1
流体力学	遷音速・超音速・極超音速流れ、流体制御、非接触光学流体計測	3
固体力学	CAE, Optimum design, CFRP, Damage analysis, Structural analysis, Shell structure	5
設計工学	感性工学、構造最適化、システム最適化、機械学習、Human MachineInterface	7
機械創成	メカトロニクス、圧電アクチュエータ、放電加工	9
マイクロメカトロニクス	光 MEMS、微細加工、センサ、マイクロアクチュエータ	11
材料プロセス	熱処理、表面改質処理、金属表面機能化、焼結、加工プロセス	13
総合研究教育ユニット	非圧縮性流れ、定温度型熱線流速計、LDV、PIV、受動的/能動的流れ制御	15
電子情報分野 ELECTRONICS AND INFORMATION ENGINEERING		
半導体	高効率太陽電池、結晶シリコン、III-V族化合物多接合、エネルギー	17
電子デバイス	窒化ガリウム(GaN)、化合物半導体、ヘテロ接合、トランジスタ、作製プロセス、高効率	19
レーザ科学	超高速レーザ、量子エレクトロニクス、ファイバレーザ、光マニピュレーション	21
情報記録工学	スピンエレクトロニクス、磁性薄膜、磁気記録、光・熱・磁気材料、磁気イメージング	23
電磁システム	電磁界解析、モータ、インバータ、鉄損、磁性材料、マルチスケール、マルチフィジックス	25
制御システム	制御理論、最適化理論、スマートグリッド、パワーアシストロボット	27
知能数理	人工知能、機械学習、深層学習、テキストマイニング、自然言語処理	29
知能情報メディア	画像認識、マルチメディア処理、機械学習、ヒューマンセンシング・モデリング	31
情報通信	誤り訂正符号、LDPC 符号、ポーラ符号、準巡回符号、PC クラスタ、高次元格子	33
物質工学分野 MATERIALS SCIENCE AND ENGINEERING		
光機能物質	微細構造ファイバ、スーパーコンティニューム、パラメトリック増幅、ファイバレーザ	35
フロンティア材料	フォトニクス材料、デバイスの開発	37
エネルギー材料	熱電材料、熱ダイオード、熱スイッチ、電子輸送現象、電子構造、熱輸送	39
理論物理学	弦理論、場の理論、対称性の自発的破れ	41
数理物理学	相対性理論、ブラックホール物理学、宇宙物理学、非線形物理学	43
量子界面物性	表面・界面、量子構造、局所解析、太陽電池・蛍光素子・受光素子、物性基礎	45
表面科学	ナノテクノロジー、エネルギー・環境、カーボン、電池、表面科学、装置開発	47
高分子化学	高分子化学、有機合成化学、超分子化学、錯体化学、ゲル、 π 共役系高分子、凝集誘起型発光	49
触媒有機化学	精密有機合成、有機金属化学、金属クラスター、担持型触媒、水素化、ヒドロシリル化	51
機能セラミックス	セラミックス材料、化学溶液法、イオン伝導(固体電解質)、電池、結晶配向	53
一般教育分野 DIVISION OF GENERAL EDUCATION		
人文科学分野(哲学)	哲学、対話的思考、人間力、教養教育、リベラル・アーツ、アクティブ・ラーニング	55
外国語分野(手話言語学)	手話言語学、日本手話、音素配列論、音節、適格性	57
外国語分野(異文化トレーニング)	異文化コミュニケーション、異文化トレーニング、英語教育、日本語教育	59
健康・体力分野	ジャンプ、アキレス腱の形態、下肢筋力、スティフネス、無酸素パワー	61
研究プロジェクト RESEARCH PROJECTS		
豊田工業大学 研究プロジェクト		63
共同利用施設 FACILITIES FOR COLLABORATION		
共同利用クリーンルーム		66

キーワード	燃焼、伝熱、エネルギー、環境、安全工学
相談・提供 可能技術	燃焼・爆発全般(実験、数値計算)、固体燃料ガス化、自然発火、爆発/安全対策 噴霧微粒化、接触熱抵抗、エネルギーシステム、バイオマスの燃料化、粗悪燃料

◆研究室スタッフ

教授： 武野 計二

問合せ先 : takeno@toyota-ti.ac.jp



◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

人類の生活に欠かせないエネルギーを、如何に高効率、安全、クリーンに造り出すが最終的な研究目的です。さらに再生可能エネルギーとして注目されるバイオマス(草木)の高効率エネルギー変換を目指しています。

本研究室で注力している燃焼現象は、流体力学、伝熱、熱力学、化学反応、移動速度論、数値計算などを基礎とする複合現象であり、現在問題となっている大陸から飛散するPM2.5(2.5 μ m以下のParticle Matter)の生成メカニズムでさえ研究途上にあります。この複雑な現象を基礎実験、理論、モデル化、数値計算によってアプローチしていきます。

また、燃焼、伝熱、エネルギーは産業界では必須となる領域であり、大きな視点で社会の要求を見据えながら、基礎現象を追求する姿勢で研究を行っています。

◆研究テーマと成果

Open Jet 火炎

- 成果：・水素Jet火炎の特性把握(火炎スケール、着火/保炎機構、衝撃波構造と保炎の関係ほか)
・素反応を考慮した圧縮性数値計算による着火解析
・拡散濃度の変動解析
- 課題：・保炎できない範囲の出現理由
・他燃料(CH₄など)での着火/保炎機構
・数値計算で、Blow-offが計算できるか？(分散火炎における局所的消炎)

熱面の物理的形状の発火現象に及ぼす影響

- 成果：・矩形の表面凹凸に対して、発火点に及ぼす流速、温度、当量比の関係を把握
- 課題：・経験的にも理論的にも、100 μ mオーダの表面粗さの影響はあるはず

固体の燃焼・ガス化過程における反応機構、特に未燃分の形成

- 成果：・1500℃までの石炭、バイオマスの熱分解、ガス化データ取得
・構造パラメータの導入によるガス化機構解析
・タールの素反応シミュレーション、水分子の影響
- 課題：・物理構造変化、炭素構造変化への言及

固体燃料の自然発火メカニズム

- 成果：・天然の炭化水素固体燃料の長時間における発熱、昇温過程のメカニズム
- 課題：・数値計算

高粘度流体の噴霧特性、キャビテーション、及び数値計算

- 成果：・噴霧特性データ取得、キャビテーションの出現条件、粘性の影響
ノズル内数値シミュレーションと実験との比較
- 課題：・VOF法による液滴の分裂、融合

特異的な伝熱現象

- 成果：・球体の接触面における熱抵抗、熱抵抗のヒステリシス特性、真空中での伝熱実験
- 課題：・接触面における気体の存在(対流、酸化)、接触電気抵抗との関係

◆研究室の保有技術と設備

熱分解・ガス化・燃焼試験装置

- ・高温 (MAX1800℃) 加熱・熱分解装置
- ・水平JET火炎の観察装置一式
- ・PIV、シャドウグラフ、高速シリュースン写真による燃焼・ガス化解析装置

分析装置

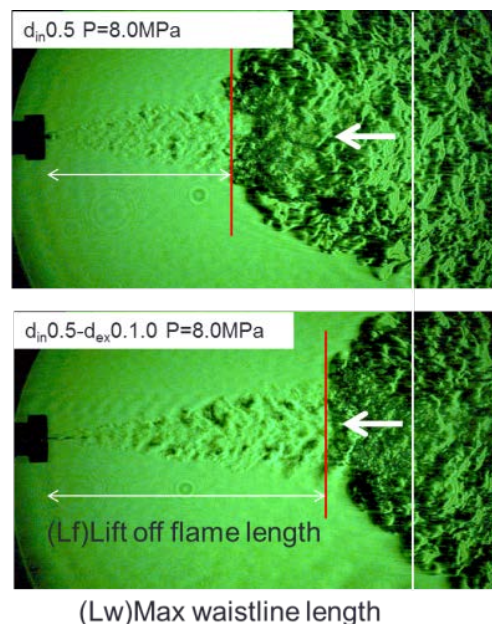
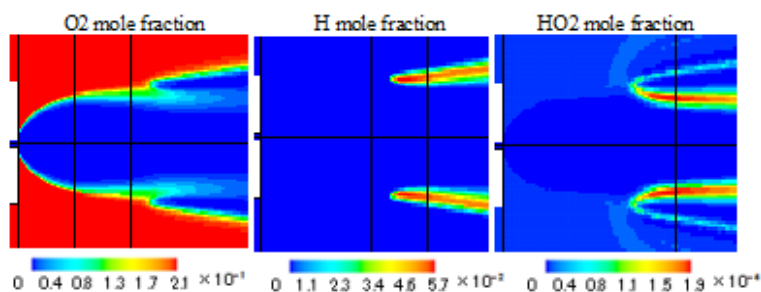
- ・分解ガスの微量成分高速分析装置 (GC-MASS)
- ・イオンクロマトグラフ+アニオンオートサプレッサー： 微量環境成分などの分析
- ・ガスクロマトグラフ
- ・熱分析装置 (DTA)

数値計算機器 (ワークステーション、熱流体解析ソフト)

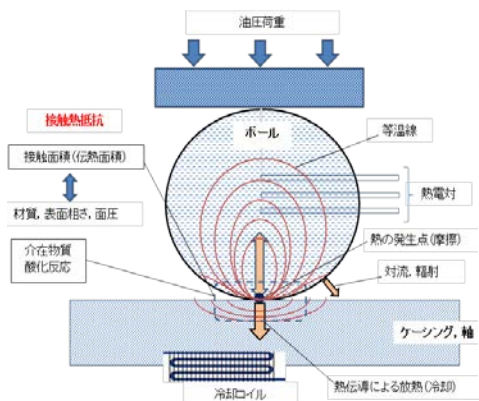
高速度カメラ、赤外線カメラほか映像記録系

◆企業との接点・共同研究のご提案

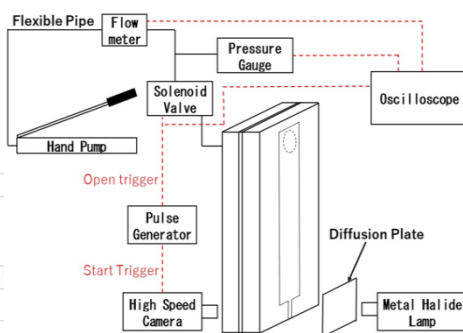
- ・燃焼、伝熱、エネルギーは産業界では必須となる領域であり、大きな視点で社会の要求を見据えながら、**基礎現象を追求する姿勢**で研究を行っています。
- ・これまでも、以下の分野における**基礎研究**、**実用機器の開発研究** (ボイラ、GT、ロケット、廃棄物ほか) の多くの経験を有します。
 - ・燃料評価、噴霧解析 (キャビテーション)
 - ・熱分解、ガス化、燃焼の基礎現象の取得、数値解析
 - ・安全工学関係 (火災、爆発) 相談、解析
 - ・接触熱抵抗 (平面-平面間、平面-球面間ほか)
- ・また、企業における長年の経験から、**燃焼・伝熱関係の不具合解析や改善**、**爆発・火災などの事故解析と対策**、**大規模災害評価**、**エネルギーシステム評価**についても各種ご相談に応え得るものと考えております。



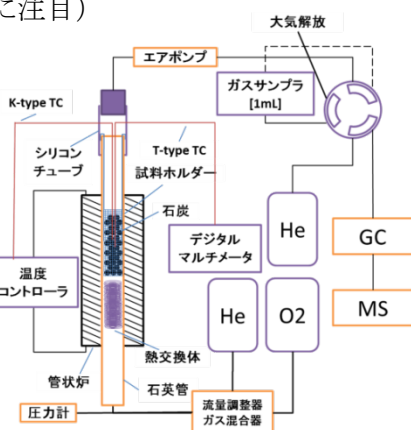
10MPa水素拡散火炎の火炎基部の観察と数値解析例 (保炎／吹き飛び条件ほか)
(O₂の流れと、HO₂ラジカルの生成によるInitiationに注目)



接触熱抵抗の計測
(転動体を想定)



高粘度液体の噴霧実験
(キャビテーション発生条件等)



バイオマスのガス化実験 (GC-MS等による生成物分析、低温での反応機構)

流体工学研究室

— 光計測技術を用いた高速流れ現象の解明と流体制御法に関する研究 —

キーワード 遷音速・超音速・極超音速流れ、流体制御、非接触光学流体計測

**相談・提供
可能技術** レーザー誘起蛍光法、分子タギング法、感圧塗料

◆研究室スタッフ

教授: 半田 太郎

准教授: 渡邊保真

問合せ先 : handa@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

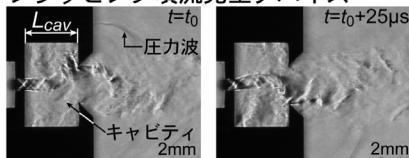
流速が音速を超える“超音速流れ”は高速で飛行する航空機・ロケットの機体周りやエンジン内部だけでなく、MEMSデバイス、ターボ機械、溶射など様々な工学機器で現れます。本研究室では流速が音速を超えるまたは音速に近い高速流れ(圧縮性流れ)を能動的に制御するための手法の開発を行っております。また、高速流れの現象をレーザーや分子センサーを用いた光計測技術により解明する研究を行っております。

◆研究テーマ

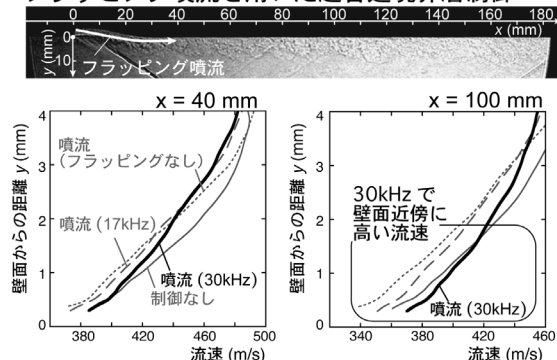
1. 高速気流の能動制御

音速付近から音速の5倍以上で飛行する航空機の機体周りやエンジン内部に現れる数百m/sから千数百m/sの流れは衝撃波に起因する現象が存在し、このような現象を上手く制御することで、将来型航空機の性能や効率、姿勢制御の高速化と安全性向上に寄与できます。本研究室では、フラッピングと呼ばれる特殊な運動をする噴流やプラズマ放電を利用することで、遷音速・超音速・極超音速流れを能動的に制御する新しい手法の開発を行っております。

フラッピング噴流発生デバイス

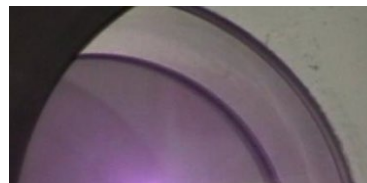


フラッピング噴流を用いた超音速境界層制御



高周波フラッピング噴流発生デバイスを用いた超音速流れ制御

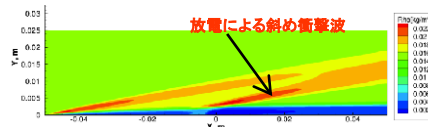
極超音速流れ中の平板上でのプラズマ生成



プラズマ生成による衝撃波(SW)位置の制御



数値解析による対応流れ場の詳細予測

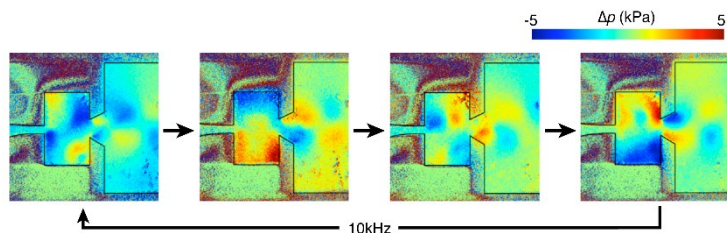


放電プラズマを利用した
マッハ7極超音速流れの高速制御

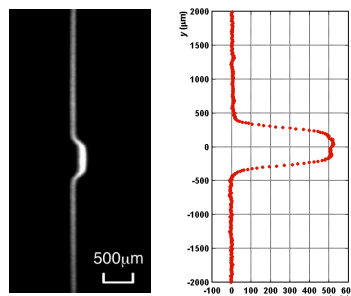
◆研究テーマ(つづき)

2. 高速流れの高空間・時間分解能計測手法の開発

高速流れの現象の理解を深めるには、流れを高い空間・時間分解能で計測する必要があります。本研究室では、分子から放出される蛍光や燐光の情報から高速流れを計測する手法を開発し、高速気流に特有な現象の解明を目的に研究を進めております。現在では感圧塗料を用いた高周波非定常圧力計測法の開発研究を行っており、数十kHzの圧力変動場を精度良く測れるようになりつつあります。また、レーザー誘起蛍光法や分子タギング法と呼ばれる気流中の分子の燐光・蛍光の情報から速度や密度を計測し、高速気流に特有な現象の解明を行なっています。



感圧塗料を用いた10kHz圧力変動場の計測

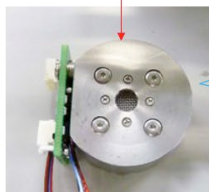


分子タギング法による速度計測

3. 宇宙輸送・惑星探査技術の開発

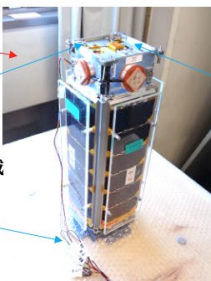
将来の火星探査計画を目標に、小型機による多点分散型惑星探査を実現するための大気突入技術及び超小型観測機器の開発に取り組んでいます。本研究ではJAXA宇宙科学研究所と連携し、これまでにエアロシェルを利用した新型大気突入技術の開発と実証試験を実施しました。現在は、小型探査機の軌道上での対気姿勢を計測するイオン計測器、及び、化学的に安定した水を推進剤として利用する超小型エンジンを開発しています。今後、これらの技術について軌道上での実証試験を行う予定です。

イオン検出用
超小型ファラデーカップ
(対気姿勢を計測)



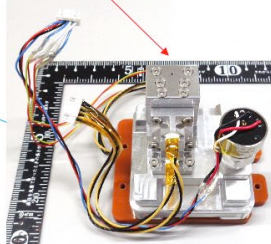
大気突入実証衛星BEAK

両端にイオン検出器を搭載



水レジストジェット式
超小型推進器TWEET

上面に
推進器を搭載



◆研究室の保有技術と設備

- レーザー誘起蛍光法、分子タギング法用光源:Nd:YAGレーザー(波長266nm, 定格出力90mJ)
- 高速度カメラ(最高フレームレート1Mfps)
- 高速度カメラ(カラー・最高フレームレート200kfps)
- 高速ゲート付きICCDカメラ(最短ゲート時間5ns)
- 感圧塗料励起用LED光源(波長365nm, 385nm, 470nm, 出力90W)
- シュリーレン光学系一式(最高1MHz・最短10nsパルス・高輝度光源あり)
- 無隔膜式ショックチューブ

◆企業との接点・共同研究のご提案

本研究室では粒子追従性の問題でPIV(粒子画像流速測定法)では計測できないような流れの速度を計測できる分子ダグ法の計測技術を保有しております。また、気流中にある物体表面の圧力を高空間分解能で計測できる感圧塗料の技術を保有しております。

キーワード	CAE, Optimum design, CFRP, Damage analysis, Structural analysis, Shell structure
相談・提供 可能技術	各種の構造体を対象としたCAE解析、最適設計技術、複合材の損傷シミュレーション

◆研究室スタッフ

教授: 下田 昌利 准教授: 椎原 良典
PD研究員: AL ALI, Musaddiq

問合せ先 : shimoda@toyota-ti.ac.jp , shiihara@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

軽いものは弱く、重いものは強い。 ”軽いこと”と”強(剛)いこと”という一見相反する特性を両立させてこそ競争力に優れた製品を生み出すことができる。私たちは、多彩な材料シミュレーションを駆使した構造最適化や強度評価を通じてこの“矛盾”を克服し、高付加価値な機械材料/構造設計を支援するための方法論の確立とその実設計への応用を目指しています。併せて、その基礎となる構造解析や、ナノからマクロまでの様々な材料シミュレーション技術、数理デザイン、感性や人体負荷を考慮した設計の研究も行っています。提案する方法論や手法は何れもこれまでにない新規性、実用性を有したものです。

◆研究テーマと成果

- 3次元ソリッド体の形状最適化手法の開発に関する研究
 - ・鋳物、鍛造部品のノンパラメトリックな実用形状最適化手法とシステムの開発
 - ・異種材料構造(クラッド材、複合材料、超弾性材料)の接合界面の形状設計手法の開発
 - ・地震荷重(繰返し弾塑性問題)に対するエネルギー吸収デバイスの開発
 - ・異種材料からなる周期性マイクロ構造を利用したマルチスケール構造設計手法の開発
- 板・シェル・膜構造の形状最適化理論とその構造設計への応用に関する研究
 - ・フリーフォーム形状最適化理論の開発とその実構造への応用(剛性、強度、振動、座屈問題)
 - ・音場—構造連成系(閉・開空間)、熱伝導—弾性系問題 等のマルチフィジクス問題の解法
 - ・衝突荷重に対するエネルギー吸収デバイスの開発
 - ・スリット、リブ、溶接等の応力不連続境界の形状設計法に関する研究
 - ・複合材料、異種材料からなるシェルの形状&トポロジー&板厚&配向角のハイブリッド設計(マルチマテリアル、マルチスケール構造)
 - ・膜・ケーブル構造(張力構造)の最適形状設計に関する研究
- 骨組構造のノンパラメトリック構造最適設計に関する研究
 - ・自由曲線骨格構造の最適形状設計手法の開発(剛性、強度、振動、座屈問題、変位制御)
 - ・周期性マイクロフレーム構造を用いたマルチスケール形状最適化の研究
 - ・ナノ構造(グラフェンシート)の連続体モデリングと形状最適設計法に関する研究
- 大規模破壊シミュレーションを実現する粒子ベース連続体解析手法(ペリダイナミクス)の開発
- ナノスケールにおける力学状態解明のための原子レベル応力計算手法の開発
- スマートビークルの軽量設計に関する研究
- 生物系、感性系を考慮した設計手法に関する研究
 - ・人体への負荷や感性、デザイン性を考慮した人工物の構造設計に関する研究
 - ・摩擦や触感を考慮した表面テクスチャリングに関する研究

◆研究室の保有技術と設備

＜保有技術＞

- ・FEMによる構造解析&構造設計(強度, 剛性, 振動等)(陽解法, 陰解法) ・3Dモデリング
- ・ペリダイナミクスによる材料損傷解析技術 ・第一原理計算等のナノシミュレーション技術
- ・構造最適化手法(パラメトリック&ノンパラメトリック)

対象: 3Dソリッド体, 板・シェル構造, 骨組み, 膜構造

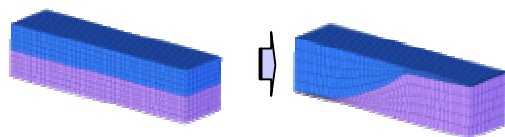
＜保有設備＞

- ・汎用構造解析ソフトウェア(線形, 非線形, マルチフィジクス) & ワークステーション, 人体FEMモデルTHUMS
- ・卓上材料試験機(10kN, 250kN) ・真空成形機 ・卓上工作機
- ・3次元スキャナー & 接触式小型3次元測定器
- ・積層造形機(3Dプリンター), 3次元プロッター
- ・モーダル解析装置
- ・非接触ひずみ, 運動測定装置ARAMIS, PONTOS(画像処理による), 高速度カメラ
- ・デジタルマイクロスコープ, ハイスピードマイクロスコープ, ワンショット3Dマクロスコープ
- ・3方向反力計測装置トライボギア
- ・筋電位計測装置
- ・圧力分布測定装置

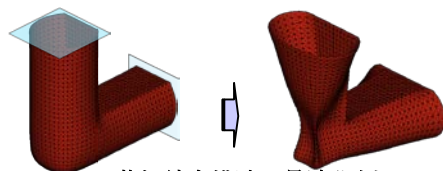
その他, スーパーコンピュータ(他大学所有)上の超並列計算環境が利用可能.

◆企業との接点・共同研究のご提案

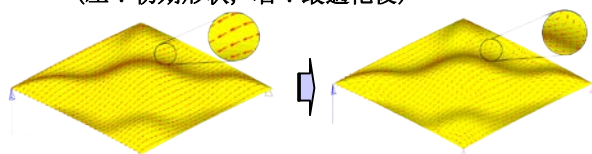
構造・形状最適化や, 材料損傷評価のための理論の構築からアルゴリズム, プログラムの開発を行い, 数値実験や(模型)実験を通して検証するのが研究スタイルになっています. そのため, 材料力学や固体力学, 構造力学, 有限要素法, 最適化理論, 構造解析(CAE), 数値計算, プログラミングが基本技術となります. いずれも企業の研究・開発, 設計の現場で要求される知識・技術です. 基礎研究に留まらず, その自動車構造等への工業的応用までを意識しながら幅広く研究を行っています. 前述のテーマに関連した内容に限らず, 固体力学分野のテーマであれば一緒に研究を進めることができると思いますので, ご相談下さい. 学生も共同研究に加わり, 先端の研究を理解し, 問題意識を持って主体的に取り組む姿勢と問題解決できる実力を研究活動を通して養わせています. 以下は最適設計および材料損傷評価に関する研究成果の一例です.



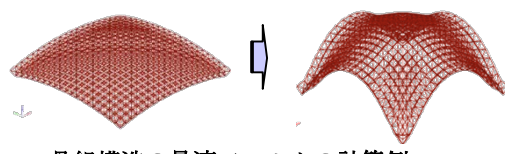
曲げ荷重下の複合ソリッド体の最適界面形状
(左: 初期形状, 右: 最適化後)



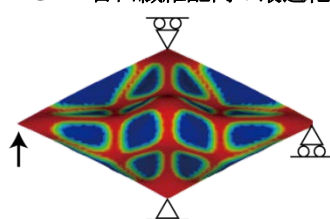
薄板結合構造の最適化例



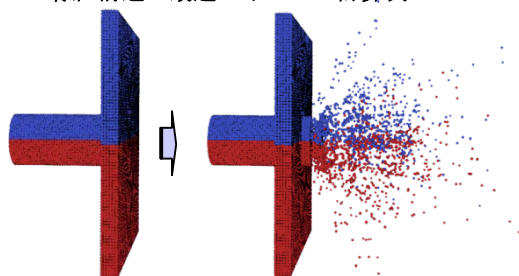
CFRP自由繊維配向の最適化例



骨組構造の最適フォルムの計算例



シェルの形状とトポロジーの同時最適化例



ペリダイナミクスによる円筒の貫通シミュレーション

設計工学研究室

— 未来製品を創造するコンピュータ援用設計の研究 —

キーワード	感性工学, 構造最適化, システム最適化, 機械学習, Human Machine Interface
相談・提供可能技術	顧客の感性に基づく製品評価・設計, 構造最適化, システム最適化, 機械学習, 力覚提示装置を用いたUAVの操作, 脳波や脳血流の測定に基づく被験者の状態推定

◆研究室スタッフ

准教授: 小林 正和

PD研究員: BENAISSA, Brahim

問合せ先 : kobayashi@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

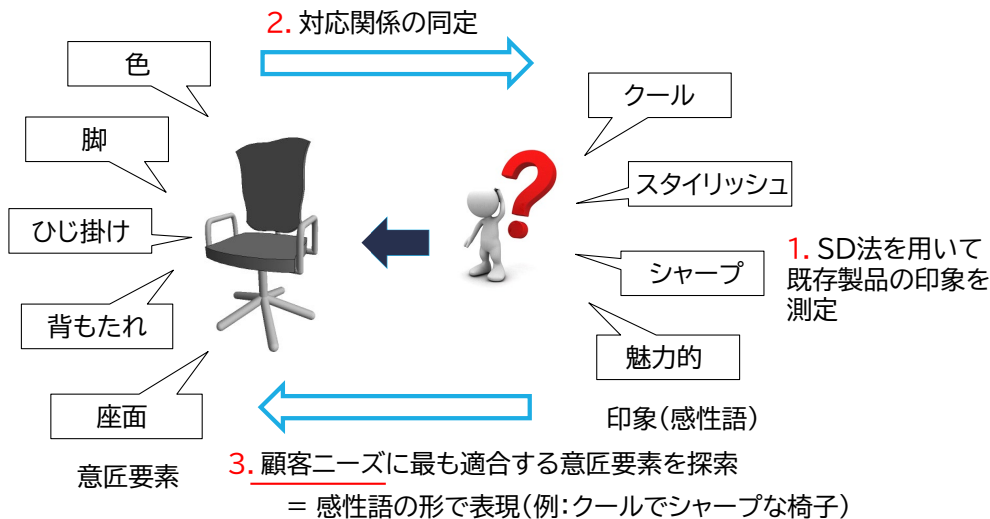
製造業においては、製品開発の期間短縮, 高品質化, 効率化のためにCADシステムが不可欠のツールとして利用されている。しかしながら, 我が国産業界の抱える国際競争力の強化, 環境問題や少子高齢化問題に対処するため, 高機能製品や自律知能機械などの開発を行うには, 新しい枠組みのCADシステムが必要である。そこで, 本研究室では, 設計者の知的能力を高めることができるよう, 計算機を用いた設計支援や設計最適化, 構造最適化とその応用, 感性工学に基づく意匠設計, 創造性支援などの, 機械工学と情報科学技術を融合した新しい設計システムを研究している。

近年は, 機械学習, 特に, 深層学習を用いた新しい設計システムの検討を行っている。深層学習は様々な分野で応用され, 多くの成果を上げているが, 設計工学の分野ではまだ十分に使われていない。深層学習のデータの含まれる特徴を自動的に学習する能力を利用することで, 設計者と計算機の知的能力を融合した, 新しい設計システムが期待できる。

◆研究テーマと成果

1. 顧客の感性に基づく製品評価・設計

- ANN(人工ニューラルネットワーク)とGA(遺伝的アルゴリズム)を用いた最適意匠設計
- CAM(クラス活性化マッピング)を用いた顧客の選好と製品意匠の対応関係の分析
- GAN(敵対的生成ネットワーク)を用いた意匠創成
- 脳波測定に基づく車内空間の感性評価



顧客の感性に基づく意匠設計の基本的な考え方

(顧客が製品から受ける印象と, 製品が持つ意匠の対応関係を同定し, 顧客ニーズにもっとも適した製品意匠を創成)

2. コンプライアントメカニズムの最適設計法と応用

- ・ トポロジー最適化と形状最適化に基づく2段階最適設計法
- ・ 自動車・車椅子のサスペンションへの適用
- ・ 熱駆動型マイクロバルブへの適用



GANを用いた意匠
(顧客が好くと評価した製品をGANに学習させ、
新しい製品意匠を生成)

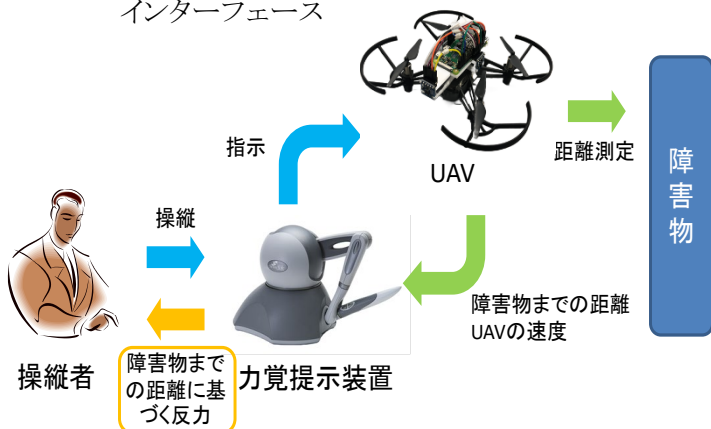
3. 座屈を考慮した薄板構造物の構造最適化

- ・ 深層学習を用いた座屈特性の評価
- ・ Grid stiffened structureへの適用

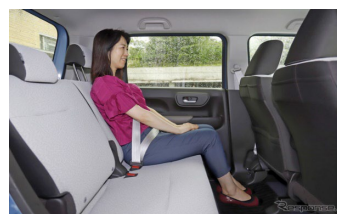
4. 機械学習を用いた翼の内部構造の寸法最適化

5. 難環境作業ロボットシステムの開発

- ・ 力覚提示装置を用いたUAVの操縦インターフェース



力覚提示装置を用いたUAVの操縦インターフェースの
基本的な考え方
(障害物までの距離に基づく反力を操縦者にフィードバックする
ことで、視覚によらない障害物認識が可能になり、障害物の多
い環境で安全かつ高速な飛行が可能)



脳波測定に基づく車内空間の感性評価
(図はイメージ)



コンプライアントサスペンションの試作例
(左: 自動車用の小型モデル, 右: 車いす用の組み込み例)

◆ 研究室の保有技術と設備

保有技術:

各種最適化手法

各種有限要素解析(構造, 振動, 熱, 音響)

各種構造最適化(寸法最適化, 形状最適化, トポロジー最適化)

各種機械学習

脳波や脳血流の測定に基づく被験者の状態推定

◆ 企業との接点・共同研究のご提案

1. システム最適化

当研究室が保有する各種最適化技術を基に、機械システムや情報システム、生産システムなどの各種システムを対象とした最適設計システムの検討を行います。

2. 構造最適化

コンプライアントメカニズムの御社の機械部品へ適用可能性の検討を行います。

3. 顧客の感性に基づく製品設計

具体的な製品を対象に、深層学習を含む各種機械学習を用いた意匠設計法の実現可能性の検討を行います

4. 脳波や脳血流の測定に基づく製品評価

脳波や脳血流の測定に基づく、アンケートによらない客観的な製品評価が可能になります。

キーワード	メカトロニクス、圧電アクチュエータ、放電加工
相談・提供 可能技術	圧電アクチュエータの応用、精密位置決め機構、放電加工

◆研究室スタッフ

教授: 古谷 克司

問合せ先 : furutani@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

科学技術を発展させ、ものづくり産業へ適用するためには、それを支える新しい機械装置およびそれを作るための加工法の開発が欠かせません。これらの技術は独立しているのではなく、互いの発展により、さらなる発展がもたらされます。

本研究室では、高度メカトロニクスと物理・化学現象とを有機的に複合させることにより、多くの工業製品を高精度に生産するための装置や技術を開発しています。

1. 超精密位置決め機構

ナノメートル(10^{-9}m)オーダの精度を目指して、先端メカトロニクスを基礎から応用にわたり研究しています。その一つとして圧電アクチュエータを用いて、通常サイズの機械とマイクロマシンの隙間を埋めるサイズの機構を開発しています。

2. 超精密加工のための基盤技術

高精度に工業製品を製作するための基盤技術として、放電加工などの特殊加工法の研究とあわせて、加工装置やインプロセス測定法などの周辺技術も含め、統合的な加工システムに関しても研究を行っています。

3. 月・惑星探査機器の要素技術

月・惑星などを対象とした科学探査のために、真空中で動作するメカトロニクス機器、加工技術の開発を行っています。

◆研究テーマと成果

1. アザラシ型精密位置決め機構

圧電アクチュエータを利用して平面内でマイクロメータオーダでステップ状に移動する機構を開発しました。さらに高精度な機構も製作し、ナノメータオーダの位置決め精度を達成しました。マイクロマニピュレーションシステムにも適用しています。

2. 電流パルスを用いた圧電アクチュエータの変位制御法

本方法を用いると、圧電アクチュエータのヒステリシスが大幅に改善されます。ナノメータオーダの分解能で、ステッピングモータと同様のオープンループ制御ができます。

3. 細穴加工用小型放電加工ユニット

アザラシ型精密位置決め機構を電極送り機構に適用し、小型なユニットを試作しました。多数の穴を加工することが必要とされる小型部品に、細穴を同時に加工する加工システムを構成できます。

4. 月・惑星環境で使用するための岩石試料の加工装置

ワイヤソー切断装置および振動加工による表面平滑化装置を試作し、真空環境下で基本的な加工特性を調べています。特殊環境で作業する機械のための要素技術やそれを製作する技術も開発しています。

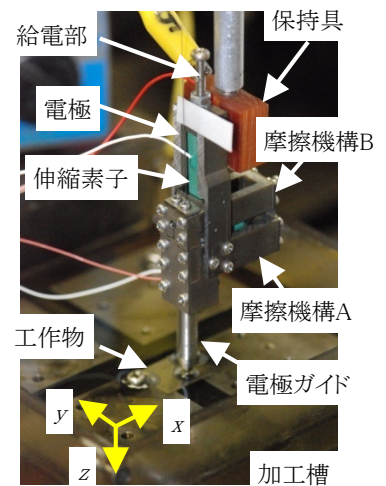
◆研究室の保有技術と設備

技術

- ・圧電アクチュエータの応用
- ・精密機構の設計, 評価
- ・放電加工による精密加工法

設備

- ・測定機器:
 - 機械量: 光学式非接触変位振動計, 高速度カメラ, レーザドップラー振動計, 超高精度レーザ変位計, 静電容量式変位計
 - 電気量: ロックインアンプ, インピーダンスアナライザ, 多チャンネルデジタルオシロスコープ, 電流プローブ
 - その他: 走査型電子顕微鏡, ビデオマイクロスコープ
- ・実験用機器: 宇宙環境試験装置, 高速電力増幅器, 差動アンプ
- ・工作機械: 形彫放電加工機, ワイヤ放電加工機



アザラシ型機構による
電極送り機構

◆企業との接点・共同研究のご提案

*圧電アクチュエータ

- ・圧電アクチュエータの駆動法
- ・圧電アクチュエータ応用機器
- ・圧電素子を用いた送り機構の評価

*精密機構

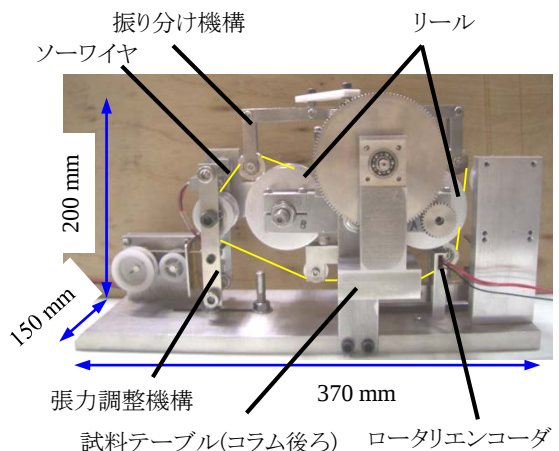
- ・小型移動機構, 小型直動機構
- ・パラレルリンクマニピュレータ
- ・変位や力の精密測定

*加工装置

- ・細穴加工用小型電極送り機構
- ・生産プロセスへの振動の応用
- ・開発製品の自動評価装置

*加工法

- ・放電加工を用いた表面処理法
- ・微細穴加工法
- ・ワイヤ放電加工法
- ・特殊材料の加工法
- ・加工のモニタリング法



月・惑星科学探査のための超高真空対応
ワイヤソー切断装置プロトタイプ

キーワード	光MEMS、微細加工、センサ、マイクロアクチュエータ
相談・提供 可能技術	立体サンプル(機械や光学部品)へのフォトリソグラフィ加工、形状評価、マイクロミラーなどの振動計測、波長選択赤外光源、マイクロプラズマ、ウェアラブル呼吸センサ

◆研究室スタッフ

教授:佐々木 実
PD研究員:韓 剛
研究補助者:若干名

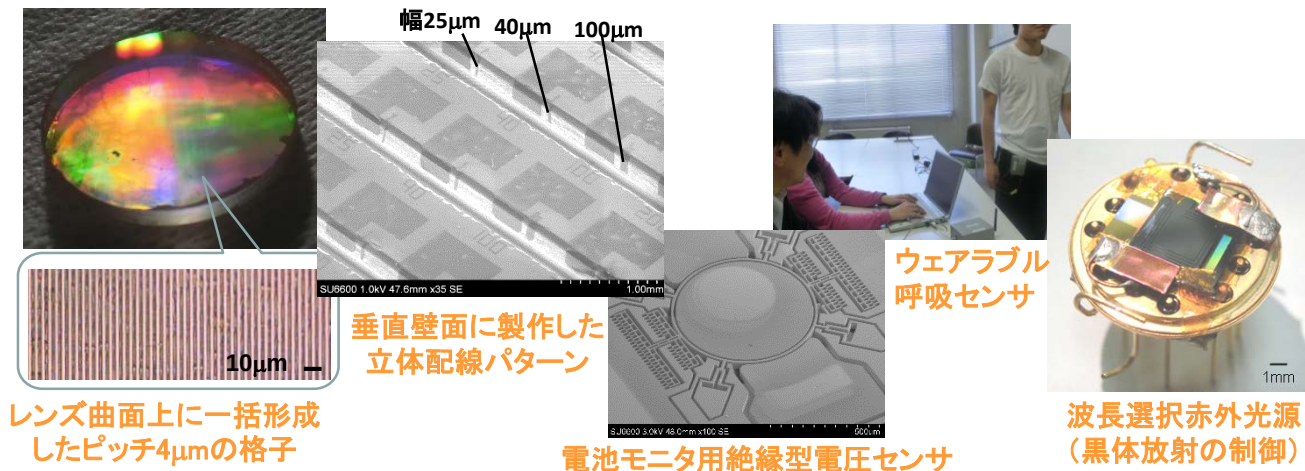
<http://www.toyota-ti.ac.jp/mems/index.htm>



問合せ先: Tel : 052-809-1840, e-mail : mnr-sasaki@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

微細加工技術を駆使して、機能性構造やデバイスを創ります。ロボットなど、人と機械が肉薄する未来を見据えて、安全やエネルギー効率を高めることにデバイス面から取り組みます。機械部品を含む①立体サンプルへのフォトリソグラフィ加工、②MEMSセンサ・アクチュエータ、③マイクロプラズマなどに取り組んでいます。特に①はオリジナルであり、様々な機械部品に機能性表面を、一括で製作できる技術です。



◆研究テーマと成果

- 1. 立体サンプルへのフォトリソグラフィ加工:** これまでスプレー成膜技術を用いて100個直列のマイクロ太陽電池などを実現してきた。最近、標準のスピンコータやアライナが利用できる、新しい方法を見出した。水溶性ポリマー層を含むシートにフォトリソレジストをスピンコートする方法である。シートは平面として扱えるため、レジストの均一な成膜、マスクとの密着露光が可能で、微細パターンの転写に適する。レンズ曲面への微細パターンや、光通信用フォトダイオード実装用の立体配線パターンを製作した。
- 2. MEMSセンサ・アクチュエータ:** 振動型マイクロデバイス(絶縁型電圧センサ、ねじり振動子型赤外線センサなど)を製作した。環境やバイオ計測に有効な、赤外線ガスセンサで求められる波長選択赤外光源に取り組み、熱式の赤外光源ながら表面プラズモンとマイクロヒータの組み合わせにより、特定波長の赤外線強度が、通常の黒体放射の2倍に増加した。ウェアラブル呼吸センサでは無拘束に適した静電容量計測を発展させた。布電極を衣服内側に固定するシンプルな構成で呼吸が測定できる。
- 3. マイクロプラズマ:** 誘導結合型大気圧プラズマ源の小型化と省電力化を実現した。安価な車載無線用電源を利用して、高密度な大気圧プラズマが得られる。これを応用した真空紫外光源や、エッチング高速加工、バイオサンプル処理などを手がけている。

◆研究室の保有技術と設備

シリコン材料の微細加工と評価が一通りできます。ナノテクノロジープラットフォーム事業も参照下さい。赤外線を利用するセンサデバイス、大気圧マイクロプラズマ(紫外光源や表面処理応用)、電力管理用センサ、医療応用ウェアラブル呼吸センサなどに関した設備を保有しています。



高密度プラズマエッチング装置



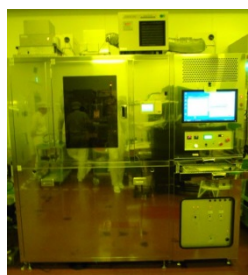
低圧熱CVD装置



動的計測対応の白色干渉計



レジストの
スプレー成膜装置
など立体加工用装置



マスクレス
露光装置



光干渉膜厚計



アッシング装置



触診段差計



半導体パラメータ
評価装置

真空プローバなど
各種自作装置
いろいろ

◆企業との接点・共同研究のご提案

微細加工や計測評価は、ご相談下さい。機械部品も含めた立体サンプルの微細加工についてノウハウがあります。研究員として来て頂ければ、試作に協力することも可能です。

微細加工とは直接関係ない、次のテーマも手掛けています。①誘導結合型大気圧プラズマは、小型で低価格な車載無線用電源を利用して動作するものを実現しました。真空紫外光源向けに、放電ガスを封止するまでに至っています。②ウェアラブル呼吸センサは、市販の導電性布電極を衣服に縫い付けて製作し、有効性を検証しています。無線化も含めて手のひらサイズの計測回路を自作しました。

以下の特許を取得しています。「凹凸表面貼付用フィルムを用いた表面凹凸被処理物への微細パターン転写方法」特許第6742711号、「電圧センサ」特許第6370832、「呼吸を計測する方法」特許第6639787号、「浮遊電極がシールドされた誘導結合型マイクロプラズマ源」特許第6341690号、「呼吸センサ」特許第6084361、「赤外光源」特許第5877602号、「誘導結合型マイクロプラズマ源及びこれを利用した装置」特許第5758086号、「立体形状を持つサンプルへの露光方法及び装置」特許第5649841号、「ねじり振動を利用した赤外線の検出方法とこれを実施したねじり振動を利用した赤外線の検出装置」特許第5523727号、「段差パターンの塗布方法」特許第5231072号、「マイクロミラーデバイスとその製造方法、マイクロミラーデバイスの角度計測方法、およびマイクロミラーデバイスの応用装置」特許第4749790号、「トーションバーを用いた静電駆動型マイクロミラーデバイス」特許第4446038号、「立体構造を持った微小光学系の製造方法とこれを実施した微小光学システム」特許第4112888号、「光ファイバにグレーティングを形成する方法とこれを実施した減衰量可変光ファイバグレーティングフィルタ」特許第4375921号、「透明な半導体受光素子およびその製造方法」特許第4131998号。

キーワード	熱処理、表面改質処理、金属表面機能化、焼結、加工プロセス
相談・提供 可能技術	金属表面硬化熱処理、めっき、焼結（粉末冶金）、微粒子ピーニング

◆研究室スタッフ

教授：奥宮 正洋

研究補助者：日比野 義博

問合せ先：okumiya@toyota-ti.ac.jp(奥宮)

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

構造材料の物理的、化学的、機械的性質など構成相の固有機能をできる限り発現させる独自のプロセス開発を研究方針としており、材料および表面の構造制御、複合化、異相界面制御などによる材料機能の有用性向上や創成を研究対象としている。

◆研究テーマと成果

1. 活性化バレル窒化：

揺動するバレル中の Al_2O_3 ／Al-Mg混合粉末によりAl基材表面を活性化して窒化を行なうバレル窒化法は、5時間で $200\mu\text{m}$ のAlN層を形成可能である。さらなる窒化の促進とバレル槽内に投入する Al_2O_3 の粒径を管理することによる処理後の表面粗度の改善を検討している。本方法はAl粉末の窒化にも適用でき、生成されたAlN粉末を樹脂と混合し、射出成形によりヒートシンクの作製に成功している。

2. 放電プラズマ焼結による被覆層の形成：

金属-セラミックスの焼結や金属の固相接合が可能な放電プラズマ焼結を用い、金属の仕上加工や超硬材料の加工に用いられる単層メタルボンド砥石の創成に成功をしている。従来数時間をかけて電着により形成されていた単層メタルボンド砥石を、数分間で作製することに成功している。

3. 天然ガスを有効利用したガス浸炭：

キャリアガスの窒素に天然ガスを添加して直接炉内に導入し、ガス浸炭を行う際のプロセスパラメータが、炉内におけるガス反応と浸炭量に及ぼす影響について調査した。天然ガスの分解によって発生する水素量にて、鋼への浸炭量の制御が可能とし、湿潤窒素にて煤の発生を抑制した。

4. 微粒子ピーニング処理による高機能化：

微粒子ピーニング処理による金属材料の高機能化について検討を行っている。鉄鋼材料、非鉄材料を問わず疲労強度の向上や、新しい表面機能付与に関する検討を行い、これまでに微粒子ピーニング処理ではショットピーニング処理よりも高い疲労強度向上効果があることを明らかにしている。これに加え、投射材を選択することにより耐食性の向上や潤滑性の向上を得られることを明らかにしている。

5. 液中高周波浸炭：

メタノール中での高周波浸炭焼入れによる鋼の高機能化について検討し、処理時間、処理温度が炭素濃度プロファイルおよび硬さプロファイルに及ぼす影響を検討している。また、浸入炭素濃度の制御および、炭素と同時に窒素も浸入させる方法について検討を行っている。

◆研究室の保有技術と設備

本研究室で有している技術の主なものは以下の通りです

- ・表面活性化熱処理法
- ・CO₂排出量を低減させた表面硬化熱処理
- ・自己潤滑性を有する皮膜の形成
- ・雰囲気制御した表面硬化熱処理
- ・自動車用ベアリングの摺動特性向上
- ・微粒子ピーニングを利用した金属材料の高機能化

当研究室は、めっきや陽極酸化などの表面改質、浸炭・窒化などの熱処理、焼結について研究を行っています。それぞれの分野における課題を、当研究室独自のアイデアと超音波の有効利用、ナノバブルの適用、プラズマの利用など、さまざまな手法で解決をしてきています。

例えば鋼の表面硬化熱処理について、湿潤窒素を炭化水素と混合して炉内に直接導入することで、煤の発生を抑制しつつ、変成炉を用いないで省エネルギーで浸炭を行うプロセスについての技術を有しています。また、地球環境への負荷低減のために、二酸化炭素の排出量を劇的に減少させた浸炭焼入れプロセス(N-クエンチ)に関する技術を有しています。本方法で浸炭焼入れした試料は低ひずみで耐摩耗性を有しており、自動車部品等の表面硬化熱処理法として適用可能です。

Al合金に対しては、バレルと活性化粉末を用いることによって表面窒化を行う技術を有しています。これについては2016年度までサポインにてAl粉末への窒化の研究を行い、高熱伝導AlN粉末を安価に作成することに成功しています。

また、微粒子ピーニング処理については鉄鋼および非鉄金属の機械的特性におよぼす影響に関する知見を有していることと、有限要素解析および実験の両面から目的に応じた最適な処理条件の提案を行うことが可能です。

当研究室の教員は、鑄造工学会、熱処理技術協会、表面技術協会、金属学会および材料学会等で成果を発表したり、それらの学会において、学術研究委員会、国際交流委員会などの委員としての活動を行っており、これらの分野において様々な情報を有しています。

<保有設備>

- ・卓上型ランプ炉(ULVAC MILA3000,5000) 5台
- ・スパッタリング装置(ULVAC 特注)
- ・デジタルファインスコープ(オムロン)
- ・自動研磨機(丸本ストルアス)
- ・鋼中炭素・窒素濃度分析装置(HORIBA)
- ・CO₂ガス分析計, アンモニアガス分析計(HORIBA)
- ・マイクロガスクロマトグラフィー(BARIAN CP4900)
- ・高周波発信器(高周波熱錬)
- ・ベアリンググリース評価試験機(内製)
- ・XRD(RIGAKU)
- ・摩擦摩耗試験機(オリエンテック他)
- ・ウェットブラスト装置(マコー)
- ・4連式回転曲げ疲労試験装置
- ・放電プラズマ活性化焼結装置(UPS-515S)
- ・ダイナミック超微小硬さ計(島津製作所)
- ・引張り圧縮試験機(A&D)
- ・各種硬さ計「ロックウェル他(島津, ミツトヨ他)」
- ・真空・活性ガス雰囲気熱処理炉(特注)
- ・赤外線CO・CO₂・CH₄分析計(新栄熱計装)
- ・ガス浸炭窒化炉(パーカー熱処理工業)
- ・ナノバブル発生装置(アスプ)
- ・EBSD(オックスフォード)
- ・EPMA(日本電子)
- ・薄板曲げ疲労試験機(ハーディック)
- ・微粒子ブラスト装置(不二製作所)

◆企業との接点・共同研究のご提案

これまでもガス会社、電気会社、自動車メーカー、自動車部品メーカー、熱処理関連企業などの様々な会社と共同研究を行い、特許申請、学会での発表等を行ってきています。上記に関するテーマが有りましたら、遠慮なくご相談いただいて、共同研究をさせていただきたいと考えています。また、様々な評価装置も所有していますので、これらを使った評価についても、共同で行えることが有りましたら、ぜひ声をかけください。

キーワード	非圧縮性流れ、定温度型熱線流速計、LDV、PIV、受動的/能動的流れ制御
相談・提供 可能技術	定温度型熱線流速計、LDV、PIVを用いた、周期性を含む流れの位相平均測定

◆研究室スタッフ

助教: 瓜田 明

問合せ先 : urita@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

航空機、高速鉄道車輛や高層建築物等の物体周りの流れや、管路、エンジン等の内部の流れを詳しく理解することは、これらの設計、性能改善や安全性、経済性の向上の面から重要です。本研究室では、これらに関連した多様で複雑な流れ現象を解明し、その流れを目的に応じて制御する方法を、各種の風洞実験やコンピュータによる数値解析などの手法を用いて現象論と理論解析の両面から研究しています。

●流体工学的流れの研究

流体工学上、重要な問題、例えば、種々の翼流れの理論解析および実験研究、各種の二次元・三次元鈍頭物体周りの非定常流れの定量化などを逐次取り上げ、研究を進めています。

●流れの計測・処理法に関する研究

複雑な三次元非定常流れ場を高速に高精度で計測するため、各種センサ、実時間信号処理のハード/ソフトウェア群を開発し、整備・統合化を行っています。

●流れの制御に関する研究

航空機の翼や、多くの流体機械は、流れのはく離・再付着やカルマンの渦列に代表されるような周期的な変動流の発生などにより性能が大きく変化します。本研究室では、これらの流れに対して、様々な手法を用いた受動的/能動的流れ制御の研究を行っています。

◆研究テーマと成果

1. 空気力により変形・振動する弾性翼の空力性能および翼周り流れ構造の解明

近年、各種センサを搭載したドローンと呼ばれる無人小型航空機が、人が容易に近づけない災害現場などの状況確認に用いられ、火星大気中を探索する航空機機として検討されています。このような小型航空機は、軽量化を目的として炭素繊維強化樹脂などの非金属材料が使用されることが多いですが、このような非金属材料は剛性が低く、その変形や振動によって空気力の大きさや方向が変化します。従来から柔軟な物体まわりの流れは、様々な物体形状、例えば角柱などの鈍頭物体や、デルタ翼、二次元翼などの航空機翼について調べられてきましたが、これらの研究は物体が流体力により変形した結果、空力特性や後流流れ場に及ぼす影響に着目しており、より直接的な影響を持つ翼自体の振動と空力特性の関係に着目した研究例はほとんど見られませんでした。そこで、翼の柔軟性によって生じる変形・振動と空力特性との関係を明らかにすることを目的とし、柔軟な三次元平板翼の全迎え角特性とその変形・振動の測定などを行っています。また、これらの結果から、弾性翼に生じる振動の形態、翼の剛性により空力特性が大きく影響を受ける翼周り流れの条件、空力特性が改変される機構について明らかにしています。

◆研究テーマと成果

2. 非定常空気力計測法の開発

近年、ドローンと呼ばれる無人小型航空機が多く用いられるようになってきています。このような小型航空機では、有人機では困難な、危険な環境での飛行や極めて加速度の大きな機動を行わなければならない場合があります。その際、様々な方向から大きな非定常性を有する空気力が作用することが考えられます。また、このような分野では、翼自身が空気力により変形・振動し、その結果空気力の大きさや方向が変化する、柔軟性を有する弾性翼の適用にも注目が集まっています。しかし、従来から実験用航空機模型などに作用する空気力の計測に用いられてきたロードセルでは、作用する力の方向により測定精度に違いがある、正確に測定できる変動力の周波数が低い、といった制限があり、柔軟な翼の空力特性測定において必要となる荷重方向に対する測定精度の非依存性や激しく変動する非定常力に対応できる高応答性が実現できていませんでした。本研究では、非定常空気力を測定するための等方性を有する高応答ロードセルを開発することを目的としています。ロードセルの固有振動数として400Hz程度、寸法は従来のものと同等の、直径、高さ共に100mm程度を目標としています。

3. 受動的/能動的流れ制御法の開発

流れのはく離・再付着現象は、航空機の空力特性やディフューザ等の流体機械要素の性能、燃焼器・熱交換器のような熱流体機器の作動効率に大きな影響を与えます。そのため、従来からはく離・再付着を伴う流れの制御に関する研究が数多くなされています。最近では流れの状況に応じて制御パラメータを幅広く変化させることができる能動的流れ制御に注目が集まっています。従来の研究では、制御の手段として渦発生ジェットや音響かく乱、振動壁面などを用いた実験が多かったですが、最近では、比較的小さな入力エネルギーで大きな制御効果が期待できる方法として、噴出・吸い込みを繰り返し実質的な流量が零であるような周期変動噴流 (Synthetic Jet) を用いる試みがなされており、特定の翼型や滑らかな拡がり流路に適用した例等、いくつかの研究が報告されています。しかし、これらの研究では、周期変動噴流の周波数範囲や噴流速度が狭い範囲に限られており、噴流条件を広範囲にわたり変化させた場合の効果や、その結果生じる流れ場の詳細については十分な研究がなされていません。本研究では、従来から数多くの研究がなされている基本的な流れの一つである後方ステップ流れを対象とし、数十m/sの低速流中に置かれたステップエッジ部近傍から周期変動噴流を付加して、その周波数、噴流速度を広い範囲にわたって変化させ、再付着点位置の変化に着目して噴流条件の影響を明らかにします。さらに、ステップ後方の速度場、渦度場等の時間平均流れや、付加された変動噴流周波数に同期して生じる周期的な組織流れ構造の詳細を明らかにし、周期変動噴流によってはく離・再付着流れの状態が改変される機構を解明します。

これらの他、本学の流体力学研究室とも有機的に協力関係を持ち、高速流れ制御用アクチュエータの開発や超音速・希薄流れ中における物体の空気力学的な特性の解明などの研究を行っております。

◆研究室の保有技術と設備

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| ○吹き降ろし式風洞 (～56m/s) | ○回流水槽 |
| ○自動計測用三次元移動装置 | ○定温度型熱線流速計システム |
| ○二次元レーザードップラー流速計 (LDV) | ○粒子画像流速計 (PIV) |
| ○三分力ロードセル | ○高速度撮影システム (～2000fps) |
| ○高速フーリエ変換器 (FFT) | ○実時間位相平均計測システム |

◆企業との接点・共同研究のご提案

本研究室では非圧縮とみなせる流れを対象として、流れ場の詳細な構造をその特性に応じて熱線流速計、LDV、PIVにより測定する技術を保有しております。また、周期的な変化を含む流れ場の組織的構造を明らかにするための、これらの計測機器を用いた位相平均計測技術を有しております。

半導体研究室

— 次世代のクリーンなエネルギーを担う 高効率太陽電池の研究開発 —

キーワード	高効率太陽電池、結晶シリコン、III-V族化合物多接合、エネルギー
相談・提供 可能技術	半導体関連の試作・評価(表面構造・結晶方位解析、結晶構造評価、電気的特性評価、欠陥解析、透過率・反射率測定)

◆研究室スタッフ

教授: 大下 祥雄 講師: 小島 信晃

招聘・訪問研究員: 山口 真史、林 豊、中村 京太郎、Hyunju Lee

問合せ先 : y_ohshita@toyota-ti.ac.jp、nkojima@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

太陽電池を用いた太陽光発電は、2100年までには世界のエネルギーの7割を占めると予想され、エネルギー・環境問題を解決するためのクリーンな新エネルギー源として益々重要となっている。半導体研究室では、新エネルギー源の実現をめざした結晶シリコン太陽電池、太陽電池用新素材に関する基礎的研究、デバイス物理に基づく光・電子機能デバイスの創製等に関する研究を行なっている。

上記研究の多くは、文科省やNEDOの研究開発プロジェクトとして採択されて推進している。現在、研究プロジェクト「移動体用太陽電池の研究開発(超高効率モジュール技術開発)」をNEDOから受託している。

本研究室の主な独自性を以下に示す。

- ① 新規材料・プロセス開発からデバイス試作までの総合的な研究体制
- ② 層状半導体を中間層に用いたSi基板上III-V層エピタキシャル技術、III-V層リフトオフ技術

◆研究テーマと成果

1. 高効率結晶シリコン太陽電池および基板結晶の研究

太陽電池の更なる普及を進めるためには、現在の結晶Si太陽電池の更なる高品質化が極めて重要であり、そのための新しい基盤技術の開発を行っている。多結晶Si中の粒界特性と熱処理前後の金属不純物分布・電気特性の関係をEBIC測定結果をもとに検討し、粒界構造とそこでの少数キャリアの再結合速度、さらにはそれらに与える熱処理温度の関係が明らかになってきている。また、従来のpn接合を用いない新規高効率太陽電池であるキャリア選択型太陽電池に関して、デバイス構造、シリコン結晶、電極材料、パッシベーション材料に関する研究を進めている。

2. 超高効率・低コスト太陽電池・材料の研究

III-V族化合物半導体は、多様な材料で任意のバンド・プロファイルを持つ多接合構造太陽電池を構成することで、40%以上の超高効率光電変換が可能である。低コスト化を実現するため、Si基板上III-V層エピタキシャル成長、およびIII-V層のリフトオフに関する研究を行い、層状半導体を中間層に用いたIII-V層の成長とリフトオフを達成している。さらに、変換効率50%以上が期待できる4接合用新材料として、InGaAsN材料の高品質成膜と物性・欠陥評価に関する研究を行っている。

◆研究室の保有技術と設備

下記には、共同研究で支援可能な主な装置を示す。

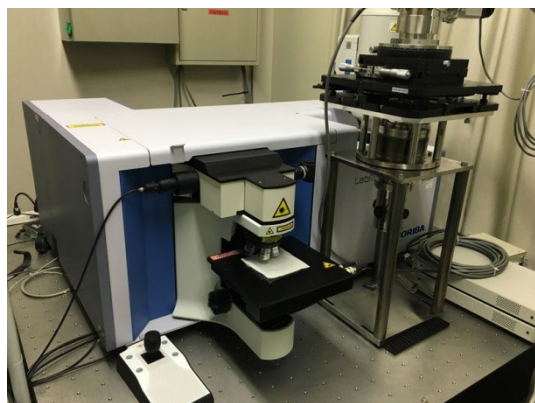
- ①結晶性解析X線回折装置:結晶構造評価(ロックンガープ測定、逆格子空間マッピング測定、極点図解析等)
- ②DC & ACホール効果測定装置:電気的特性(キャリア濃度、移動度)評価(測定温度4~400K)
- ③フォトルミネッセンス/ラマン散乱分光測定装置
- ④太陽電池特性評価装置(分光感度特性(多接合セル)、ソーラーシミュレータ、キャリア寿命等)



結晶性解析X線回折装置



DC & ACホール効果測定装置



フォトルミネッセンス/ラマン散乱分光測定装置



多接合太陽電池対応型分光感度特性測定装置

◆企業との接点・共同研究のご提案

研究設備は整っており、NEDOの高効率太陽電池研究開発プロジェクトを中心として、関係企業との共同研究を幅広く推進している。また、「マテリアル先端リサーチインフラ(ARIM)事業」(文部科学省)による支援プログラムに参加しており、半導体材料・デバイスの試作・評価の支援や共同研究も積極的に取り組んでいる。

キーワード	窒化ガリウム(GaN)、化合物半導体、ヘテロ接合、トランジスタ、作製プロセス、高効率
相談・提供可能技術	AlGaN/GaNなどの化合物半導体ヘテロ接合を用いたトランジスタ、作製プロセス、デバイス特性の測定評価、解析とモデル化、特性シミュレーションおよび応用に向けた技術

◆研究室スタッフ

教授：岩田 直高

PD研究員：VILLAMIN, Maria Emma C.

問合せ先：iwata@toyota-ti.ac.jp



◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

現代社会は、半導体デバイスで構成された電子機器無しでは、立ち行かない状況です。最近では、持続可能な省エネルギー社会の実現に向けて、低コストで高効率動作する電力制御用トランジスタの実現が強く求められています。

電子デバイス研究室は、これに向けた研究を進めます。具体的には、窒化ガリウム(GaN)トランジスタを中心に、低コストで高効率動作する新構造半導体デバイスの研究と、それを実現する作製プロセスなど関連する技術の開発を進めています。さらに、デバイス特性を精密に測定評価することにより、解析モデルを構築するとともに、特性シミュレーションによるデバイス設計技術を研究しています。

◆研究テーマと成果

研究テーマを、以下の通り設定しています。

1. 超高速GaN高電子移動度トランジスタの研究

GaN基板上に成長した欠陥の少ないAlGaN/GaNヘテロ接合を用いて、この系のトランジスタが本来示す高電流特性と高速動作の実現を目指します。GaNバッファ層の高抵抗化のためにドーピングした不純物が、特性に及ぼす影響を調べました。[SSDM 2020, D-7-06]

2. p型GaNゲート高電子移動度トランジスタの研究

電力制御用に正のしきい電圧を示し、ノーマリオフ動作を実現するトランジスタの研究を進めています。[JJAP, SAAD02-1-4 (2019)] さらに、しきい電圧の高度な制御技術を開発し、高い整流効率を示すダイオードの実現を目指します。[ISPlasma 2020, 11P4-05]

3. GaNに添加したMgアクセプタ活性化の研究

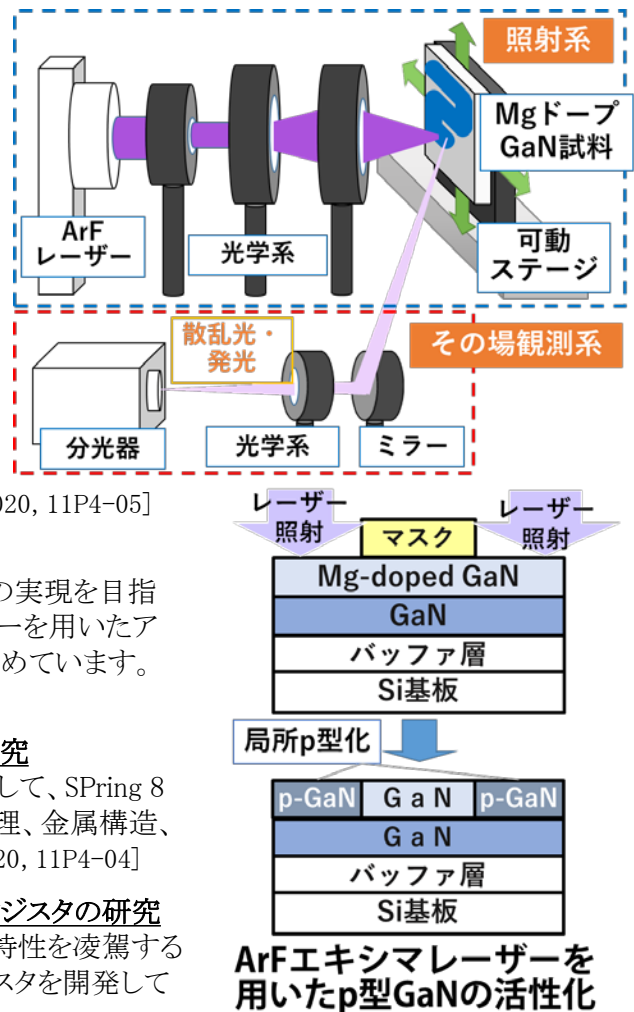
縦型GaNトランジスタに必須な低抵抗p型GaN層の実現を目指して、Mg不純物の添加方法やArFエキシマレーザーを用いたアクセプタの局所的な活性化手法に関する研究を進めています。[SPIE Photonics West 2019, 10905-33]

4. p型GaNへの低接触抵抗オーミック電極形成の研究

低い接触抵抗値を示すアロイ接合の実現を目指して、SPRING 8と共同で金属-半導体界面の評価を進め、表面処理、金属構造、熱処理法の検討に取り組んでいます。[ISPlasma 2020, 11P4-04]

5. 次世代の電力制御システムに用いる新構造トランジスタの研究

現在使用されている電力制御用Siトランジスタの特性を凌駕する化合物半導体ヘテロ接合を用いた新構造トランジスタを開発しています。[SSDM 2020, D-5-01]



◆研究室の保有技術と設備

岩田は、半導体企業において化合物半導体の物性評価、結晶成長、デバイスおよびそれを用いた集積回路やパワーアンプモジュールの研究とパワーアンプやスイッチ製品の開発に30年間の経験があります。

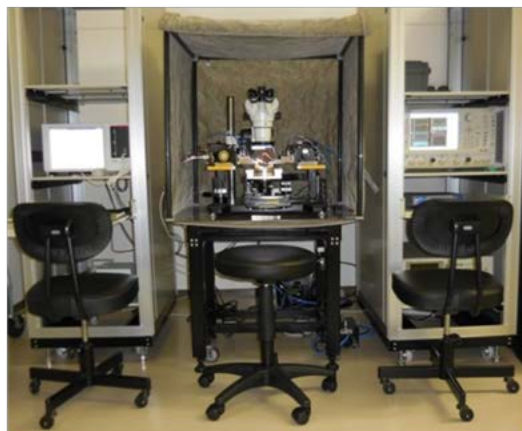
Zhangは、化合物半導体の結晶成長とデバイスの研究に従事して、今年着任しました。

保有する主要装置

- ・原子層堆積装置
原料ガスをウェハ上へ交互に導入することにより、良質な薄膜を原子層の精度で堆積が可能
- ・ドライエッチング装置
GaNなど化合物半導体に対して、低ダメージでの高精度な加工が可能
- ・ArFエキシマレーザー照射装置
高出力深紫外光の照射により、アクセプタ不純物の活性化を促進するとともに、ウェハからの散乱光や発光も同時に観測が可能
- ・ウェハプローバ
作製プロセスの途中またはウェハ状態のデバイスに対して、温度を変えながら測定が可能
- ・半導体デバイスアナライザと高電圧ソースメータ
10nsの短パルス応答から長時間ドリフトまでの電流(1fAより)-電圧(3kVまで)特性と容量-電圧特性の測定が可能
- ・ネットワークアナライザ
40GHzまでの高周波特性(Sパラメータ)の測定が可能
- ・デバイス・シミュレータ(TCAD)
コンピュータを用いて半導体デバイスの特性予測や構造設計が可能



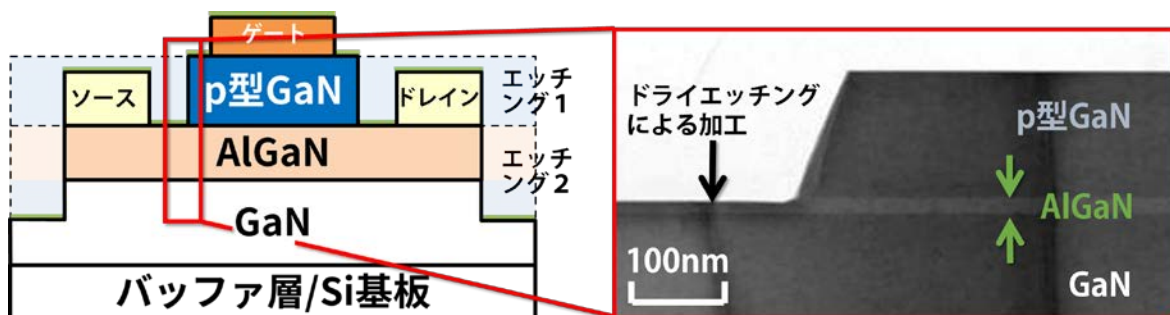
原子層堆積装置 ドライエッチング装置



半導体デバイスアナライザ、ウェハプローバ、ネットワークアナライザ

◆企業との接点・共同研究のご提案

GaNはAlGaNと容易にヘテロ接合が形成できるワイドバンドギャップ半導体であり、その優れたヘテロ界面の伝導特性により、マイクロ波ミリ波帯の通信用からモーターなどの電力制御用まで、様々な用途のトランジスタを良好な特性で実現できます。我々は、これを安価に実用化するため、新しいトランジスタの構造と要素技術の研究開発を進めています。持続可能な省エネ社会の実現には必須のデバイスと考えておりますので、共同での研究開発をご提案いたします。詳細をお問い合わせください。



素子構造
p型GaNゲートを用いたノーマリオフ動作高電子移動度トランジスタ

レーザー科学研究室

— 究極の光を作る、使う —



キーワード	超高速レーザー、量子エレクトロニクス、ファイバレーザ、光マニピュレーション
相談・提供 可能技術	超高速レーザー技術、超短光パルス評価技術、光操作技術

◆研究室スタッフ

教授: 藤 貴夫

講師: 工藤 哲弘

PD研究員: 趙 越、河瀬 広樹、

DARMAWAN, Yoshua Albert

研究補助者: 近藤 麻紀



問合せ先: fuji@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

数フェムト秒(10^{-15} 秒)の周期で振動する光の波について、精密な計測と自在な制御を行う新しい技術を開発し、これまでになかった新しいレーザを作ります。そのレーザを様々な分野の研究や産業に応用することで、大きなブレークスルーを生み出すことを目指します。また、研究室で作り出したレーザを、企業と協力して製品化することも進めています。

レーザ科学研究室は、2019年4月から発足した新しい研究室です。この研究室の最大の特色は、世界でトップクラスの性能を持ったレーザを作れる技術を持っていることです。例えば、世界で最も短い7フェムト秒の赤外光パルスを発生するレーザや、特殊なファイバをレーザ媒質とした高性能ファイバレーザなどを作る技術です。これらのレーザを高速な赤外イメージングと多光子顕微鏡技術に応用しています。また、光と物質の相互作用をうまく使って、光同士の演算を行い、光の波を直接計測する独自の技術を持っていることも大きな特色です。赤外レーザーを用いた分子の光操作技術にも取り組んでいます。学外の生命科学の研究室や企業との共同研究を進めていることもユニークな点と言えます。

◆研究テーマと成果

・極限的に短い光パルスの発生手法の開発

フィラメンテーション法という独自の技術を使って、世界で最も短い7フェムト秒の中赤外光パルスの発生に成功しました[Opt. Express **28**, 36527 (2020)]。

・極限的に短い光パルスを使った超高速分光

上記の7フェムト秒中赤外光パルスを利用して、高速な赤外スペクトル計測、フェムト秒ポンプ・プローブ分光やハイパースペクトラルイメージング分光装置の開発を進めています[J. Opt. **17** 094004 (2015)]。

・光電場振動波形計測法の研究

数フェムト秒で振動する光電場波形を直接計測する新しい手法を開発しました[Nat. Commun. **4** 2820 (2013)]。従来のアト秒パルスを使った手法と比べてはるかに簡便であり、広い分野で応用できる可能性があります。

・高出力フェムト秒固体レーザの開発

フッ化物ファイバをレーザ媒質としたフェムト秒パルスレーザ発振器や増幅器、また、さらに高ピーク出力のパルスを発生できる固体レーザ増幅器の開発[Opt. Express **26** 29460 (2018), Opt. Express **30**, 7332 (2022)]を進めています。

・分子構造に応じた分子種の光選別

中赤外レーザーでねらった微小物体の分子振動を励起することで、その物体を選択的に光選別する技術を開発しています[Phys. Rev. Applied, in press (2022)]。また、赤外レーザーによる迅速な光熱トラップの技術開発も進めています[Opt. Express **29**, 38314 (2021)]。

◆研究室の保有技術と設備

自作超高速レーザー

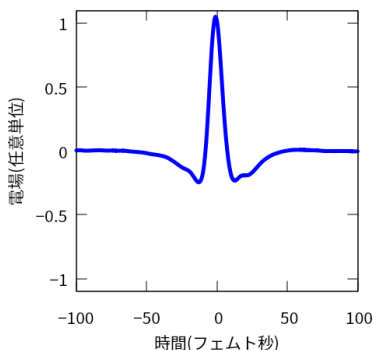
- ・サブサイクル中赤外光パルス発生装置
(パルス幅7fs、スペクトル領域2-20 μ m)
- ・2 μ mフェムト秒パルス発振器(パルス幅80fs、
平均出力200mW、繰り返し周波数50MHz)
- ・2 μ m高効率ファイバ増幅器
(平均出力5W、繰り返し周波数50MHz)
- ・2 μ m固体レーザー再生増幅器(パルス幅360fs、
パルスエネルギー1.35mJ、繰り返し周波数1kHz)

超高速レーザー

- ・チタンサファイアマルチパス増幅器(パルス幅30fs、
パルスエネルギー0.85mJ、繰り返し周波数1kHz)
- ・中空ファイバパルス圧縮システム(パルス幅5fs)
- ・チタンサファイア再生増幅器(パルス幅35fs、
パルスエネルギー1.4mJ、繰り返し周波数10kHz)

その他保有設備

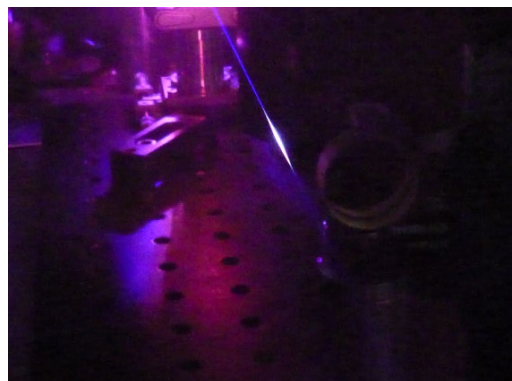
- ・恒温恒湿クリーンブース
(温度25 $\pm$ 0.5 $^{\circ}$ C、湿度40%以下)
- ・絶対反射率測定ユニット付き分光光度計
- ・減衰全反射フーリエ赤外分光装置(1.5-40 μ m)
- ・光スペクトルアナライザ
(350-1700nm、1500nm-3400nm)
- ・焦電型赤外カメラ
- ・800nmフェムト秒パルス計測装置(FROG)
- ・中赤外波長可変量子カスケードレーザー(5.8-7.8 μ m)



新規光電場波形
計測法によって測
定されたサブハー
フサイクル中赤外
光パルス

先端計測技術及び機器

- ・光電場波形計測技術
- ・チャープパルス上方変換による高速赤外分光
装置
- ・2 μ mフェムト秒パルス計測装置(FROG)
- ・中赤外レーザー顕微鏡



高強度レーザーを空気中に集光して生
成したプラズマチャネル(フィラメン
テーション)



中赤外レーザーATR正立顕微鏡で光
操作の実験準備を行っている様子(工
藤講師)。

◆企業との接点・共同研究のご提案

現在、JST CRESTのプロジェクト「超短赤外パルス
光源を用いた顕微イメージング装置の開発と生命科
学への応用」でファイバーラボ株式会社と共同研究
を行っています。

上記自作超高速レーザーや先端計測操作技術の製品化
や産業への応用をめざした共同研究を提案できます。



ファイバーラボ株式会社と協力して製
作した2 μ mファイバ増幅器

キーワード	スピンエレクトロニクス、磁性薄膜、磁気記録、光・熱・磁気材料、磁気イメージング
相談・提供 可能技術	希土類・遷移金属合金成膜および特性評価、磁区観察、磁化測定、熱磁気測定

◆研究室スタッフ

教授:栗野 博之 准教授:田辺 賢士
研究補助者:鷺見 聡

問合せ先: awano@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

第4次産業革命に必要なIoTやビッグデータ保存用メモリ、AIの実現には、革新的な省電力化、高性能化、低価格化が求められている。これら応用に対してこれまで様々なフェロ磁性材料を用いた研究が多くなされてきた。例えば、IBMは磁性細線メモリの駆動電力を下げるためには磁界で容易に磁壁を動かせる超ソフトフェロ磁性材料FeNiが好適であると考え、レーストラックメモリと命名して複数のデータを電流で駆動できるデモンストレーションを行った。確かに、レーストラックメモリの動作検証には成功したが、意外にも大きな電流密度が必要であることが判明し、その低減が課題となった。NECと京大のグループはこの問題がFeNiの面内磁化膜である点に起因していると考え、垂直磁化膜で保磁力が小さいCo/Ni多層膜で磁性細線を作成し、磁性細線メモリの駆動電流密度を半減することに成功した。しかし、半減に留まっており、更なる電流密度低減策が求められた。一方、これら検討には磁壁を磁界で容易に駆動できる保磁力の小さな材料が用いられており、仮に電流密度低減に成功しても記録データがわずかな外部磁界変動でデータが壊れてしまうため信頼性が次の課題になる。そこで、我々は保磁力が大きくデータ保存信頼性の高い重希土類・遷移金属(RE-TM)フェリ磁性材料で磁性細線を作成してみた。すると、意外にも磁界で磁壁は動かないが、電流では磁壁が容易に動くことを見出した。これはRE-TM磁性細線でメモリとロジックを一体化した理想的なAIデバイスの実現できることを示唆している。

◆研究テーマと成果

上記、第4次産業革命に必要なIoTやビッグデータ保存用メモリ、AIの革新的な性能向上を目指して検討してきた研究成果を以下に示す。

- ① IoT用センサーには、センサーの形状変化に伴う磁気特性の変化を利用することでナノインプリント **応力センサー、圧力センサー、磁気センサー、変位センサーなどへの展開**が可能となる。
そこで、薄いプラスチック基板上に超磁歪効果の大きなRE-TMを成膜して磁気ヒステリシスの変化を測定したところ、わずかな歪でも磁気特性が大きく変化することがわかった(APEX2016)。
- ② ビッグデータ用磁性細線メモリではRE-TMを使うことで磁性細線メモリ駆動電力が世界最小となることを示した(APEX2011)。更に、RE-TM/Ptヘテロ界面を有する磁性細線を用いることでスピンコヒーレンス長が従来のフェロ磁性材料に比べて10倍長くなることを示した(Nature Materials2019)。更に、磁壁移動速度を2000m/secに向上(APL Materials 2022)できたので、次に光通信用ASICのデータレートに連動可能な**25Gbps超低消費電力、超高速メモリ**の実証を目指す。
- ③ 人工知能への適応には、RE-TMの磁気エネルギーバランス制御性を利用して、上記磁性細線メモリを変形したAND演算、OR演算、ファンアウトなどのデモンストレーションを示した(JMMM2015)。
超低消費電力で超高速な磁気ニューロモルフィックコンピューティング(Optics Express 2022)提案。

◆研究室の保有技術と設備

設備

成膜装置

○アルバック製超高真空スパッタ(12元)

加工装置

○電界放出型反射電子顕微鏡(FE-SEM)兼電子ビーム露光装置

○日立製集束型イオンビーム加工観察装置(FIB)

○ナノインプリント装置(右図右側)

評価装置

○外部磁界可能な偏光顕微鏡

(印加最大磁界:垂直1.5T、面内0.3T)

焦点内に集光した青色レーザー照射可能

照射位置の制御も可能(ネオアーク製)

試料温度は $-100^{\circ}\text{C}\sim 400^{\circ}\text{C}$ に調整可能

○波長範囲(260nm $\sim$ 800nm)変化可能な極磁気光学Kerr回転角、楕円率測定装置

○微小磁化測定装置(AGFM)

最大感度 $1\mu\text{emu}$ 、印加磁界最大2T

○TMRヘッドを用いた漏洩磁界分布及び温度分布測定、局所磁界印加装置(右図)

磁界応答($\sim 700\text{MHz}$)、

局所磁界印加も可能(50nm角に最大1T)

局所TMR磁束密度分布測定(30nm角センサ)

温度分布測定(20nm x 120nm温度センサー)

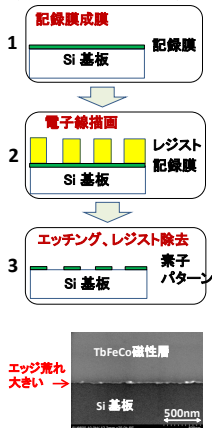
X軸1nm/step、Y軸5nm/stepで広域スキャン

○日本分光製エリプソメータ

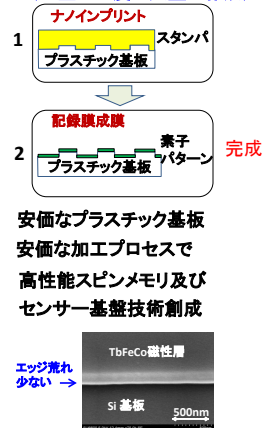
(波長:300nm $\sim$ 800nm、温度:室温 $\sim 500^{\circ}\text{C}$)

安価なナノインプリントプラスチック基板を用いたIoTデバイス作成法

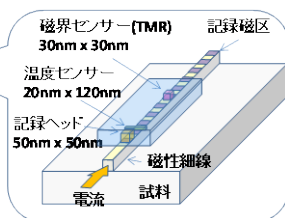
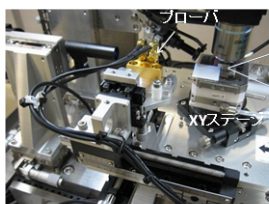
従来:高価な磁性細線作成法
(エッチング法で1個ずつ作成)



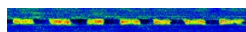
提案:安価なナノインプリント法
(金型で一度に大量に作成)



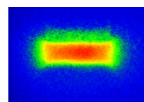
超高分解能磁界絶対値分布測定及び温度分布測定



80nm幅磁性細線上の磁区精密観察
センサーサイズ: 30nm x 30nm 帯域0.7GHz
最大磁界1T、磁極サイズ50nm x 50nm
X軸ステップ: 1nm、Y軸ステップ: 5nm



磁性細線通電時の発熱状態観察
温度センサーサイズ: 20nm x 120nm



◆企業との接点・共同研究のご提案

我々の強みは、酸化しやすく安定した作成が難しい希土類・遷移金属フェリ磁性合金の成膜技術および磁気特性制御技術にある。この材料は希土類元素特有の4f電子雲の形状からくる磁気歪の大きな超磁歪材料であり、右図に示すように少しの歪みにより磁化容易軸を垂直方向から面内方向に容易に変化させることが出来る。比較のために右図にはフェロ磁性材料であるCo/Pt多層膜にRE-TM同様の歪を加えた時の磁気ヒステリシスを示すが、ヒステリシスはほとんど変わらない。

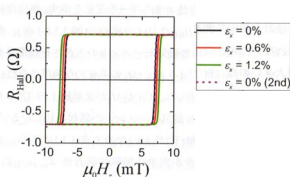
また、当研究室には前述した豊富な研究設備があるため、磁界印加や試料温度を

変えられ、観察視野内の任意の場所に青色レーザー照射可能な偏光顕微鏡による磁区観察が可能。さらに、世の中に数台しかない希少なTMR磁気ヘッドを用いた磁力イメージング(一般的なMFMと違って磁化の絶対値分布測定が可能)装置がある。これは、電子回路通電時の熱分布イメージング(ただし、表面形状の平滑性が必要)が可能である。この他、高周波測定装置も保有しており磁気共鳴やスピントルク磁気共鳴の測定も可能。

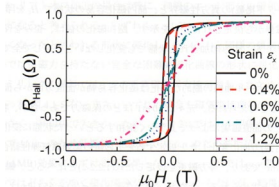
希土類・遷移金属合金超磁歪材料を用いた応力センサー、圧力センサー、磁気センサーなどを旨としたIoT向け基礎検討

Applied Physics Express 9, 043004 (2016)

従来材料 Co/Ptフェロ磁性膜に
引っ張り応力を加えたときの変化。
磁気特性はほとんど変化しない!



当研究室で扱っている超磁歪材料の
TbFeCoフェリ磁性膜に引っ張り応力を
加えたときの変化。
歪によって磁気特性が大きく変化!



更なる材料設計で感度増大を狙う

電磁システム研究室

— 電磁界融合学による電気自動車の高効率モータ駆動システム技術を開拓 —

キーワード	電磁界解析、モータ、インバータ、鉄損、磁性材料、マルチスケール、マルチフィジックス
相談・提供 可能技術	モータ駆動システム、電磁界解析、磁性材料の磁気計測

◆研究室スタッフ

教授：藤崎 敬介 助教：NGUYEN, Gia Minh Thao
 招聘研究員：内藤 治夫

問合せ先：fujisaki@toyota-ti.ac.jp (Tel: 052-809-1826)

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

■ 基本コンセプト:「電磁界融合学」の創出

- ①第一種の融合: 電磁エネルギー機器、電磁界応用、電磁材料の各領域で、磁性体マルチスケール、電磁界マルチフィジックスによる融合学の創出。
- ②第二種の融合: 電磁エネルギー機器、電磁界応用、電磁材料の各領域間で「目的と手段」の融合。

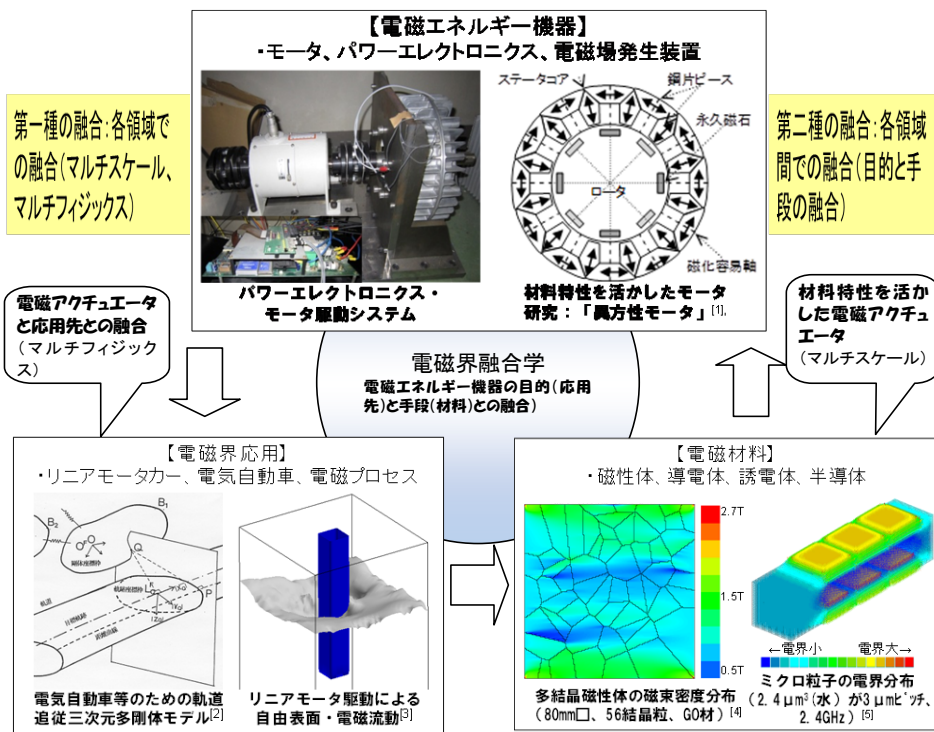


図1. 電磁界融合学

■ モータ駆動システムにおける磁性材料・半導体の融合学^[1-4]

- 材料の製造プロセスからその機器さらにはシステム応用まで一貫した融合学の創出とそれによる小型高効率モータ駆動システムの実現。

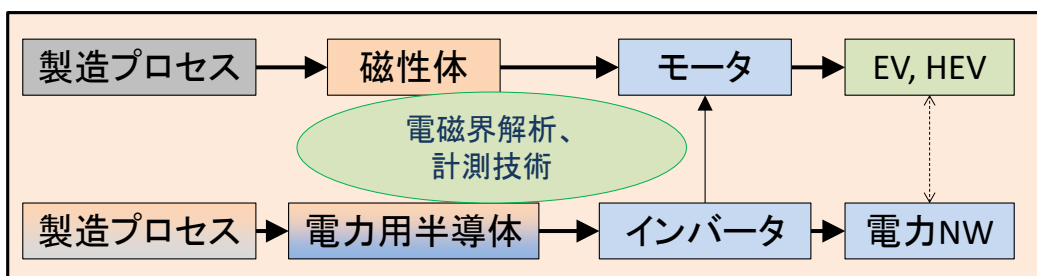


図2. モータ駆動システムにおける磁性材料・半導体の融合学

◆各研究テーマと成果

1. 材料特性を生かした電磁システムの環境負荷低減技術の研究^[5-6]

- ・材料の持つ異方性特性を活かした新しいモータ(異方性モータ)およびアモルファスモータの研究を行う。

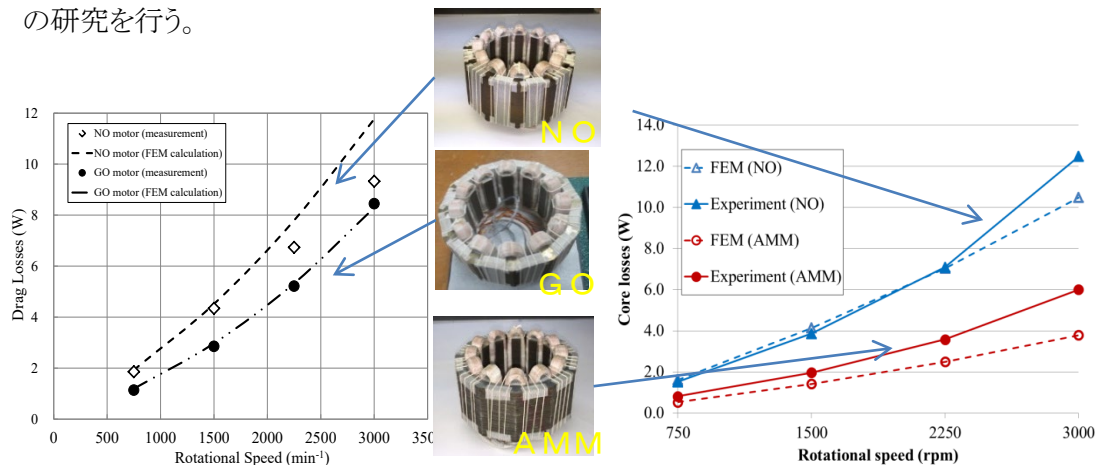


図3. 材料特性を活かした異方性モータ、アモルファスモータの研究(引き摺り損)

2. 電気自動車をはじめとしたパワーエレクトロニクス・モータ駆動システムの研究^[7-10]

- ・パワーエレクトロニクス制御と合わせて、その電磁材料・機器への影響評価を行う。

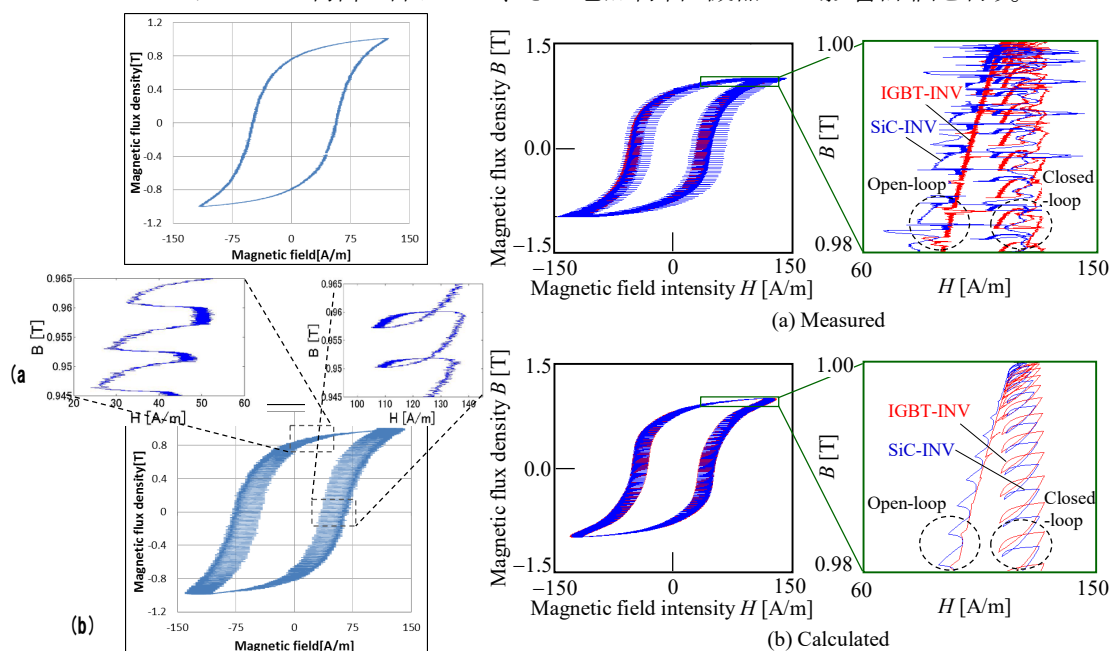


図4. インバータ励磁による電磁鋼板の鉄損増(a) リニアアンプ励磁(従来), (b) インバータ励磁

図5. インバータ励磁時の磁気特性の電力用半導体の影響: (a) 測定値, (b) PlayModel+Cauerによる解析結果

◆研究室の保有技術と設備

モータシミュレータ, 電磁界数値解析, 磁気計測

◆企業との接点、共同研究のご提案

- ・上記研究テーマについて企業との共同研究及び社会人大学院生を積極的に募集中。

◆関連文献

[1] 藤崎敬介: 電学全, S22-1, 2015.3. [2] 本蔵、藤崎: 電学誌, Vol. 134, No.12, pp.828-831, 2014. [3] 藤崎敬介:(公益)日本磁気学会 第3回岩崎コンファレンス, H26.12.3-4. [4] K. Fujisaki, 3rd IcAUMS, A1 - 03, 2014.10. [5] S. Takeda, K. Fujitani, S. Odawara, K. Fujisaki, IEEE-ICEM, Berlin, pp. 2049-2055, 2014. [6] S. Okamoto, N. Denis, K. Fujisaki, IEMDC2015, DF-001619, 2015.5. [7] K. Fujisaki, S. Liu, J. Appl. Phys., Vol. 115, 17A321, 2014. [8] 藤崎 敬介、山田 諒、日下部: 電学論D, Vol. 133, No. 1, pp. 69-76, 2013. [9] 小田原峻也、萱森大輔、藤崎敬介: 電学論D, Vol. 134 No. 7, P649-655, (2014). [10] S. Odawara, K. Fujisaki, T. Matsuo: IEEE-ECCE2014, pp.1451-1456, 2014.

制御システム研究室

— 複雑な動的システムを高度に制御，最先端システム制御理論の開発 —

キーワード	制御理論，最適化理論，スマートグリッド，パワーアシストロボット
相談・提供 可能技術	ロバスト制御系設計技術，非線形適応制御技術，自律分散システム解析・設計技術， ロボット・パワーアシスト機械制御技術，

◆研究室スタッフ

准教授:川西 通裕 PD研究員:Nguyen Binh Minh

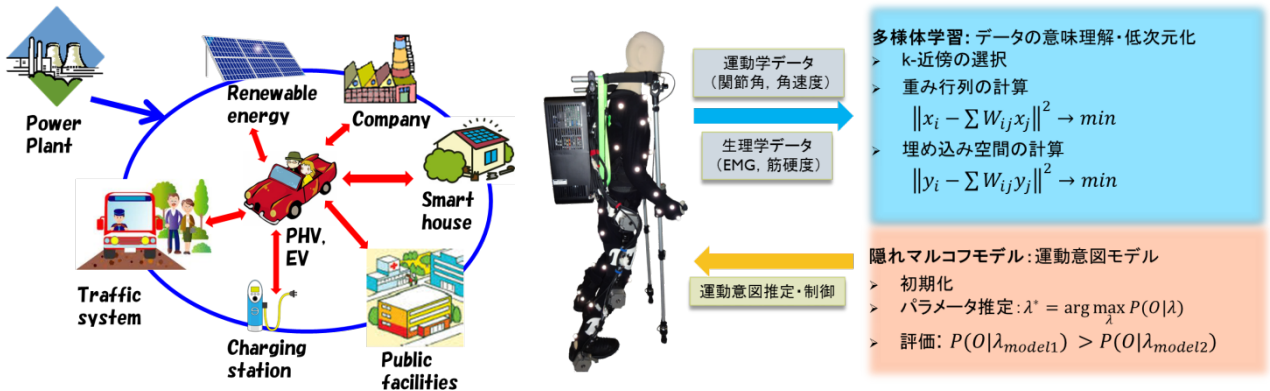
※研究協力

特任教授:成清 辰生

問合せ先 : kawa@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

産業のあらゆる分野で多用される制御理論について，新しい先端的な理論を研究・開発するとともに，エネルギーネットワークの分散制御，交通流制御，福祉のための人とロボットの協調制御などに応用し，社会や科学技術の発展に役立つ高度な制御を実現することを目指しています。



マルチエージェント・エネルギーネットワーク制御 意図推定に基づく直立4足歩行型パワーアシストロボット制御

◆研究テーマと成果(1)

1. 非線形制御理論とその応用

多項式システム，ディスクリプタシステムなどの制御系設計理論とその応用研究を行っている。また，非ホロノミック拘束とホロノミック拘束が混在するシステムの適応制御系設計理論の研究を行い(1)モバイルマニピュレータの位置と力のハイブリッド制御，(2)柔軟アームを有する平面宇宙ロボットの適応制御へ応用した。

2. ロバスト制御理論とその応用

線形システムに対するロバスト制御系設計理論の研究を行い，外乱抑制や極配置問題などへの応用を行った。特に，以下の研究課題を推進した。(1)未知入力外乱の抑制とディスク型記録装置への応用，(2)デュアルオブザーバによる外乱抑制，(3)極配置問題におけるフィードバックゲインの構成とその応用，(4)零感度状態推定器の一構成法

3. Beowulfクラスタ計算機によるマルチエージェントの自律分散制御

Myrinetによる超高速ネットワークを備えたBeowulfクラスタ計算機を活用することで，非線形行列不等式に基づく高性能制御システム設計法を確立し，産業界で多用される制御システムを高性能化する研究を行っている。また近年は，電力網ネットワークの自律分散制御や飛行ロボットのフォーメーション制御などに代表されるマルチエージェントシステムへの高度な制御系設計への要求が高まっており，Beowulfクラスタ計算機の特性を活用した大規模シミュレーションと制御系設計の手法を開発している。

◆研究テーマと成果(2)

4. パワーアシストシステムの研究

装着型パワーアシストロボットを製作し、人体表面に柔軟な圧電素子の薄膜圧力センサを貼り付けることで、筋肉の緊張による硬度の変化と変位を計測した。さらに、あらかじめphaseとして人間の動作を分割しておき、センサの計測値をトリガとしてphaseを対応させることで意思推定を行う。意思推定はサポートベクトルマシンの用いて行い、実験結果よりその有効性を確認する。制御系については、phase sequence法を用いた制御系設計法を開発する。椅子への着席と起立を対象に選び、アシスト効果を検証した。

5. パラレルリンクロボットの制御高度化

並列の閉リンク機構を用いたパラレルリンクロボットは、剛性の高さや低慣性による高速性などの優れた特性を有するため、Pick&Placeやシミュレータ、工作機械など、高速・高精度な機械駆動機構として注目されているが、高速で駆動するため機構の微細なガタや振動が問題となっている。本研究ではこれらの課題に対して、冗長リンク機構と駆動力最適化を用いる手法、およびQuantitative Feedback Theoryを用いる手法を開発した。

◆研究室の保有技術と設備

[保有技術]

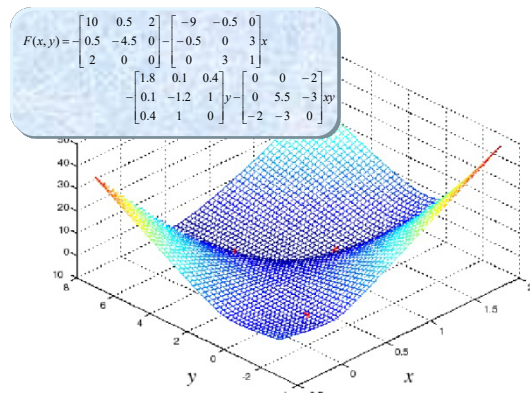
非線形適応制御技術、ロバスト制御系設計技術、自律分散システム解析・設計技術、ロボット・パワーアシスト機械制御技術、

[主な設備]

Beowulfクラスタ計算機、3次元運動解析装置、等



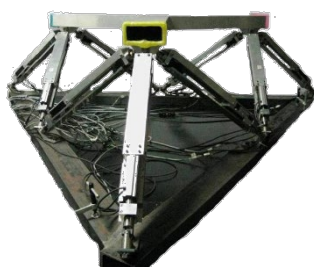
Beowulf クラスタ計算機



双線形行列不等式の固有値最適化



3次元運動解析装置



パラレルリンクロボット



4脚ロボット

◆企業との接点・共同研究のご提案

[成果の活用]

適応制御やロバスト制御理論を応用した機械システムの外乱抑制・振動制御および高速位置決めモーション制御が可能です。さらに、ロボットの高精度・高効率制御やパワーアシスト装置の制御系設計などへの応用が可能です。製造業・機械メーカーなど多くの企業や研究機関との連携を積極的に推進しています。

[共同研究への応用]

情報通信、エネルギー、機械システムなど、産業のあらゆる分野で多用される制御システムについて、高度なニーズに対応できる制御システムを実現します。

キーワード	人工知能、機械学習、深層学習、テキストマイニング、自然言語処理
相談・提供 可能技術	Big Data解析技術、言語情報解析技術、深層学習手法、専門知識ベース構築

◆研究室スタッフ

教授：佐々木 裕 准教授：三輪 誠 PD研究員：NALLAPPAN, Gunasekaran

問合せ先 : yutaka.sasaki@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

知能数理研究室では、人間の知能を探究し、数理的アプローチによりコンピュータ上に人工知能を実現することを究極の目標としています。人工知能実現までの道のりはまだ遠く、解決すべき課題が山積しています。そこで、当研究室では、最初のステップとして、人間とコンピュータが言語を通して、知的なコミュニケーションをするための研究に重点を置いています。

知能を扱うためには、知識を扱う必要があります。「言語」に注目している理由は、人類がこれまでに獲得してきた膨大な知識のほとんどは言語情報として表現されているからです。過去から現在まで、多くの情報が文書情報として蓄積されていますので、様々な分野の文書情報から知識を取り出すための技術確立することが、人工知能へとつながると考えています。そして、言語を用いてユーザがコンピュータと対話しながら、たとえば、科学技術や医療等の情報を簡単に利用できるシステムを開発しようとしています。

最新の人型ロボットや自動走行車は、まだ十分にスマート(=賢い)とはいえません。現在の人工知能技術のレベルは人間には遥かにおよびませんが、人間そのものを深く見つめ続けることで着実に進歩すると考えています。

◆研究テーマと成果

1. 深層学習(Deep Learning)による言語処理

これまで単語や文がもつ意味を捉えることは、コンピュータにとって苦手でした。しかし、深層学習の基礎技術である、Embedding技術により、大量の文書に出現する単語やフレーズ、文のもつ意味を数値ベクトルに埋め込むことができるようになってきました。さらに、深層学習により、画像や音声等のデータと言語情報を統一的に扱うことが可能になっています。たとえば、画像に対するキャプションを自動生成することが可能になっています。また、深層学習による機械翻訳や自動要約により、正確で品質の高い文が生成可能になってきています。このように、深層学習を応用することで、これまで超えられなかった性能や機能の壁を越えることができることが分かってきました。

2. バイオメディカル／マテリアルズ・インフォマティクス

生物・医学・薬学文献および材料工学文献に対して自然言語処理を適用する研究を進めています。薬物間相互作用や超電導現象に関する知識を文献から自動的に抽出する研究を行っています。

3. 知識ベースの構築と深層学習との統合

これまで、交通法規やマナーに関する知識を体系化した知識ベースを構築する研究を行なってきましたが、現在、交通教則等を利用して半自動的に知識ベースを拡張する研究を進めています。また、知識ベース(知識グラフ)の構造を深層学習により数値ベクトル化し、深層学習に統合するSymbolic-Neural Learningの研究を先導しています。

4. 自動走行への深層学習の応用

対話を通して自動走行車や小型車両ロボットを制御する研究を行っています。走行部分においても、深層強化学習によりシミュレーターの中で走行法をゼロから学習し、実機で走行させる研究も行っています。また、車両の時系列特性を深層学習により予測する研究も行っています。

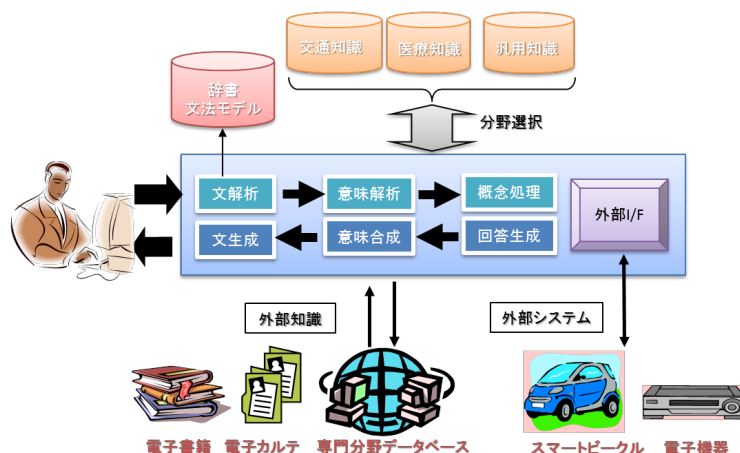
◆研究室の保有技術と設備

ハードウェア

- ・デスクトップPC(一人1台) (NVIDIA TITAN X GPU搭載機多数)
- ・Linuxサーバ(Xeon 5500系 64～384GBメモリ 12台) (NVIDIA A6000 GPU搭載機含む)

ソフトウェア・データ

- ・Dual Coordinate Ascent SVM機械学習ツール DCASVM (公開中)
- ・関係抽出システム(公開中)
- ・書誌情報のベクトル表現学習に基づく検索システム(デモ構築中)
- ・交通教則に関するタグ付コーパス(＝言語資源) (構築中・一部公開中)
- ・大規模階層的分類システムEze (公開中)
- ・運転コアオントロジー(＝知識ベース) (公開中・構築中)
- ・超電導現象に関するタグ付きコーパスSC-CoMics構築(公開中)



◆企業との接点・共同研究のご提案

これからの機械製品はますますデジタルカメラ化していくかもしれません。

この「デジタルカメラ化する」という言葉でつぎのようなことを意味しようとしています。ひとつには、銀塩写真機がデジタルカメラになったような、パラダイムシフトが起こり、同じ用途・機能を保存したままで、構成要素技術が置き換わるということを表わしています。たとえば、銀塩フィルムがCCDカメラになり、現像が不要になり、プロのカメラマン並みの写真が素人にも撮れます。さらに顔認識、動画編集など、以前のカメラにはできなかった機能が製品の差別化の鍵になっています。このアナロジーで考えれば、将来、電気自動車や水素自動車が主流になったときには、単にエンジンがモーターになるだけではない、もっと大きな変化があることが予想されます。

その変化を今すべて予想することは難しいのですが、なんらかの知的な機能が将来の自動車の重要な要素のひとつになると考えられます。SFのように自動車と会話したり、自動車が自らルートを選んで走ったりする日もそう遠くないのかもしれません。将来、このような知的なプロダクトを生み出すためには、人間の知的な活動を理解し、代替するための基礎研究の積み重ねが重要です。究極的には「人工知能」を生み出すことが1つの壮大な研究目標となるのです。

豊田工大スマート情報技術研究センターが対象とする、「機械学習の工学への応用」を担う研究室のひとつとして、機械学習技術を様々な工学領域に適用する研究をしております。これまでいくつかの企業様と密接に連携し、国際特許の申請やプロトタイプソフトの構築を行った実績もございます。また、豊田工大シカゴ校(TTIC)は機械学習技術の研究において世界的に有名であり、当研究室は、TTICと緊密な連携をとっております。

現在のプロダクトをもう一度見直し、人工知能によるパラダイムシフトに対応する準備をしてみたいかがでしょうか。研究室には企業出身の教員もおりますので、企業と大学の共同研究について多くの経験を持っております。受託研究員も受け入れております。

知能情報メディア研究室

— 人を理解し、人に合わせて振る舞い、人のように振る舞う人間・機械共存系 —

キーワード	画像認識、マルチメディア処理、機械学習、ヒューマンセンシング・モデリング
相談・提供 可能技術	人の運動・行動・状態の計測とモデル化、および、支援への応用

◆研究室スタッフ

教授: 浮田 宗伯

PD研究員: ZHAO, Kaikai

問合せ先 : ukita@toyota-ti.ac.jp

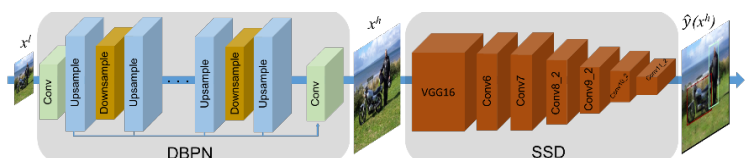
◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

人と共存し、環境適応する知能情報メディアシステムのため、コンピュータビジョン・画像認識などのマルチメディア計測・認識、および、大規模データの機械学習に関する技術を研究する。下記の「ヒトの計測と認識」「統合モデリング」を基盤技術として、基礎から応用にわたる研究・開発を広く行う。

- **ヒトの計測と認識:** ロボットなどの情報システムが、ヒトの状態を知る手段として、ヒトに対して非接触で自然な生活を阻害しないカメラによる画像認識の役割は大きい。多種多様なセンサの開発や、IoT (Internet of Things) 環境の発展によって、多くのモノの情報が情報システムにとって既知となる時代が来ても、ヒトに関する情報は倫理・法などの観点から共有されにくい情報である、この「ヒトに関する情報」を主に視覚メディアによって計測・認識することは、将来にわたって有用な技術となる。
- **画像の計測・処理・認識などの多様な異種法の統合モデリング:** 従来、多種多様な画像に関連する研究は各専門家によって独立に研究されてきたが、画像に関わらずほとんどのメディアデータが機械学習によって同様に処理可能な時代になってきた。そこで、機械学習によって異種法が相互にその性能を高めあうような有機的な統合によって、従来は実現できなかった複雑な問題も解決する。



仮想空間と実空間で構成
される人間・機械共存系



深層学習による異種法の統合モデリング

◆研究テーマと成果

- **スマートビークルのための搭乗者や周辺歩行者の行動・状態認識:** 自動車の全自動化を見据え、ぶつからなければいいという安全だけを目指した研究の先のステップに進み、超遠方の歩行者、自転車、車両などの物体検出、および、それら物体の移動・行動の予測によって、安心で余裕のある車両制御に必要な計測・認識を実現する。また、搭乗者の状態を計測・認識し、その状態に基づく個人にあわせた車両制御なども研究する。
- **大量データ学習による映像からのヒトの行動認識:** 人工知能の学習に際して、ヒトに与えられた知識(学習用データ)だけを参照するのではなく、インターネット上のデータ(例: youtubeやオンラインニュースなどの画像や映像)からの自動的に学習することで、性能を向上させる。
- **グループや人群の行動解析:** 従来型の「画像中の数名を対象」としていた問題から、多人数の行動や属性を同時に認識する問題へと発展させる。チームスポーツの解析や、駅・災害避難時などの混雑空間におけるセキュリティや適切な経路誘導などに応用できる技術である。
- **マルチメディアデータの統合モデル化と、知能ロボティクスやQoL支援への応用:** 脳波や身体運動などの複雑に依存する大規模マルチメディアデータを解析する。特に、ヒトの認知や身体機能の発達や老化という長期間にわたるモデル化に興味を持つ。その成果は、障害児を含めた幼児の領域支援や、高齢者の予防医療やリハビリに応用していく。

◆研究室の保有技術と設備

- 【基盤技術】学習対象固有の制約を活用した機械学習の効率化。例えば、リハビリ支援などに有用な「各人の歩行の運動特性」の学習において、人の骨格、運動の物理特性、歩行固有の複雑・急激な運動特性などを参照して、学習を高効率・高精度化させる(図1)。
- 【基盤技術】マルチメディアデータの解析のためのディープラーニング。例:マルチメディア間の関係性、依存性の発見や、その関係性に基づく効果的・効率的な学習法。
- カメラを利用したマーカーレスモーションキャプチャとコンピュータアニメーションへの応用(図2)
- 画像・映像からのヒトの姿勢推定と行動認識(図3)
- 画像の超解像とその対象認識精度向上への応用(図4)

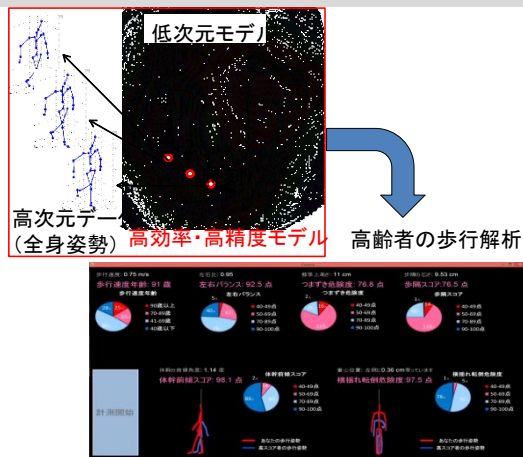


図1: 歩行モデルと歩行解析への応用

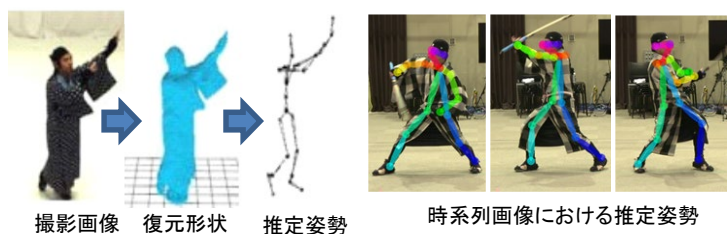


図2: モーションキャプチャ



図3: 姿勢推定と行動認識

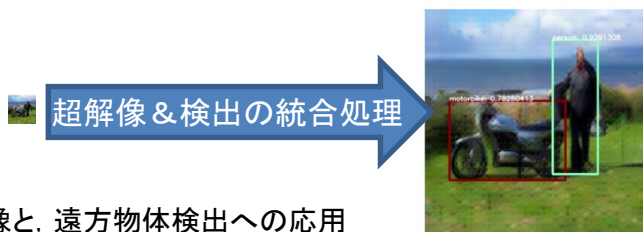


図4: 画像の超解像と、遠方物体検出への応用

◆企業との接点・共同研究のご提案

- 【基盤技術】ヒトの状態・行動を計測・認識する技術全般。特に、ヒトに負担を与えないカメラなどの光学式センサによる非接触計測と認識。
- 次世代モビリティや道路交通インフラの開発
 - 周辺環境(特に歩行者、自転車など)の認識と動きの予測
 - 特に世界的な競技会で**世界一**にランクされた超解像技術とその遠方物体検出への応用
 - 搭乗者の状態推定とクルマ制御への応用(安全・安心から快適へ)
 - IT化された車内機器の簡単操作のための搭乗者の状態・動作認識
 - 半自動から全自動で応用できるヒトの運転の個性・技術の計測・解析
- 知的映像解析
 - スポーツや映像への情報付与(戦術表示、技能可視化など)やハイレベル検索(〇〇選手が△△しているシーンを検索)
 - ドラマ・映画のコンテンツ解析と映像検索への応用
 - 平時の通常画像しか得られない環境でも未知の異常検出が可能なセキュリティシステム
- 高齢化社会を支える情報システム
 - 高齢者に親和性の高い情報システム(ロボット、スマホなど)
 - 高齢者の健康状態を計測し、予防医療やリハビリを促すシステム
 - 従来型の転倒などの危険検出から、危険が起こる要因を見つける危険予防(付加価値の高い高齢者住宅に向けて)

車載カメラ(車外撮影)

車載カメラ(車内撮影)



情報通信研究室

— 情報工学やコンピュータサイエンスの未解決問題にチャレンジする —

キーワード	誤り訂正符号, LDPC符号, ポーラ符号, 準巡回符号, PCクラスター, 高次元格子
相談・提供可能技術	各種の実用的に最適な誤り訂正符号の構成とPCクラスターによる探索, LDPC符号やポーラ符号の性能改善, 目的に応じた高次元格子の構成と探索

◆研究室スタッフ

准教授: 松井 一

PD研究員: 尾白 典文

問合せ先 : matsui@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

誤り訂正符号とは、デジタル・データに冗長部と呼ばれるデータを付け加え、誤りが起こっても一定数以下ならば冗長部より推定して訂正できるようにする仕組みである。現在では、デジタル・データを扱う際には誤り訂正符号がほぼ必ず用いられており、このうちの多くがリード・ソロモン(RS)符号および低密度パリティ検査(LDPC)符号と呼ばれる誤り訂正符号である。LDPC符号は誤り訂正符号の理論的な限界式であるシャノン限界にほぼ到達することが示されているものの、状況に応じた最適なものを見つけることは未だに難しい問題であるため、当研究室では様々な手法を駆使して高性能化を追求している。

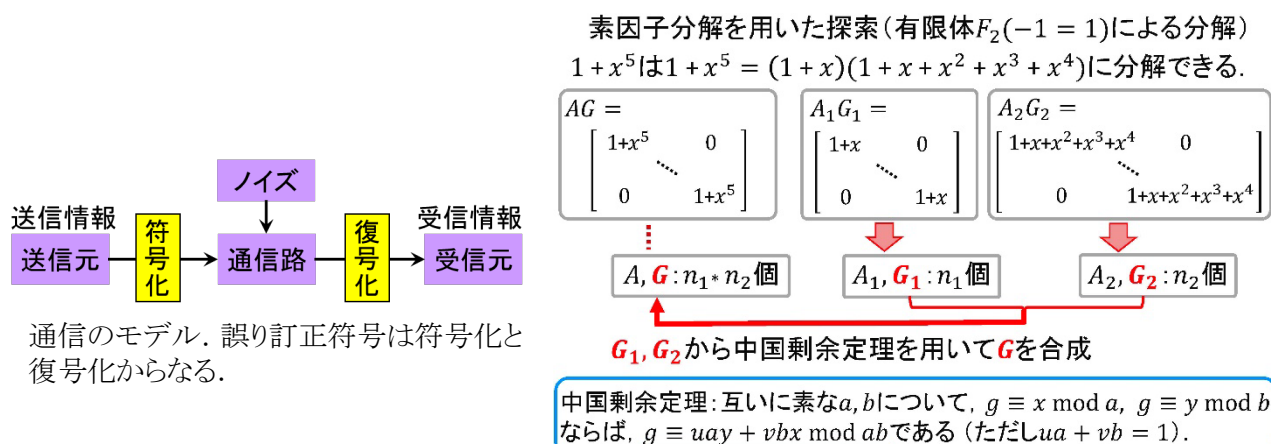
独自性: 応用数学の観点から、情報工学およびコンピュータサイエンスの理論から応用まで一貫して研究を行っている。またPCクラスターによる並列計算手法にもアルゴリズムの独自性がある。

有用性: 膨大な誤り訂正符号の組合せの中から効率よく最適なものを探索する技術、LDPC符号やポーラ符号の構成や符号化・復号化の観点からの性能改善、また最小ノルムの大きな高次元格子。

◆研究テーマと成果

様々な誤り訂正符号の構成とPCクラスターを用いた探索

符号理論の根本問題として、高性能な誤り訂正符号を見つけるという問題がある。当研究室では、目的に応じた高性能なLDPC符号を、PCクラスターを用いて現実的な時間内で探索し構成できるようにする技術を開発している。具体的には、一般化準巡回符号と呼ばれるクラスの誤り訂正符号が満たす、当研究室で「基本等式」と呼んでいる、ある種の方程式系を用いて符号の構成を効率的に行う。さらに中国剰余定理の応用(下図参照)により、従来の手法よりも大幅に探索の計算量を削減した。



中国剰余定理による準巡回符号の構成

◆研究室の保有技術と設備

研究室スタッフの松井はこれまで誤り訂正符号の代数的側面について研究してきた。主な成果として以下の〈1, 2, 3〉がある。〈1〉リード・ソロモン符号や代数幾何符号の離散フーリエ変換を用いた符号化・復号化統合システム、〈2〉ある種のLDPC符号を含む一般化準巡回符号の符号化用グレブナー基底の計算法、〈3〉多値論理関数の新たな畳込み定理と積の高速化への応用。

最近、PCクラスターによる並列計算（ソフトウェアはMATLABやmagmaなどを使用）を用いて、情報工学およびコンピュータサイエンスの様々な未解決問題に対し、世界最高性能を達成することに重点を置いている。



並列計算用 PC クラスター

◆企業との接点・共同研究のご提案

例えば以下のような研究テーマによる共同研究を募集しています。

1. 各種の実用的に最適な誤り訂正符号の構成とPCクラスターによる探索
2. LDPC符号やポーラ符号の構成や符号化・復号化の観点からの性能改善
3. 目的に応じた（ユニモジュラーや反転不変など）最小ノルムの大きい高次元格子の構成と探索

1, 2と関連して、先に述べたように、LDPC符号はsum-product法と呼ばれる復号化法によってシャノン限界まで0.0045dBに迫ることが示された。また近年では多元LDPC符号や空間結合LDPC符号と呼ばれる、より高性能な誤り訂正符号が提案されている。このように現在では様々なLDPC符号の種類がある。しかし、これらを組織的に構成・探索する技術や、制約の中で最適な条件を満たすものを見つける技術はこれまであまり系統的には調べられてこなかった。研究室のオリジナルな技術である「一般化準巡回符号の基本等式による構成」は応用範囲が広く、最小ハミング距離の大きい誤り訂正符号の構成に威力を発揮する。当研究室では、この手法の理論面の完成だけでなく、応用面での研究を計画している。

3については、当研究室における誤り訂正符号の研究手法として、生成多項式行列（前ページの右図におけるG）による準巡回符号の分類が基本となっている。この方法は整数符号と呼ばれる整数剰余環を成分とする別のタイプの誤り訂正符号にも適用できる。またこの方法は、近年再注目されている4角および6角格子上のLee距離誤り訂正符号にも適用できることが分かってきた。さらには、整数符号を用いてユニモジュラーや反転不変などの特性を持つ高次元格子を構成することもでき、中国剰余定理を用いた構成や最小ノルムが大きいという意味で優れた特長を持つものを探索できるため、当研究室として集中して研究を行っており共同研究先を募集しているところである。

キーワード	微細構造ファイバ、スーパーコンティニューム、パラメトリック増幅、ファイバレーザ
相談・提供可能技術	新規なガラス材料および特殊なファイバの作製、光学ガラス材料の評価、光ファイバの特性評価、光導波路素子設計、光伝搬特性解析、技術光機能材料の設計

◆研究室スタッフ

教授:大石 泰丈 准教授:鈴木 健伸 助教: Tong Hoang Tuan

PD研究員:DE CLERMONT, Jonathan

技術顧問:飯塚 孝之 研究補助者:宮瀬 恵津子

問合せ先 : ohishi@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

非線形性の高い新規なガラス材料とそれを用い独自に設計した微細構造光ファイバを創生して、スーパーコンティニューム等のコヒーレント光源や光増幅器などの高機能かつ高効率のアクティブ光デバイスの開発を強力に推進しています。

独自の材料設計指針に基づきテルライト、カルコゲナイド、フッ化物、リン酸塩ガラスなどの新しい非線形光学ガラスや高効率の希土類イオン間エネルギー移動、高い発光量子効率をもつホストガラスなどの新規な光制御材料を開発し、その特性を最大限に引き出すため、独自に設計した高い非線形性や特異な波長分散特性を持つハイブリッド微細構造ファイバ(MOF)などの新規な光ファイバの実現とその特性検証までを行い、材料開発からデバイス創生までの一貫した研究を遂行することで、他の研究グループでは実現できない独創的な研究成果を次々とあげています。

本研究室の最先端の研究成果は、光通信に限らず、太陽光エネルギー利用システム、車載光通信システム、環境センシング、医療工学、機械加工、光コンピューティング、量子情報通信などの幅広い分野への応用が可能です。

◆研究テーマと成果

1. 超広帯域コヒーレント光発生・制御の研究 コアとクラッドに組成の大きく異なる高非線形ガラス材料を用いたハイブリッドMOFを作製する方法として、ロッドインチューブ法とスタッキング法を組み合わせた独自の手法を開発し、可視から赤外にわたって波長分散のないファイバ構造を明らかにした。

パラメトリック増幅、波長変換、波形整形等の光信号処理やパラメトリック発振によるコヒーレント光の発生に応用可能な四光波混合が、テルライトガラスコア/フォスフェイトガラスクラッドのハイブリッドMOF構造により、石英ファイバでは不可能な1.29から2.49 μm に亘る帯域1.2 μm もの超広帯域な増幅で実現できることを初めて明らかにした。

2 μm より長波長で零分散となるカルコゲナイドガラスファイバを開発し、長波長励起により、吸収損失の高い可視域での第三次高調波発生(THG)を抑制することで光劣化による損失増加の抑制を試みた。As₂S₅MOFでは、1.37から5.65 μm にわたるスーパーコンティニューム(SC)光の発生に成功し、As₂Se₃をコアとするカルコゲナイドファイバにより10 μm におよぶSC光の発生を確認した。

光カー効果(光による屈折率の変化)を用いることで全固体フォトニックバンドギャップ(PBG)ファイバにおいて伝搬特性を動的に制御することができ、PBGを265nmもシフトさせることが可能であることを明らかにした。

2. 新規エネルギー変換技術の研究 太陽光を直接的にレーザ光に変換する太陽光励起ファイバレーザをファイバブラッググレーティングを用いて共振器を構成し、レーザ発振に成功した。ファイバレーザの高密度実装による高出力化の可能性に途を開いた。

◆研究室の保有技術と設備

特殊ガラス材料・ファイバを作製する技術

- ・超高純度雰囲気制御炉
- ・フローティングゾーン単結晶作製装置(写真1)
- ・レーザー書なるキャストリング炉
- ・ファイバプリフォーム延伸装置
- ・ファイバドローイング装置(写真2)
- ・微細構造光ファイバ, ナノワイヤー,
他特殊ファイバ素子作製技術

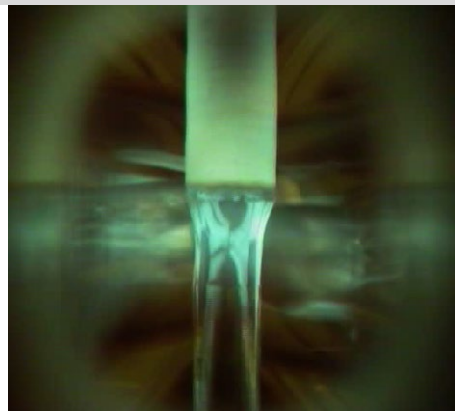


写真1. 単結晶作製装置

光学ガラス材料を評価する技術

- ・ラマン分光器, FT-IR
- ・熱分析装置(DSC, TG/DTA, TMA)
- ・プリズムカプラ
- ・屈折率分散測定装置
- ・分光光度計, 蛍光光度計
- ・広帯域発光特性測定システム
- ・粉末X線回折

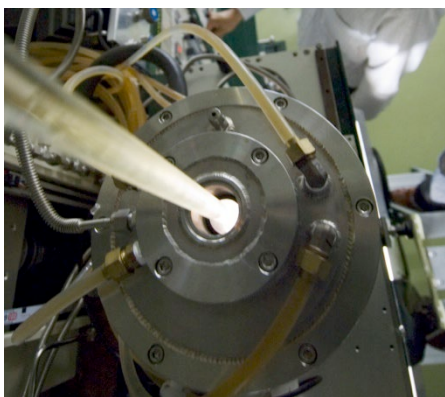


写真2. 光ファイバドローイング装置

光ファイバ素子特性を評価する技術

- ・波長分散測定装置
- ・高分解能光スペクトルアナライザー
- ・超短光パルス解析装置
- ・高速光変調装置
- ・各種高出力ファイバレーザー光源
- ・超短パルス中赤外レーザー光源
- ・チタンサファイアフェムト秒レーザー(写真3)
- ・フェムト秒描画システム
- ・フォトンカウンティングシステム
- ・広帯域オシロスコープ
- ・走査型電子顕微鏡
- ・フォトンペア測定装置
- ・各種自作ファイバレーザーおよび測定装置

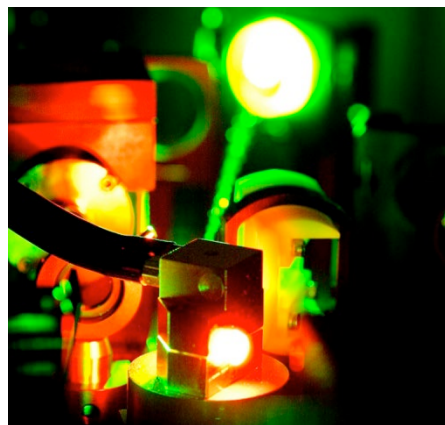


写真3. チタンサファイア フェムト秒レーザー

光導波路素子設計および光伝搬特性解析技術

- ・MATLAB, COMSOL, ModeSolution, FemSIM, BemPROP, FullWAVE
- ・各種自作の解析プログラム

光機能材料を設計する技術

- ・CASTEP, Wien2k, Gaussian, GAMESS

◆企業との接点・共同研究のご提案

当研究室の成果は、光情報通信、太陽光エネルギー利用システム、車載光通信システム、環境センシング、医療工学、機械加工、光コンピューティング、量子情報通信などの幅広い分野への応用が広がっています。これまでに通信キャリア、自動車メーカー、通信機器メーカー、光学素材メーカー等の幅広い企業と共同研究を行ってきました。素材開発から光学素子、レーザー開発まで幅広い分野で協力関係を持つことができます。

キーワード	フォトニクス材料、デバイスの開発
相談・提供 可能技術	特殊ファイバのガラス母材およびその製造プロセスについて

◆研究室スタッフ

教授: 齋藤 和也

問合せ先 : ksaito@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

高品質な活性イオン(希土類、遷移金属イオン等)添加シリカガラスを作製する独自技術を有し、各種フォトニクス応用に適したガラスの開発を行っている。近年は、高出力加工用ファイバレーザー、可視ファイバレーザー、衛星間通信用ファイバアンプ、超低損失光ファイバ等の研究開発を進めている。また、高機能シリカガラス開発の基礎研究として、シリカガラスの局所構造、特に希土類イオン周辺構造を、EXAFS, NMR, ESR, 吸収、励起蛍光、ラマン測定等を通して行っている。この基礎研究をベースに、フォトダークニング(励起レーザーや宇宙線でガラスに欠陥吸収が生じる現象)抑制や、エネルギー移動の高効率化を達成している。

◆研究テーマと成果

1. 超低損失ファイバの開発

①ファイバ紡糸中のガラス形成過程制御、および、②添加物による構造緩和の促進および濃度揺らぎによる光散乱増加の抑制、の2つの観点から超低損失ファイバの研究開発に取り組み、Ge添加シリカファイバで世界トップレベルの低損失化を達成した。また、アルカリ元素添加による低損失化の可能性を世界に先駆けて示し、現在、多くのファイバメーカーが、K添加による低損失化に取り組んでいる。

2. 超高効率ファイバアンプの開発

Er添加シリカガラスは光通信用のファイバアンプ素材として広く用いられているが、アンプの高性能化やレーザー応用を目指して、さらなる高品質化および組成/屈折率の高精度制御が求められている。本研究では、Er添加シリカガラスのMCVD法による製造プロセスの改良および、構造と光物性の相関の解明に取り組んでおり、効率78%の超高効率ファイバアンプの開発に成功した。

3. 超高出力ファイバレーザーの開発

近年、ビーム品質が高いファイバレーザーの高出力用途が注目されるようになり、単一モードでの高出力化を目指した開発競争が世界中で活発に行われている。本研究においても、単一モード超高出力ファイバレーザーの開発を目指して、Yb添加シリカプリフォームの作製技術の確立、ガラス構造とYb³⁺イオンの光学特性評価、PCFレーザーの試作等に取り組んでおり、これまでにスロープ効率87%で2kW発振に成功した。

4. 衛星間光通信用ファイバアンプの開発(JAXAとの共同研究)

衛星間光通信用ファイバアンプでは、宇宙線耐性の向上が大きな課題となっている。本研究では、ガラスの組成、活性イオン周辺構造の制御、ファイバ構造の最適化等を検討し、世界最高水準の宇宙性耐性を実現した。

5. 920nm発振フェムト秒ファイバレーザーの開発

多光子顕微鏡による蛍光たんばく質マルチカラーイメージングでは、現在、光源として920nm発振のチタンサファイアレーザーが用いられている。これを、ファイバレーザーに代替できれば、低コスト化、メンテナンスフリー、小型化が可能になる。本研究で、920nm発振フェムト秒ファイバレーザーの開発に成功した。

6. 可視ファイバレーザーの開発

Dy添加シリカファイバの発振に世界で初めて成功した。フォトダークニングもGe共添加により抑制できることを明らかにしている。現在、さらに、抑制効果を向上させるための方法を模索している。



7. 高温ファイバセンサーの開発

ブリルアン散乱光を用いた分布型ファイバセンサを、高温(300℃以上)で使用可能なように、ファイバの構造緩和および応力緩和のブリルアンシフトに及ぼす影響を調べている。

◆研究室の保有技術と設備

保有技術

- ①希土類添加シリカガラスの作製プロセス技術
- ②ファイバ紡糸最適化
- ③マルチコアファイバ作製技術

保有設備

MCVD, プリフォームアナライザー、プリズムカップラー、UV&V分光測定装置、FTIR, ESR, ENDOR

◆企業との接点・共同研究のご提案

光ファイバに関して、お困りのことがありましたらご相談下さい。

エネルギー材料研究室

— 省エネルギー社会の構築に寄与する機能性材料の創製 —

キーワード	熱電材料、熱ダイオード、熱スイッチ、電子輸送現象、電子構造、熱輸送
相談・提供 可能技術	材料の電子輸送特性の解釈と制御、熱電材料の高性能化、電子輸送現象と電子構造の評価、各種機能性電子材料の開発

◆研究室スタッフ

教授: 竹内 恒博 准教授: 松波 雅治

PD研究員: 久我 健太郎, MACHDA, Fahmi, ANG, Artoni Kevin Roquero

研究補助者: 野村 越子, SINGH Saurabh

問合せ先 : t_takeuchi@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

化石燃料の枯渇問題、その燃焼に伴う地球温暖化ガスの排出、原発停止による電気料金の高騰など、深刻な社会問題が山積しています。これらの問題を大幅に緩和するためには、省エネルギー社会の構築が必要不可欠です。

本研究室では、省エネルギー社会の構築に寄与する機能性固体材料の開発を行っています。固体内の電子のエネルギー分布、運動量分布、電子散乱、フォノン分散、フォノン散乱に関する情報を、計算科学の手法(バンド計算、クラスター計算、各種シミュレーション)と先端的測定手法(高分解能角度分解光電子分光、赤外分光、X線発光・吸収分光、共鳴光電子分光、軟X線光電子分光、硬X線光電子分光)を駆使することで正確に知り、それらを機能性固体材料の開発に利用していることが、本研究室で実施している研究の特徴です。

◆研究テーマと成果

以下に、主な研究テーマと成果を示します。

① 熱電物性を支配する因子の解明とその因子の制御指針の構築

本研究テーマにおいて、これまでに、微細電子構造の役割、格子振動の非調和製の影響、人工超格子に依るフォノン分散の折畳み効果、粒界によるエネルギー選択散乱効果、ナノ構造の導入による電子物性と格子熱伝導度の変化などを詳細に解明してきました。また、その成果として得られた知見を用いて、熱電物性(電気伝導度、熱伝導度、ゼーベック係数)の制御指針を構築しています。

② 安価で無害な元素から構成される高性能熱電材料の創製

①で得られた成果と基に熱電材料の設計指針を提案しています。さらに、提案した設計指針に基づき、近年、安価で安全な元素のみから構成される高性能熱電材料の開発に成功しました。

③ 固体熱ダイオード、固体熱スイッチ材料の開発

従来の考え方では説明が難しい熱伝導度の温度依存性を、電子構造と局所原子配列の観点から理解することで、熱流を制御する材料の開発を行っています。これまでに、2倍以上の整流効果を示す熱ダイオードの開発に成功しています。

上記の研究以外にも、『④ 高温超伝導体における高い超伝導臨界温度の起源の解明』、『⑤ f 電子系材料(希土類化合物)の電子構造と機能創製』、なども実施しています。

◆研究室の保有技術と設備

エネルギー材料研究室では、下記の装置群を用いて、多種多様な試料の作製、構造評価、電子物性評価、熱物性評価、および、電子構造評価を行っています。

試料作製装置

- ・アーク溶解炉（日新技研）
- ・高周波溶解炉（セキスイメディカル）
- ・単ロール液体急冷装置（日新技研）
- ・分子線エピタキシー装置（エイコー）
- ・RFスパッタ装置（アルバック機工）
- ・浮遊帯域熔融炉（クリスタルシステム）
- ・パルス通電焼結装置（エスエスアロイ）
- ・遊星型ボールミル（フリッチュ）
- ・プラズマジェット溶射装置
- ・ブリッジマン炉
- ・高真空グローブボックス（日新技研）
- ・マッフル炉、管状炉、真空炉、3ゾーン炉

試料加工装置

- ・低速切断機（マルトー）
- ・クリスタルカッター（マルトー）
- ・試料研磨機（マルトー）

試料構造評価装置

- ・多目的X線回折装置（ブルカー）
- ・原子間力顕微鏡（日立ハイテクサイエンス）
- ・デジタル光学顕微鏡

試料物性評価装置

- ・低温物性（電気抵抗、ホール係数、磁気抵抗効果、熱伝導度、ゼーベック係数、比熱、磁化）測定装置（カンタムデザイン）
- ・ゼーベック計数測定装置（MMR）
- ・薄膜熱伝導度測定装置（ピコサーム）
- ・熱拡散率測定装置（ネッチ）
- ・示差熱分析装置DTA-TG（リガク）
- ・示差走査熱量測定装置（リガク）
- ・高温電気抵抗測定装置（自作）
- ・高温ゼーベック係数測定装置（自作）

電子構造評価装置

- ・紫外線・X線光電子分光装置（アルバックファイ）
- ・高分解能角度分解光電子分光装置（MBS）

電子構造計算

- ・バンド計算（FLAPW法、WIEN 2k）
- ・バンド計算（擬ポテンシャル法、PHASE）
- ・クラスター計算（LCAO- $X\alpha$ 法、DVX α ）



◆企業との接点・共同研究のご提案

電子輸送現象や熱輸送現象を物理的観点から考察し、様々な物性の起源を解明することを得意としています。また、固体物理の観点から、電子輸送現象や熱輸送現象に関係する材料の機能を制御する研究も得意としています。

熱や電流を利用した機能性材料（バルク、薄膜、単結晶、粉末、*etc.*）において発生した問題の解決や、材料機能の向上、新しい機能性材料の創出などにおいて協力することが可能です。比較的単純なことに対する相談なども随時受け付けておりますので、遠慮なく、お問い合わせ下さい。

理論物理学研究室

— 時空構造・物質構造・相互作用の根源の解明 —

キーワード	弦理論、場の理論、対称性の自発的破れ
相談・提供 可能技術	量子力学、場の理論等における知識

◆研究室スタッフ

教授: 黒木 経秀

問合せ先: kuroki@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

素粒子の標準模型は加速器実験で検証されているが、重力を含まず統一理論としては不完全である。統一理論の最有力候補が弦理論であるが、摂動論的な定式化しか持たず、現実世界に対する説明能力を備えていない。これが弦理論における最大の課題であり、30年以上解決していない。弦理論が統一理論として説明能力を持つには非摂動的定式化が必要である。この動機から、行列模型(行列を力学変数とする統計系)による弦理論の非摂動的定式化が提案されている。しかしどの模型も未完成である。従って、弦理論の非摂動的定式化の候補である行列模型を解析し、標準模型の導出、世代数や階層性の起源の解明、量子重力など、標準模型における未解決問題を解明することは弦理論本来の目的からして真に追求すべき課題であると考ええる。

一方で近年の弦理論研究では、弦理論の持つ高い対称性を有効に用いた解析が流行している。しかし弦理論が導出すべき標準模型は、超対称性のない4次元の場の理論である。今後は真摯に行列模型のダイナミクスに取り組み、弦理論の高い対称性、特に10次元ローレンツ対称性や超対称性等が非摂動的弦理論の枠内でどのように破れ、標準模型の対称性に帰着するかを真剣に研究するべき時に来ていると考える。対称性に基づく理論は美しい結果が得られるが、それではいつまでも弦理論が標準模型や加速器実験と乖離し、上記に挙げた統一理論としての弦理論の問題が未解決のままになってしまうからである。

弦理論における10次元ローレンツ対称性、超対称性は理論の無矛盾性から要請されるため、標準模型の導出には、これらの自発的破れが期待される。それには非摂動効果が重要であるが、現在まで弦理論における非摂動効果は非摂動的物体を人為的に導入して解析されており、真空中における対称性の破れとの関係は不明のままである。よって非摂動的弦理論における対称性の自発的破れはこれまでほとんど解明されていない。従って弦理論における対称性の自発的破れを引き起こす非摂動効果の解析が本研究の核心をなす学術的問いである。

また、重力を矛盾なく量子論的に定式化する量子重力理論の最有力候補が弦理論であり、実際行列模型から重力を導出する試みがなされているが、これも未完成である。行列模型において、重力の自由度を同定し、重力理論において本質的な一般座標不変性の起源を明らかにし、いかに4次元の重力が量子論的に定式化できるかを探ることは、自然界に存在する4個の相互作用を量子論的に統一する究極理論の完成に向けて、人類に与えられた最大にして最後の未解決問題である。

これらの問題の解決に向けて、我々は2次元の超弦理論の一つに対し、その非摂動的定化の候補を行列模型によって与えた。これは低次元の超弦理論であり、現実世界を記述する超弦理論を単純化した理論に過ぎないが、超弦理論の完全な非摂動的定式化が未だに存在しない現状において、もし我々の主張が正しければ低次元ではあるが超弦理論を非摂動的に定義した初めての例となり、その存在意義および独自性は非常に大きい。さらに特筆すべきことは、我々の行列模型において、超対称性が自発的に破れることを示したことである。我々の主張が正しければ、この結果は超弦理論において、超対称性が自発的に破れ得ることを示しており、初の例になっていることのみならず、現実世界における超弦理論の自発的対称性の破れの理解に多大な知見を与えると思われる。これにより、実験と乖離している現状の弦理論研究に対し、実験との関連付けを与える可能性を拓くものである。

◆研究テーマと成果

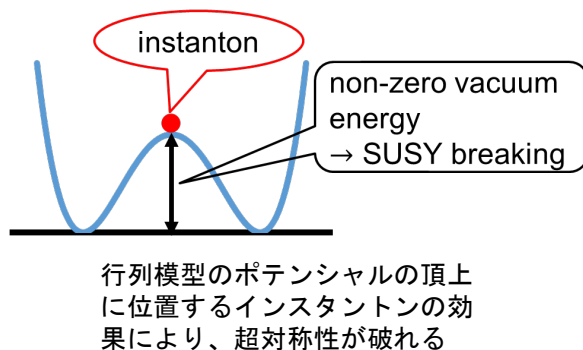
・ 低次元の超弦理論の非摂動的定式化の完成

先行研究において、2次元の超弦理論に対して、行列模型による非摂動的定式化を提唱した。結合定数の最低次においてすべての2点関数が一致するなど、この提案の強い証拠がすでに得られているが、まだ証明は完成していない。超弦理論、行列模型双方で多点相関関数、高次相関関数を求め両者の一致を確認し、この主張を証明する。特に行列模型側では1点関数については摂動の全次数での表式が得られているため、超弦理論で次の次数の表式を得る。この際、数学的に微妙な問題が起こり得るが、行列模型の結果を参照することにより、同時にそれを解決する。超弦理論、行列模型双方で、一般の多点相関関数の高次の寄与を求めることは困難が予想されるが、超対称性、共形対称性、ゲージ対称性等対称性の要請から相関関数間の関係式が両者において存在することが予想され、それを明らかにし比較することによって一気に相関関数の等価性を示すなどの可能性が考えられる。証明が完成すれば、低次元ではあるが超弦理論の非摂動的定式化を与えた初の例となる。

・ 超対称性の自発的破れを起こす自由度の同定

先行研究では、我々の提唱した行列模型において、超対称性が自発的に破れることを示した。この成果は超弦理論における自発的超対称性の初の例を与える可能性が高く、学術的意義は非常に大きい。行列模型の立場では、この破れはインスタントンと呼ばれる量子論的ポテンシャルの鞍点に存在する固有値によるものであることが明らかになっているが、この自由度の超弦理論側での対応物を同定し、超弦理論における超対称性の自発的破れを引き起こす自由度およびその機構、物理的描像を明らかにする。

一般に行列模型のインスタントンは弦理論におけるソリトンであるD-braneに対応することが知られているので、我々の模型においてもインスタントン存在下での相関関数とD-brane存在下での相関関数を比較し、その一致を見ることにより両者を同定する。これにより、D-braneの生成ないし凝縮により超対称性が自発的に破れるという物理的描像を確立する。



・ 高次摂動級数の解析

前項に述べたように、行列模型の1点関数は摂動級数の全次数での表式が得られており、その高次のは弦理論特有の振る舞いをするを明らかにした。これは我々の行列模型が弦理論を定義していることの強い証拠である。弦理論の摂動級数を高次まで計算することは一般に非常に困難であり、超対称性の自発的破れのような非自明な物理を持つ弦理論において、摂動級数が全次数で判明している稀有な例となっている。一方、このような高次摂動級数と非摂動効果を関係付けるresurgenceのアイデアが近年注目されており、実際この級数にresurgenceを適用し、前項で述べたインスタントンの情報が得られることを最近明らかにした。超弦理論にresurgenceを適用した例はまだ少ないため、他の多点関数にもresurgenceを適用する。特に、2点関数についても高次摂動級数の形が判明しつつある状況である。

◆研究室の保有技術と設備

理論物理学の研究室であるため、数式処理、数値計算等を行うためのパソコンのみ使用している。

◆企業との接点・共同研究のご提案

弦理論から派生したアイデアにAdS/CFTという予想がある。AdS/CFTとdeep learninに深い関係があることが近年議論されており、deep learninの開発や検証と弦理論の進展が今後深く関わり合う可能性がある。また、弦理論、量子重力理論と量子情報理論の深い関係もAdS/CFTを通じて指摘されており、量子情報によって重力が理解できたり、逆に量子情報の困難な問題が弦理論を用いて簡単に理解できるなど、今後量子情報理論の観点と弦理論的な観点の相互理解が有用となる可能性がある。

数理物理学研究室

— 時空の数理構造、非線形物理学への斬新なアプローチ —

キーワード	相対性理論、ブラックホール物理学、宇宙物理学、非線形物理学
相談・提供 可能技術	相対性理論および重力理論、非線形数理モデルの構築

◆研究室スタッフ

教授: 富沢 真也 PD研究員: 鈴木 良拓

問合せ先: tomizawa@toyota-ti.ac.jp

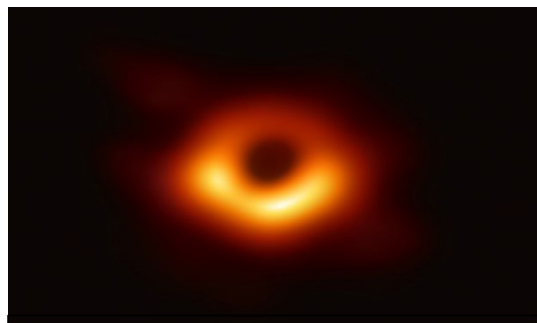
◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

万有引力の法則やニュートンの法則の発見によって、我々人類は、惑星の運動をよく理解することができるようになったが、強重力場中の惑星の運動や高エネルギーの宇宙現象では、このニュートン理論が破綻することが知られている。このような現象を扱うためには、アインシュタインの発表した「一般相対性理論」が必要である。この理論は、水星の近日点移動を説明したり、ブラックホールの存在を予言したりするなど、ニュートン理論では説明できない数々の物理現象をうまく説明することで、これまで大きな成功を収めてきたが、ブラックホールの中心近くや宇宙のはじまりでは、この相対性理論も破綻してしまい、より大きな枠組みの理論体系が必要となる。そのような理論の最も有力な候補の理論として、「弦理論」やその低エネルギー有効理論である「超重力理論」のように空間次元が3よりも大きな高次元理論が提案されているものの、理論が正しいことを裏づける実験的な証拠が現在のところ無い。

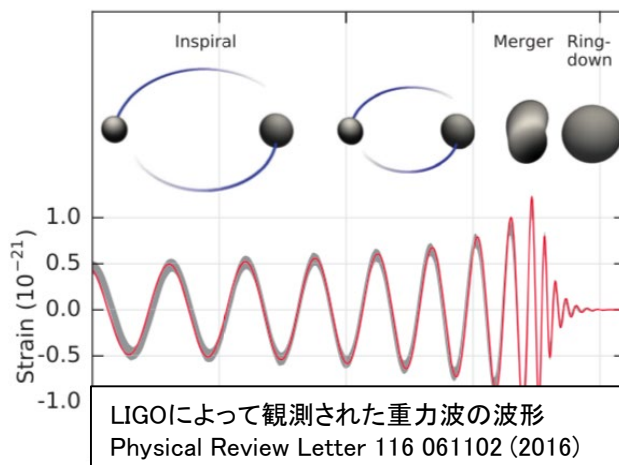
ブラックホールは、一般相対性理論の基礎方程式であるアインシュタイン方程式の解によって記述されると考えられている。特に、空間次元が3次元のブラックホール解は、唯一つであることが証明されている。これは、ブラックホールの一意性定理と知られ、現代の天文学やブラックホール物理学の基盤をなすものである。しかし、空間次元が3よりも大きなブラックホールでは、一意性定理が成立しないため、様々な種類のブラックホール解の存在が示唆されてはいるものの、その全貌は未だに明らかになっていない。こうした高次元ブラックホール特有の性質を明らかにすることが高次元理論の検証につながると思っている。

また、近年、AdS/CFT対応を通して、高次元ブラックホールが超電導や超流動などの凝縮系物理学やクォーク・グルーオンプラズマなどの原子物理学の現象を記述することが解ってきた。そのため、一見、無関係に思えるブラックホール物理学が、量子論ではアプローチの難しい物性物理学の問題を解決したり、新しい量子物理現象を予言したりすることができるかもしれないと期待されている。このような意味で高次元ブラックホールは、実際に存在するかどうかは別にして、現代物理学において重要な地位を築いている。このような理由から、当研究室では、主に、空間次元が3よりも大きなブラックホールに焦点を当てた数理的な研究を行っている。

一方、100年前に一般相対性理論によって、宇宙を光速で伝わる時空のさざ波、重力波の存在が予言され、近年になって初めて、米国のLIGOチームにより、合体するブラックホールから放出される重力波が直接観測された。当研究室では、こうした重力波の新しい非線形効果の解明も試みている。



2019年国際プロジェクトEHTによって撮影されたブラックホールの影
Event Horizon Telescope HP



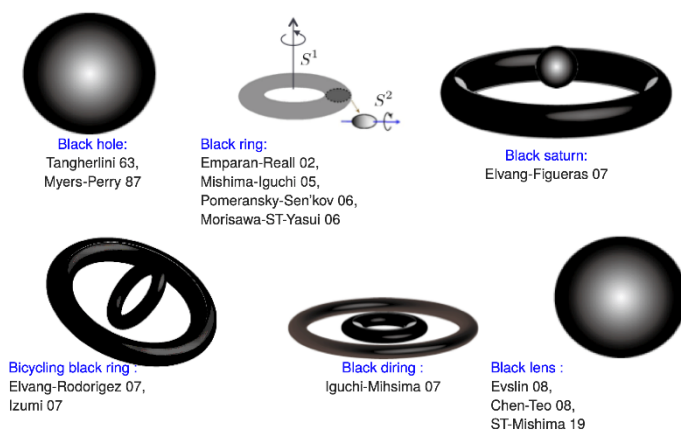
◆研究テーマと成果

・ブラックホール解の構成と数理的解析

アインシュタイン方程式や超重力理論のブラックホールの厳密解の構成を基礎として、アインシュタイン方程式の可積分系の数理構造について研究を行っている。これまでのブラックホールに関する多くの研究では、解析的に簡単であることや解を求めやすいという理由から、コンパクト化されていない漸近平坦なブラックホールに焦点が当てられていたため、コンパクト化されたブラックホール解の新たな生成法を構築し、その手法を用いて、多くのブラックホール解を発見した。

特に、5次元最小超重力理論においてコンパクトな余剰次元を持つ多体ブラックホール解、合体するブラックホール解や超対称ブラックホール解を発見し、その数理的性質および物理的性質についても明らかにした。コンパクトな次元の存在によって、ブラックホールのトポロジーは、球面やリング形状だけではなく、レンズ空間も許されること、また、エルゴ領域がブラックホールの周辺だけではなく、離れた領域にも形成されることも明らかにした。さらに、ブラックホールが合体する際は、2つの球面のブラックホールが1つのレンズ空間のブラックホールへとポロジータンジェンシを起こし、漸近平坦なブラックホールよりも重力波を多く放射しうること解った。

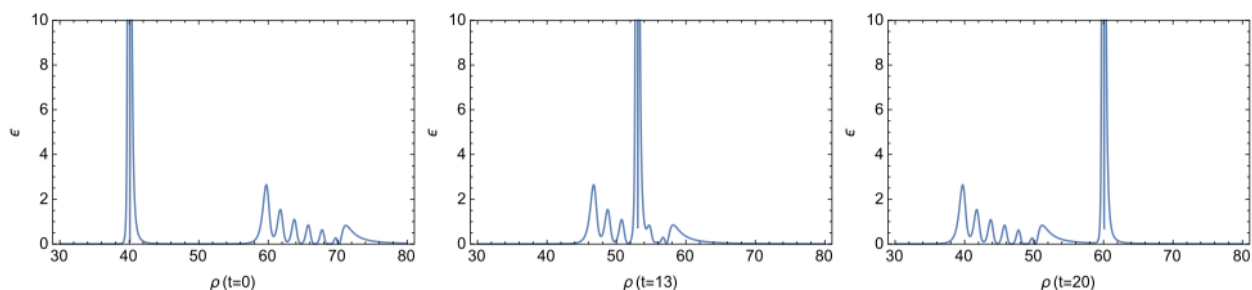
Various black objects in $D = 5$



様々なトポロジーのブラックホール

・重力波の非線形効果の解析

調和写像法を用いてアインシュタイン方程式の円筒対称重力波解を生成し重力波の非線形効果を調べている。特に重力波が反射するときや衝突するとき重力波の強い集中が起きるが、このとき重力波のモード間の転換現象が生じる。解の持つパラメータを変化させることによってモード転換現象がどのように変化するか解析を行っている。また、円筒対称時空では、真空の重力系はアインシュタインマックスウェル系に直接読み替えることができる。そこで、得られた解の重力波-電磁波の相互転換現象への応用についても試みている。



2つの非線形重力波の衝突

◆研究室の保有技術と設備

数理的および理論的な研究のための数式処理ソフトを使用している。

◆企業との接点・共同研究のご提案

相対性理論や宇宙物理学に関わらず、様々な数理モデルの解析や物理学や工学で扱う非線形偏微分方程式の解法が必要とされた場合、接点の可能性はある。

キーワード	表面・界面、量子構造、局所解析、太陽電池・蛍光素子・受光素子、物性基礎
相談・提供可能技術	量子構造作製(MBE)、表面・界面改質、局所構造計測、光計測、電子計測

◆研究室スタッフ

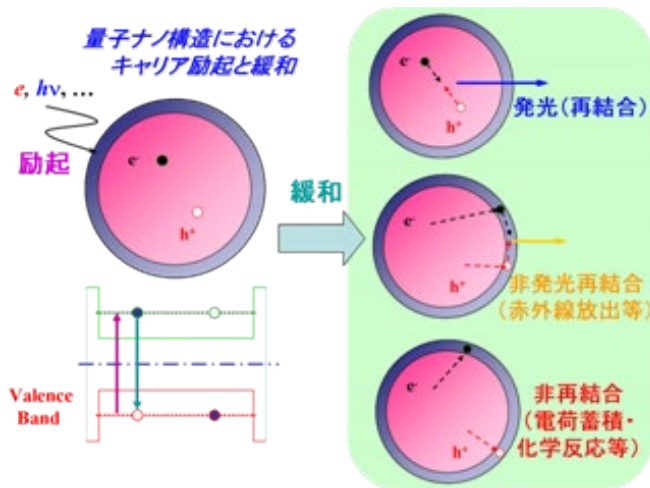
教授: 神谷 格 助教: Ronel Christian Intal ROCA

問合せ先: kamiya@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

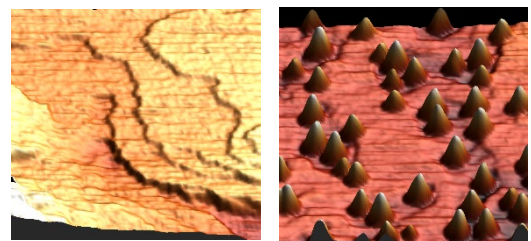
ナノ構造・量子構造等を中心とした微細構造の表面・界面に絡んだ研究を行っている。

物質の機能・物性は、主に材料の選択、構造(大きさ・格子等)で決まるが、さらにその表面・界面にも大きく依存する。下図の例では、量子ナノ構造体の性能が、内部の電子準位に加え、表面界面により変わることが示されている。また、触媒反応の様に、表面自体が外界との相互作用を司ることもある。



量子効果と表面・界面による機能制御の概念

当研究室では、このような認識から、
 1) 固・液・気相合成を駆使した物質の精密作製、
 2) 表面・界面の改質制御と評価
 3) 物性・機能計測と創成、
 を特徴とした研究に取り組み、その結果、
 i) 特異な性質を持つ量子構造の開発、
 ii) 従来の性能を凌ぐ光触媒の開発、
 などに結びつけている。



新規結晶成長法による2D/3D作り分け

◆研究テーマと成果

1. エピタキシャル結晶成長とその機構
MBEによるIII-V化合物半導体量子構造等の結晶成長、並びにその成長機構と新規成長法の検討。量子構造の大きさ・歪制御、成長機構の理解を進めている。
2. コロイダルナノ粒子の合成・物性・応用
液相化学を用いて量子ドットを含むナノ粒子の合成とその物性計測や素子応用を検討しており、II-VI, III-V, 酸化物粒子を合成し、薄膜構造中のエネルギー伝達を調べている。
3. 局所ナノ構造の電子物性計測
単一量子ドット・太陽電池電極等の局所的な構造・電子状態を走査プローブ等で計測している。
4. 量子構造を用いた光アップコンバージョン
InGaAs系新規量子構造の作製、特に赤外→可視の変換効率向上と機構解明を行っている。
5. 深紫外発光素子の試作: 新たな作製法の探索と短波長発光の実現を目指している。
6. 半導体表面・界面パッシベーション技術の開拓

◆研究室の保有技術と設備

以下の通りの試料作製・物性計測系を有し、量子構造・ナノ構造・光触媒等の作製と、その光・電子物性計測を行っている。量子・ナノ構造に関しては、MBEと液相による作製と表面界面改質を、光触媒に関しては可視光応答を特徴としている。また、走査プローブ顕微鏡の改造による誘電体計測等も行っている。

- (1) 試料作製 : 分子線エピタキシー (MBE : III-V, 有機)、金属蒸着装置、液相合成設備一式、深紫外光加工装置
- (2) 光計測 : 蛍光分光器、吸光分光器、顕微蛍光分光器(設営中)、
蛍光分光システム(半導体レーザー×2、Ti:Sapphire 短パルスレーザー×2、
クライオスタット、Si CCD 検出器、InGaAs Diode Array 検出器、等)
時間分解蛍光分光装置(ストリークカメラ)
深紫外蛍光分光装置(ストリークカメラ)
- (3) 伝導計測 : 半導体アナライザー、(導電性走査プローブ顕微鏡(5)記載)
- (4) 超高真空計測系 : 超高真空一貫試料作製-計測システム
- (5) 走査プローブ顕微鏡 : 温度可変(100~600K)・高真空対応、KFM(ケルビンプローブ)機能付

◆企業との接点・共同研究のご提案

以下に記載、若しくはこれらに関連した技術分野に関し、ご協力をさせて頂ければ幸甚に存じます。お気軽にご連絡下さい。

量子・ナノ構造の作製と表面・界面

視野は主として新材料・部材の開拓にあり、ディスプレイ・センサー・太陽電池等の応用を念頭に、試料作製技術の開拓と機構解明、基礎的な物性計測、デバイスプロトタイピングを行っている。

可能な共同研究のテーマとしては、例えば以下の様なものがある。

- (1) 量子・ナノ構造の表面界面修飾による電子物性制御 (例えば、キャリア寿命、発光効率や明滅等の制御)
- (2) 局所電子状態の計測と応用: 走査プローブやナノ電極による計測と素子開発
- (3) コロイダルドットによる機能薄膜: ドットを包含する薄膜の作製と光電子物性。例えば、発光シート、光フィルター、等)
- (4) 新規ナノ粒子合成
- (5) 酸化物蛍光体の作製と評価
- (6) 半導体表面・界面のパッシベーション
- (7) レーザー補助の加工技術

キーワード	ナノテクノロジー、エネルギー・環境、カーボン、電池、表面科学、装置開発
相談・提供可能技術	ナノ分析技術による材料表面の評価、カーボンナノ材料の合成、電池材料の分析

◆研究室スタッフ

教授: 吉村 雅満 准教授: 原 正則
 PD研究員: Vanjarapu Kesava Rao, Kanishka De Silva
 CHELLAMUTHU, Jaganathan
 VISWANATH, Pamarti

問合せ先 : yoshi@toyota-ti.ac.jp
<http://www.toyota-ti.ac.jp/surface/>



◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

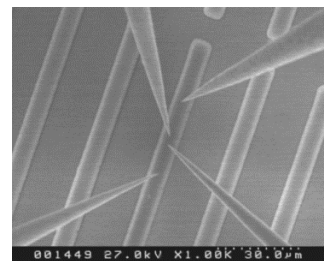
物質がナノサイズになると、表面の全体積に占める割合が大きくなり、表面構造そのものが物性を左右する。当研究室では固体の表面をナノ～ミクロの立場で制御・評価し、カーボンなどの新規物質を利用した新しいエネルギー材料や環境材料の提案とその創製をめざす。ナノカーボン材料合成装置や、原子・分子の分解能をもつ走査プローブ顕微鏡、電気化学や光学特性を調べる装置を主たるツールとして、表面の構造、電子状態、組成、欠陥などを評価し、ナノ～ミクロ領域における電気特性、機械特性、電気伝導、熱伝導、光学特性のオリジンを明らかにする。研究分野としては、(応用)物理、化学、機械工学の融合領域となる。

研究のキーワードを以下に挙げる。

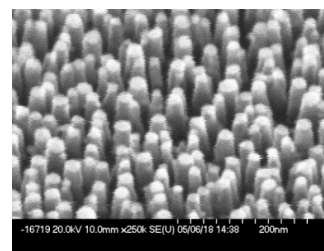
- ・ナノテクノロジー(フラーレン、カーボンナノチューブ、グラフェン、ナノダイヤモンド、バイオ、ナノ加工、ナノロボット、ナノデバイス、センサー、ナノ粒子、プローブ顕微鏡、プラズマ加工、圧電デバイス)
- ・環境(水素、(自動車)触媒、燃料電池、リチウム電池、浄水フィルター)
- ・表面科学(結晶成長、触媒反応、表面分析、原子・分子操作、電気化学、放射光、光物性)
- ・第一原理計算(電気伝導など)
- ・装置開発(電子回路、制御、ソフト開発、機械設計・製作)

◆研究テーマと成果

- 1) 機能性カーボン材料の作製と応用
カーボンナノチューブ、グラフェンなどのカーボンナノ構造のボトムアップ&トップダウン合成、及び各種デバイスの開発
- 2) 燃料電池・太陽電池用高性能素材の研究
電極の高性能化と反応挙動のその場観察、新規透明電極の開発
- 3) 機能性カーボン材料の作製と応用
カーボンナノチューブ、グラフェンなどのカーボンナノ構造のCVD法による合成、及びセンサーデバイスや圧電デバイスの開発
- 4) プローブ顕微鏡(+顕微ラマン)による物性評価
電子顕微鏡内で作動するナノマニピュレータや、AFMラマンによるナノ構造の評価、独自CNT探針の開発
- 5) バイオナノエンジニアリング
ナノダイヤモンド、DNA、バイオミメティクス、人工骨材料の高機能化
- 6) 天然グラファイトからの酸化グラフェン合成
スリランカ産グラファイトを用いた工業応用、浄水フィルター



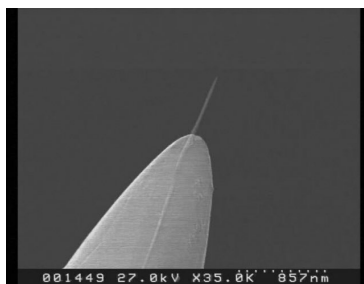
ナノプローバ



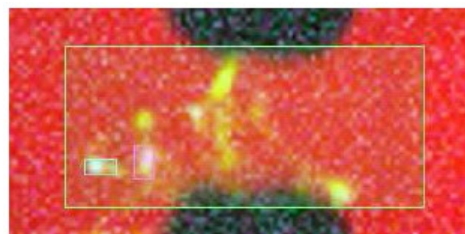
カーボンロッド

◆研究室の保有技術と設備

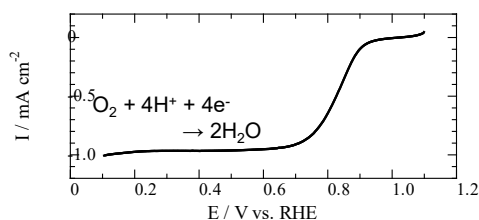
走査プローブ顕微鏡(SPM) 6台
透過型電子顕微鏡(TEM、FIB)
高分解能走査電子顕微鏡(SEM) 2台
真空蒸着装置 2台、オスミウムコーター
カーボン(CNT、グラフェン)合成装置 4台
フーリエ変換赤外分光法装置(FT-IR)
分光光度計(UV-Vis)、熱分析装置
ラマン分光装置(顕微鏡)(Raman TERS)
半導体ナノプローバー
摩擦力評価装置、接触角測定装置
X線光電子分光装置(XPS)
真空アニール炉 2台、マッフル炉 2台
電気化学測定装置 4台
グローブボックス
レーザー顕微鏡



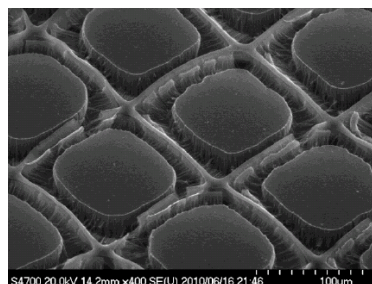
カーボンナノチューブ探針



電極間に架橋したCNTのラマン像



燃料電池用触媒の酸素還元反応測定

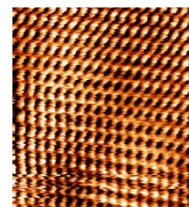


カーボン複合体

◆企業との接点・共同研究のご提案

1. プローブ顕微鏡を用いた材料表面のナノレベル評価

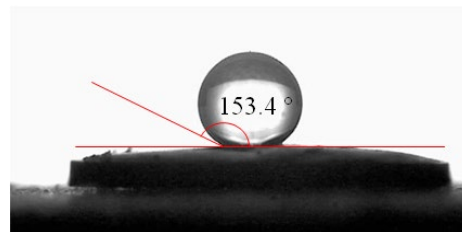
環境 : 超高真空、大気、水中、雰囲気制御(湿度・温度)
評価項目 : 機械特性(トライボロジ、剛性、ヤング率)、電気特性、
磁気特性、増強ラマン
局所評価 : 欠陥、粒界、ナノ粒子、仕事関数
応用分野 : 電極表面、触媒、摩擦、接着...



グラフェンの原子像

2. カーボンナノ材料の合成と応用

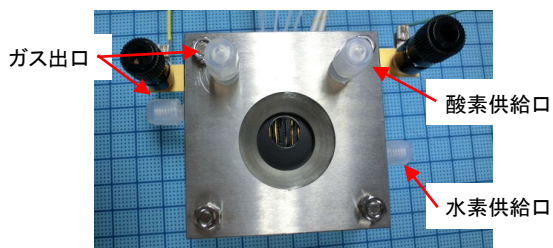
将来の電子デバイスや触媒材料として期待される、カーボンナノチューブやグラフェンなどの合成。
評価は、電子顕微鏡(SEM、TEM)やマッピング可能なラマン顕微鏡(TERS)をはじめ、赤外分光法など各種光学手法を駆使する。またカーボンを用いた撥水表面や防食材、フィルターの開発も行う。



AKD:C₆₀=400:4

3. 電気化学計測との複合化によるナノ材料の反応のその場観察

電池材料や触媒として用いられるナノ材料の反応挙動をその場観察法(分光分析法、プローブ顕微鏡など)を用いて計測し、様々な反応に伴うナノ材料の状態の変化や反応物を分析・評価する。



顕微ラマン測定用燃料電池単セル

キーワード	高分子化学、有機合成化学、超分子化学、錯体化学、ゲル、 π 共役系高分子、凝集誘起型発光
相談・提供可能技術	刺激応答性材料の設計、プロトタイプ分子の合成・提供、各種スペクトル測定

◆研究室スタッフ

教授: 小門 憲太

問合せ先: kokado@toyota-ti.ac.jp

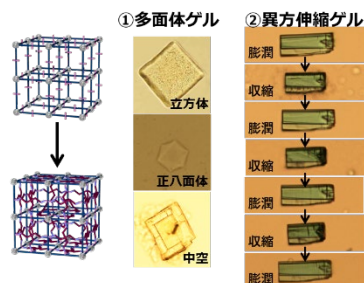
◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

高分子化学が興ってから約100年が経ち、今や高分子材料は身の回りに溢れる欠かせない材料となっておりますが、原子や分子の組み合わせ、繰り返し構造、あるいは高次構造を考えると合成されていないもののほうが遥かに多いと言えます。当研究室では高分子を作る重合反応を行う前の状態に注目し、超分子化学や有機合成化学の知識を駆使してモノマーなどの配置を調整することで新しい高分子合成手法を確立し、得られた材料の機能開拓を行いたいと考えています。

◆研究テーマと成果

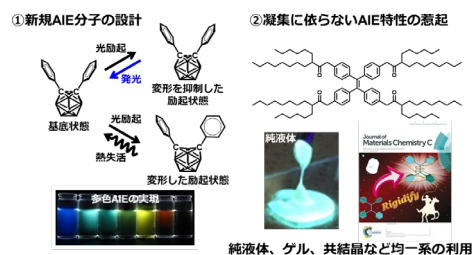
1) 原子・分子の精密配置に基づく新しい巨大分子合成法の開発と機能開拓

原子や分子をあらかじめ正確に配置あるいは配列した状態でつなぎ合わせることで、これまでの手法では得ることが難しかった鎖構造や網目構造が精密に制御された高分子を創り出す手法を開発しています。たとえば多孔性結晶である金属有機構造体(Metal-Organic Framework、MOF)の構成要素である有機配位子を結晶作製後に繋ぎ合わせることで網目構造を制御した三次元高分子を作ることができます。このようにつなぎ方を究めることで有機元素の特性を極限まで活用した全く新しい材料の創製を目指しています。



2) 光励起状態のダイナミクス設計による有機分子の発光制御

分子集合することで発現する機能の制御の一環として発光特性に着目しています。有機分子を光励起したあとのダイナミクスは発光挙動に大きな影響を及ぼします。当研究室では凝集誘起型発光(Aggregation-Induced Emission、AIE)特性が励起状態における分子の大きな変形挙動に深く関連していることを有機合成化学と計算科学を駆使して見出し、その知見を基に新しいAIE分子を開発しています。励起状態におけるダイナミクスを設計することで新たな作動原理に基づく生命現象のプロブや物理変化のセンサーへの応用が期待されます。



◆研究室の保有技術と設備

当研究室で保有する機器を以下に示す。

原子間力顕微鏡

サイズ排除クロマトグラフ装置

マイクロオートグラフ装置

紫外可視近赤外吸収分光装置

蛍光分光装置

高速液体クロマトグラフ装置

中圧自動シリカカラム装置



原子間力顕微鏡



紫外可視近赤外吸収分光装置



蛍光分光装置

◆企業との接点・共同研究のご提案

当研究室では主に高分子鎖の伸縮を用いた刺激応答性材料の設計をこれまで行っており、望みの刺激で特性をOn-Offすることであればご相談に乗れるかと思います。また、有機合成や高分子合成を強みとしておりますので、そのような設備をお持ちでない企業の方にプロトタイプ分子の合成や提供をこれまで実施してまいりました。各種スペクトル測定や解析も可能ですので、お気軽にお声掛け頂ければと思います。

触媒有機化学研究室

— 金属クラスター触媒の精密設計に基づく実践的な分子変換反応の開発と応用研究 —

キーワード	精密有機合成, 有機金属化学, 金属クラスター, 担持型触媒, 水素化, ヒドロシリル化
相談・提供 可能技術	ナノおよびサブナノサイズの金属クラスターおよびその担持型触媒の創製, 触媒機能評価(水素化・ヒドロシリル化など), 有機化合物のスペクトル解析

◆研究室スタッフ

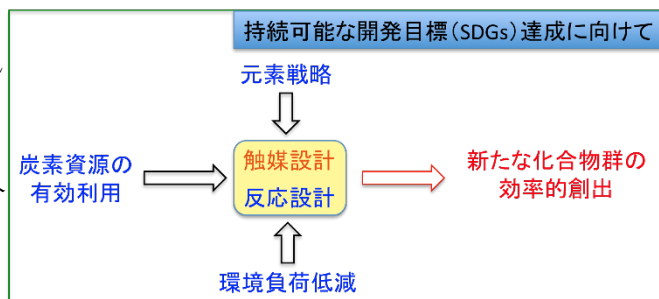
教授: 本山 幸弘

問合せ先: motoyama@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

プラスチックや医薬品など, 我々の身の回りには多くの有機分子が含まれている. これら有機分子を創り出す上で基幹科学技術である有機合成化学において, 近年ではグリーンサステナブルケミストリーや元素戦略を含む持続可能な開発目標(SGDs: Sustainable Development Goals)に立脚した高性能触媒の創製ならびに反応開発が求められている.

当研究室では, 有機金属化学を基盤として金属錯体を精密設計し, これらを前駆体として炭素ナノ繊維(CNF)や活性炭に代表される炭素材料, さらに様々な金属種からなる酸化物上にナノからサブナノサイズ (<1 nm) の金属クラスターを高分散・サイズ制御して担持する独自の手法を開発し, これらを触媒として多くの化学者が容易に利用でき, さらに現代社会に求められている地球環境に調和した省資源で省エネルギー型の精密な物質合成, 特に医薬品や機能性材料合成プロセスの創出を目指している.



◆研究テーマと成果

1. 担持型金属クラスター触媒の創製と水素化反応

一般に担持型金属クラスター触媒は工業的に広く利用されているが, 活性や化学選択性の再現性, 反応系への金属の溶出が問題となる. 我々は有機金属錯体の穏和な分解反応を利用して炭素ナノ繊維(CNF)のみならず活性炭を含めた炭素材料上にナノサイズの金属クラスターの精密担持に成功し, これらが芳香環やニトロ基の水素化反応において, 既存の金属触媒と比較して高い活性かつ耐久性を示す不均一系触媒となることを明らかにした. さらに窒素官能基を導入した含窒素CNFや活性炭を担体として用いると, 導入した窒素が効果的に触媒の被毒剤として機能し, 従来の触媒では困難であった化学選択性を達成できること, 金属/窒素比により触媒活性が容易に調整可能なことを見出した.

2. 可溶性金属サブナノクラスター触媒の創製とヒドロシリル化反応

金属クラスターの触媒機能は, そのサイズに大きく依存することが知られている. 我々は担持型金属触媒にヒドロシランを作用させると, サブナノサイズの可溶性金属クラスターが発生し, アミドの還元反応や従来困難であった脱保護反応を安価なヒドロシランで効率的に実現できることを見出した.

この高活性な金属クラスターは失活して担体上に固定化されるが, 反応系中で容易に再発生可能であり, 「再生可能なインテリジェント型触媒」として注目している.

◆研究室の保有技術と設備

当研究室で保有する機器を以下に示す.

有機化合物の解析に必要な装置

核磁気共鳴装置 (共同:管理者)
赤外分光光度計
高速液体クロマトグラフィー
キャピラリーガスクロマトグラフ
元素分析装置
熱分析装置
旋光計

その他の設備

オートクレーブ (水素化反应用)
マイクロ波原子発光分光分析装置
ドラフト ダクト式およびフィルター式 (ダクトレス)
グローブボックス
有機合成用脱水溶媒供給装置
真空ライン



核磁気共鳴装置(JEOL JMN-ECZ-400R)



元素分析装置(PerkinElmer 2400 II CHN)・左
熱分析装置(PerkinElmer TGA 4000)・右

◆企業との接点・共同研究のご提案

2015-2019年度, 文部科学省の研究プロジェクトである私立大学戦略的研究基盤形成支援事業において, 本学の「水素原子・分子の活用技術革新のための先進触媒研究」が採択され, その研究代表者を本山が務めていました.

このプロジェクトでは,

① 再生可能エネルギーを有効に利用した「水素」を製造する技術基盤の確立,
② 「水素や水素を含む化合物」を利用した物質を製造する技術の高度化, を主たる目的としており, 物質工学, 電子情報, 機械システムの3分野の教員7名で構成する共同研究組織である「先進触媒開発研究センター」を基盤として, 水素の発生(製造)―貯蔵(有機化合物の水素化)―放出(有機化合物の脱水素化)から利用(水素化やヒドロシリル化による有用化合物の合成)を達成しうる新規な触媒の創製を行ってきました.

当研究室では, プロジェクト終了後も前頁に示したような有機化合物の水素化やヒドロシリル化, ならびに脱水素化を高効率で実現できる新規な金属触媒, 特にナノからサブナノサイズの金属クラスターの創製と, それらを用いた触媒反応開発を中心に研究を継続しています.

本プロジェクトに関連する触媒や反応開発について, 技術相談および将来的な研究協力の相談を歓迎致します.

キーワード	セラミックス材料, 化学溶液法, イオン伝導(固体電解質), 電池, 結晶配向
相談・提供可能技術	酸化物材料の合成, イオン伝導特性の評価, (基礎的な)固体NMR解析

◆研究室スタッフ

講師: 荒川 修一

問合せ先: arakawa@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

セラミックス材料の特性は, 組成, 結晶構造, 形態などの諸因子に加え, 粒界・表面などの界面構造も含めた微構造(組織)に強く依存し, その選択や制御は機能発現において重要な課題である. そのような観点から, 主としてセラミックスの構造を意識した研究活動を行っている. 具体的には, 「結晶方位に依存する特性」または「多孔構造」を最大限に活かす高機能酸化物セラミックス材料の設計・探索と創製をめざしており, それぞれ, 「セラミックスに結晶異方性を付与する新しい組織制御法の開拓」, 「特異な多孔構造を有する粘土鉱物を基材とした新規機能材料の創製」などに取り組んでいる. なお, 合成手法には, 化学溶液法のほか, 水熱法, バイオミネラリゼーションなどの低環境負荷プロセスを積極的に活用している.

物性の観点からは, 特に「固体電解質のイオン伝導性向上に関する研究」に注力している. エネルギー・環境問題の解決に向けた様々な取り組みの1つとして, リチウムイオン電池などの二次電池や燃料電池の高性能化に関する研究開発が急がれているが, 電解質はこれらの化学電池に共通する主要な構成要素である. 固体化学を基盤とし, 最適な結晶構造の探索や組織制御法の開拓を通して, 実用に耐えうる高速イオン伝導性を示す新規な固体電解質材料の実現を目指している.

◆研究テーマと成果

1. 伝導異方性を意識したイオン伝導性セラミックスの結晶配向制御

異方的なイオン伝導性を有する固体電解質には, バルクとしてのイオン伝導性が一見低くても, 結晶の向きを高いイオン伝導性を示す方位に揃えることで, 実用レベルの電池用固体電解質材料とすることができるものもあると考えられる. 中温域作動型SOFC用の電解質の候補材料であるアパタイト型ランタンシリケート(LSO)はその一例であり, *c* 軸方向に高い酸化物イオン伝導性を示す. *c* 軸配向LSOセラミックスを作製するためのプロセスを検討している.

2. 固体電解質のイオン伝導メカニズムの解明

高いリチウムイオン伝導性を示すAサイト欠損型ペロブスカイト酸化物を中心に, 伝導率スペクトルのべき乗則解析や静的および動的固体NMRの解析により, 系統的にイオン伝導メカニズムを検討してきた. これらの知見は, 高速イオン伝導性を実現する新規な母構造の探索に有用である.

3. 異方性セラミックス合成のための新しい反応性テンプレート粒成長法の開拓

反応性テンプレート粒成長法(RTGG法)は, よく知られた異方性セラミックスの作製法であるが, テンプレート粒子と目的物質との間の良好な格子整合性を前提としているため, 適用物質が限られるという短所がある. 新たな概念を導入し, 適用可能物質の拡張を目指している.

4. 中空球状アロフェンナノ粒子を基材とした新規機能性材料の創製

内径3.8 nm程度の中空空間と球壁に0.5 nm径程度の貫通孔を多数有する中空球状アロフェンナノ粒子を基材として, Ptナノ粒子や生体関連有機分子等を吸着した新しい機能性ナノ複合材料の創製に取り組んできた(高分子ナノ複合材料研究室との共同研究).

◆研究室の保有技術と設備

以下に記載の装置および大学共用設備(FE-SEM, XRD等)を用いて, 多種多様なセラミックス材料(バルク, 薄膜)の作製と構造, 熱挙動, および物性の評価を行っている.

試料作製

- スピンコーター
- 各種電気炉
(マッフル炉, ボックス炉, 管状炉)
- ブリッジマン法単結晶炉
- 高圧マイクロリアクタ
- 導電薄膜作製用コンパクトスパッタ装置

特性評価

- LCRメータ
- 電圧源内臓ピコアンメータ
- インピーダンスアナライザ
- 各種熱分析装置
(TG-DTA, DSC, TMA)
- 分光蛍光光度計



ブリッジマン単結晶炉



熱分析システム

(リガク Thermo plus 2, TG 8120,
DSC 8270, TMA 8310)

◆企業との接点・共同研究のご提案

1. 新しい機能を有する酸化物セラミックスの作製
バルク, 多孔体, 薄膜, ナノ粒子等, 種々の形態の酸化物セラミックスの作製支援または共同研究
薄膜については, 化学溶液法による合成
2. 交流法による電気伝導特性の評価
インピーダンス分光法など, 交流法を用いたイオン伝導特性や誘電特性の評価支援または共同研究
3. 固体NMR測定および解析 (ただし学内NMR装置が利用可能となる場合)
様々な無機材料の固体NMR測定による構造評価・解析支援または共同研究

人文科学研究室(哲学)

— 哲学に基づく人間教育と対話による共同的思考の実現 —

キーワード	哲学、対話的思考、人間力、教養教育、リベラル・アーツ、アクティブ・ラーニング
相談・提供 可能技術	「哲学対話」の手法を用いたコミュニケーション研修、「哲学カフェ」の実施

◆研究室スタッフ

教授: 江口 建

問合せ先: eguchi@toyota-ti.ac.jp

	哲学カフェ	哲学対話
発祥	フランス (パリ)	アメリカ
目的	市民教育	学校教育
性質	市民啓蒙活動	学習理論

雑談 (chat, talk)
議論 (discussion)
討論 (debate)
独白 (monologue)
○対話 (dialogue)

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

近年、新学習指導要領において文科省が「主体的・対話的で深い学び」(いわゆるアクティブ・ラーニング)を推奨しました。また、2018年度からは小学校や中学校で「道徳の教科化」が開始され、〈心情を理解する〉道徳から〈考え、議論する〉道徳への方針転換が打ち出されました。これらの状況によって、ますます「対話」の重要性が自覚されています。

こうした流れの背景には、

1. 知識伝達型の座学の行き詰まり
2. 旧来のモラル教育の手ごたえのなさ

があります。

そこで、いま「哲学対話」の手法が注目されています。

健全な市民社会を作るうえで極めて有効であるという洞察から、欧米では、学校教育への哲学対話の導入が進んでおり、哲学対話の手法に基づいた民主主義社会の可能性が模索されています。

哲学対話とは、1970年代にアメリカの哲学者マシュー・リップマンが考案した学校教育プログラムです。欧米では「子どものための哲学(Philosophy for Children: P4C)」の呼称で知られています。今日ではさまざまな国の大学や小学校、中学校、高校で実践されつつあります。それは同時に、「対話」が持つ効果に着目し、教育現場に限らず、さまざまな実践の場で活かしてゆこうとする活動の総称でもあります。その意味で、フランス発祥の「哲学カフェ」となだらかにつながって受容されています。日本でも、類似のイベントを企画・運営する団体は多数存在し、北は北海道から、南は鹿児島県まで、その活動は日本全国に分布しています。また、大学などの教育機関や、研究者・大学院生などが関与・運営しているケースも少なくありません。

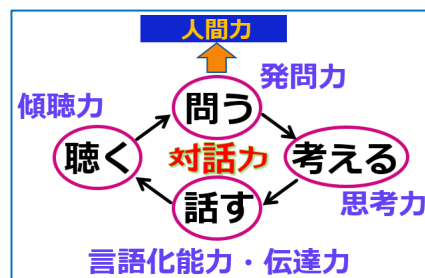
哲学対話の標準的なスタイルとしては、ある特定の話題について「対話」をおこないながら、徐々に問題を深く掘り下げ、その過程で論理的思考力や推論能力、判断力、想像力、言語運用能力、共感力などを鍛えるというものです。問う力・考える力・語る力・聴く力の四つの能力を切り離さずに総合的に鍛錬できる学習方法として注目を集めつつあります。

我が国では、近年、道徳や倫理、総合学習の授業で、「哲学対話」の手法を導入する中学校や高校が少しずつ増えてきました。また、いわゆる五教科でも、哲学対話の手法の有効性を見抜き、自主的に活用している教員が少なからずいます。さらに、哲学対話が「意見交換の場の醸成」に効果を発揮するという理由で、地域コミュニティの再生や、地方創生・地域活性化をめぐる住民同士の話し合いの場にも導入されつつあります。

「話し合いにならない場」を「話し合いの場」に転換させる機能が哲学対話にはあります。

【スマホ世代の特徴】

- ▶ 「匿名掲示板」に一方的に書き込むことには慣れていても、「対面して」人と話し、批判的な意見をもらうことには圧倒的に不慣れ。
- ▶ 「チャット」型のコミュニティツールを使うことには慣れていても、一対一の「文通」が著しく不得手。
- ▶ 「投稿」の仕方やTwitterなどでの「つぶやき方」に通曉している反面、「メール」や「手紙」の書き方を知らない。



◆研究テーマと成果

■哲学対話(子どものための哲学)をはじめとした対話理論や教育手法の理論的・実践的研究

1970年代にアメリカで学校教育プログラムとして開発された「哲学対話」の理論的研究と並行して、さまざまな場所で哲学対話の実践と学校教育への導入を試みています。小学校・中学校・高校や大学での実践を通して、生徒や学生の「探求する動機」や「対話力」に視認可能な向上が見られました。また、企業の新人研修などに哲学対話を導入した際には、例年とは異なる成果が確認されました。形ばかりの見かけ上の「アクティブ・ラーニング(能動的学習)」では一向に成果が出ない教育現場や、通常のコミュニケーション研修では埒が明かない企業などから、期待の声が寄せられています。



■哲学教育に基づいた市民教育・家庭教育・道徳教育の再生

育児サークルなどの市民団体と連携し、就学前の子どもたちや小学生児童を対象とした「哲学対話」を継続的に実施し、それが人間的成長や学習、道徳心の醸成にどのような影響を与えるかを観察しています。また、地域連携協議会や教員免許講習会などを通じて、保護者や学校教員と「哲学対話」を実施し、親や教師の役割、教育のあるべき姿などについて意見交換しています。それを通じて、対話的思考による共同体の再生を試みています。さらに、自治体や役所などから依頼を受け、地域再生・地方創生に哲学対話を役立てています。参加者の多くが、哲学対話を経験したことで自己の中に芽生えた「変化」を証言しています。

【対話のルール】

- 1) **ホンネ**で話す。何を言ってもよい。
- 2) ただし、他人の意見を**否定しない**。
馬鹿にしない。からかわない。
- 3) **対等の立場**で話す(身分や肩書、
上下関係、年齢、性差は関係ない)。
- 4) 互いの話を最後まで**よく聴く**。

■「教養教育」の歴史的 research と「教養」概念の解明、および「リベラル・アーツ」科目の手法研究

かつての「教養主義」が没落し、知の大衆化、空洞化が叫ばれて久しいですが、「新しい教養」、「本物の教養」の必要性が繰り返し説かれながらも、一向に日本国民や大学生の教養度が上がらない理由は何なのか。その背景には何があるのか。日本の教養教育を阻害しているものは何なのか。以上のことを解明すべく、研究を進めています。

理論の実践として、授業では、知識の授受や暗記作業よりも、「思考力」と「対話力」を鍛えることに専心しています。様々な思考実験を通じて、論理的・批判的に考える力、善悪を見極める判断力、問題の本質を見抜く洞察力、他者に対して寛容に応答する姿勢などを養うべく注力しています。「なぜ？」と問い、疑問について共に考え、それを言葉にして誠実に語り、他者の考えに真摯に耳を傾ける、という一連の対話的思考を続けることのうちに、「本物に役に立つ」教養の可能性を見出しています。

◆研究室の保有技術と設備

人文科学、なかでも哲学・思想の研究室であるため、実験装置や器具を用いることはありません。また、製品開発に結び付くような基礎技術も持ち合わせていません。しかし、「技能／技法」という意味では、職場の雰囲気を変える仕掛けや、物事を先に進める人間関係、合意形成の場とプロセスを構築する手法・理論を有しています。

◆企業との接点・共同研究のご提案

企業との最大の接点は、「人間教育」と「職場改革」だと言えるでしょう。従来のアンダー・マネジメントやコミュニケーション研修では一向に効果が見られないケースにおいて、哲学対話の有効性が確認されています。これまでも大企業からご依頼をいただき、若手社員研修に哲学対話を導入した折には、わずか3か月で「期待以上の成果があった」との報告を受けています。また、経済団体からも、「働き方改革」や「職場の雰囲気改善」に効果が期待できる手法の一つとして注目していただいています。もしも「今のままでは埒が明かない」、「本気で改革したい」とお感じになっている場合は、ご連絡ください。

外国語研究室

— 日本手話言語学の探求・日本手話文法の解明 —

キーワード	手話言語学、日本手話、音素配列論、音節、適格性
相談・提供 可能技術	日本手話音節のデータベース作成・提供

◆研究室スタッフ

教授:原 大介

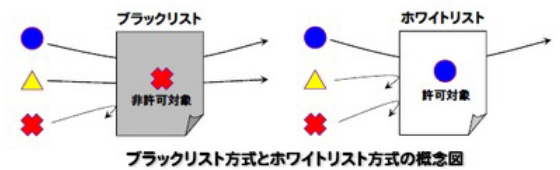
研究補助者:与那嶺 友恵、小谷 恵里、山口 千春、竹澤 和香子

問合せ先: daisuke@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

日本手話では、「手型」「位置」「動き」の3つのカテゴリに属する有限個の要素と、その他いくつかのマイナーな有限個の要素が1つまたは2つずつ結合し日本手話音節を形成している。音節構成要素の組み合わせには制約(音素配列論)があり、数学的に可能な組み合わせのすべてが適格な(well-formed)音節とはならない。手話音素配列論の解明には、既存の音声言語の理論をそのまま適用することができないという大きな問題がある。この問題は、音節を構成するカテゴリ間の異質異性に起因する。音声言語の音素配列論が音響的・調音的・聴覚的特徴などを共通の尺度として利用し論ぜられる。手話言語の音節を構成する各カテゴリは、手型、位置、動きなどのように質的に異なる存在であり、それらに横断的に使用可能な同一尺度を見つけることが難しく、異質なカテゴリに属する要素の結合の制約をいまだ記述することができない。この質的に異なる手話音節構成要素がどのような原理に従って相互に関係を持ち音節の適格性を作り上げているかを研究している。

本研究では、適格音節と不適格音節を音節構成要素レベルに分解・記号化してデータベース(以下DB)を作成している。音素配列論を論じるには、不適格性をもたらす組み合わせを明記すること(ブラックリスト方式)が必要のため、不適格音節DBも不可欠である。本研究では、適格・不適格な音節の両方を比較・対照することにより、言語学的見地から音節の適格性・不適格性に関与する要因を明らかにしていく。また、これらのDBを機械学習アルゴリズムのインプットとして利用し、音節の適格性・不適格性に関与する要因を抽出し、それらを言語学的分析にフィードバックさせている。



<http://releasepress.jp/archives/4890>より引用

グロス	TYPE	利き手			非利き手			位置		動き1				動き2				動き3				利き手		非利き手	
		手型	第1手型	第2手型	手型	第1手型	第2手型	利き手	非利き手	種類	詳細	MVT1	repeat	種類	詳細	MVT2	repeat	種類	詳細			掌の方向	手首の方向	掌の方向	手首の方向
ア	0	a						ns		dot	dot										前	0、0、上			
愛1	2	b(lax)						ns		p	c(xy)	p	r								下	0、前、0	下	右、前、0	
愛2	3	b			a			ns		p	c(xy)	p	r								前	0、0、上	右	0、前、0	
愛3	0	b						ns(u)		p	c(xy)	p	r								下	左、0、上			
相愛わず(イ)	1	b-f						ns		p	l=		hs	e/f	hs	r					後	0、0、上	後	0、0、上	
相愛わず(イ)	1	l-f						ns		p	l=		hs	e/f	hs	r					後	0、0、上	後	0、0、上	
挨拶	1	l-b	1	1-b				ns		hs	f	hs									左	0、0、上	右	0、0、上	
アイスクリー	3	b			s			ns		p	d	p									前	0、0、上	後	右、0、0	
アイスクリー	3	b			s			ns		p	d	p									後	0、0、上	後	右、0、0	
アイスクリー	3	t			c			ns		p	d	p			or	s					後	左、0、0	右	0、前、0	
間1	1	b						ns	ns	p	d	p									左	0、前、0	右	0、前、0	
愛知	3	b			a			ns		p	c(xy)	p	r								下	0、前、0	右	0、前、0	
相槌(あいづ)	1	s						ns		or	f	or	r								前	0、0、上	右	0、0、上	
相手5(もの)	0	f						ns		or	s		hs	e	hs						左	0、0、上			
アイデア	0	l						uf(kmk)		or	p	or									左下	左、0、上			
曖昧	1	5						ns		p	c(xz)	p	r								前	0、0、上	後	0、0、上	
アイロン	3	s			b			ns		p	s/s	p									下	0、前、0	上	右、0、0	
アイロン 戸	3	s			b			ns		p	s/s	p									後	0、0、下	上	右、0、0	
会う1(会う1)	1	l						ns		p	l	p									左	0、0、上	右	0、0、上	
会う1	2	l						ns		p	d	x									左前	0、0、上	右	右、前、0	
会う2	2	b						ns		p	o=d	p									前	0、0、上	後	0、0、上	
アウト	0	a						ns		p	o=d	p									前	0、0、上			
青	0	b						ns		p	t	p									後	左、0、0			
青い2(青くな)	0	l-b						ns		p	u	p									後	0、0、上			
仰ぐ3(仰ぐ3)	3	a			b			ns		p	l-a(z)	x									後	0、前、0	上	右、前、0	

外国語研究室(異文化トレーニング)



— 英語力とともに異文化コミュニケーション能力も涵養する手法を研究 —

キーワード	異文化コミュニケーション、異文化トレーニング、英語教育、日本語教育
相談・提供 可能技術	企業や教育機関における「異文化コミュニケーション」に関する出前授業や講演などの実施

◆研究室スタッフ

准教授:市川研

問合せ先:ichikawa@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

グローバル化・多様化が進み、異文化との交流が増々増加している昨今、高等教育においても学生達にとって異文化コミュニケーションの能力が以前にも増して必要になってくることは疑いようのない事実である。それらの能力養成に一番身近で対処可能となる教科は英語教育や日本語教育であると考えられる。言語教育において、言語力以外に異文化理解や異文化コミュニケーション能力養成も必要とされており、学習指導要領・モデルコアカリキュラム等にもその観点が明記されている。しかしながら、それをどのように育成するか具体的な指導方法については曖昧でありたとえ学んだとしてもその知識を現場でどう活用するかが教育されていない。実践的な異文化理解を伴うコミュニケーション能力の開発も学習者の言語習得を促すものとして重要である。

一般的に、人は自分の文化の価値尺度を使いそれを判断の基準にしている場合が多いため、異文化理解は難しいとされている。ましてはそれをトレーニングするとなると、思考様式・価値観などの文化観相違を見いだして終わることもあり、それが理解不足から生じる異文化に対するバイアスになりうる。それでも何らかの異文化トレーニングにより他文化への気付きを促し、コミュニケーション能力の向上を図ることを目指したい。そしてできるだけカルチャーショックを回避する方法を学び、問題が生じた場合でも最小限で済ませ、最大公約数的な折衷点を導き出せる力の養成を英語教育の中で実現できればと考える。

本研究の目的は、カルチャー・アシミレーター(CA)という異文化トレーニングの導入と実践が、どのように高等教育機関での英語教育に貢献できるのかを実証・検討し、今後のトレーニング方法論の確立や教材作成に資するデータベースを構築することである。具体的には、効果の有効性が主観的ではあるが認められつつある同異文化訓練法に客観的・実証的な有効性を見出せるか否かを探り、そして訓練実施に課題があるならばそれは何であり、どのようにしたら解消できるのかを解明し、英語教育実践での教育方法論として発展させることである。欧米ではCAに関しての実践や検証が先行研究として存在しているが、日本においての実証的研究は皆無に等しく、特に高等教育機関においての実証研究、そしてその質的調査においては先行研究が無い。

加えて現代の多様化の流れの中、自文化・他文化・多文化が融合や混在化し、第3の文化、もしくはハイブリディティが出現している。よって文化的要素が関連しないコミュニケーションも考慮に入れた新たな異文化トレーニングが求められている。

この新しい異文化トレーニングの有効性が実証されれば日本における異文化コミュニケーション学、英語教育学のみならず、日本語教育学、そして企業内研修等にも応用可能な将来性のある研究となり得る。

◆研究テーマと成果

研究テーマは以下の3点である。

- ・英語授業での異文化トレーニングの導入
- ・時代に即したカルチャー・アシミレーター (CA) の開発
- ・CAを用いての教育・企業、そして社会への貢献

成果に関して、CAは英語教育になじむ上にエスノセントリズム(自文化中心主義)を和らげる効果があることが判明した。今後はCAの改定や発展を進めていきたいと考えている。成果については2022年9月現在、学術論文18本を掲載、国際学会を含む発表を24回行っている。

研究業績に関する詳細はResearch Map (<https://researchmap.jp/read0156112>) を参照されたい。

◆研究室の保有技術と設備

人文科学系の研究室のため、実験室のような機器や装置は用いない。

◆企業との接点・共同研究のご提案

以下のキーワードに関して、少しでも興味関心があれば、大学の内外問わず、共同研究・企業研修・講演などのお声掛け、心よりお待ちしております。

- * 異文化
- * 対異文化寛容性
- * 異文化トレーニング
- * 海外研修
- * 英語教育・日本語教育

健康・体力研究室

— パフォーマンスの向上に関する研究 —

キーワード	ジャンプ、アキレス腱の形態、下肢筋力、スティフネス、無酸素パワー
相談・提供 可能技術	体力測定の実施

◆研究室スタッフ

講師: 吉村 真美

問合せ先: m-yoshimura@toyota-ti.ac.jp

◆研究の背景と概要(独自性、有用性)

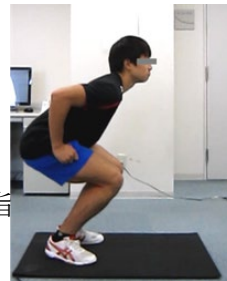
■スポーツにおけるジャンプ動作

ジャンプは多くの競技の中で用いられる動作の1つです。陸上の跳躍種目においては、ジャンプの高さが勝敗に直接的に結びつく場合もあり、より高いジャンプ高は必須と言えます。また、バレーボールやバスケットボールなどの種目においては、ジャンプ高は勝敗には直接的には結びつかないものの、勝敗に関わる大きな因子と考えられます。

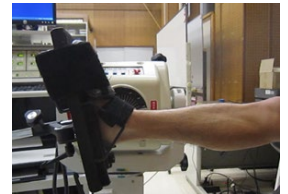
■効率的なジャンプ動作

以前、バレーボール選手と水泳選手に協力してもらい、ジャンプ高に関連する因子の研究を行いました。結果としては、アスリートにおいてアキレス腱長はジャンプ高に関連する因子となる場合があると判明しました。

今後も引き続き、競技特性に着目した「ジャンプに関する研究」を行い、効率の良いジャンプトレーニングの開発を目指します。



ジャンプ高の測定



スティフネスの測定

■無酸素パワー発揮特性

競技力向上に関わる体力要因の1つとして無酸素パワーが挙げられます。無酸素パワーに関する研究では柔道、水泳、水球、カヤック、カヌー、レスリング、ラグビー、アメリカンフットボール、陸上競技、アルペンスキーなどの競技選手を被験者として多くの研究が行われています。しかし、上肢の無酸素パワーの研究は多くありません。そこで、共同研究では「上肢や下肢の無酸素パワーに関する研究」を行っています。競技種目やレベルの違いによって無酸素パワーの発揮特性を明らかにすることでアスリートのパフォーマンス向上やトレーニング方法の改善に貢献したいです。



上肢の無酸素パワー測定

◆研究テーマと成果

■ジャンプ高に関連する因子の検討

このテーマでは、ジャンプ高に関連する因子としてアキレス腱の形態、外側広筋の羽状角度、足関節の力学的特性、下肢筋力を測定し、バレーボール選手と水泳選手で比較検討を行いました。その結果、バレーボール群においては長期間繰り返し行っているジャンプ動作はアキレス腱の形態に影響を及ぼす可能性があることを明らかにしました。また、競技種目によってジャンプを行う環境や方法が異なることによってジャンプに関する筋発揮特性が異なる可能性があることを明らかにしました。

◆研究テーマと成果

■無酸素パワーの測定法

このテーマでは、脚と同様に3種類の負荷を用いた腕クランキングテストにおける最大無酸素パワー測定の妥当性の検討を行いました。その結果、3種類の負荷で測定を行う方がより大きな最大無酸素パワーを推定できると考えられます。また、至適負荷を求めることでトレーニング指標として用いることが可能であると考えられます。

■無酸素パワーとパフォーマンス

このテーマでは、男子ジュニア競泳選手を対象として無酸素パワーと泳パフォーマンスの関係を検討しました。その結果、脚だけでなく腕の無酸素パワーも競泳選手にとって重要な体力要素であることが示唆されました。また、競泳選手の必須トレーニングとされるウェイトトレーニングの指標になると考えます。他にも、男子バレーボール選手と競泳選手と腕および脚のパワーを比較検討したところ、腕と脚のパワー比ではバレーボール選手の方が腕の割合が大きいことが明らかになりました。このように、定期的な体力測定では腕の最大無酸素パワー測定を加えることが競技力向上に有益であると考えられます。

◆研究室の保有技術と設備

・マルチジャンプテスト

跳躍高、パワー、ジャンプ指数、接地時間、滞空時間、離地時間、着地時間の測定が可能

・ワイヤレス光電管

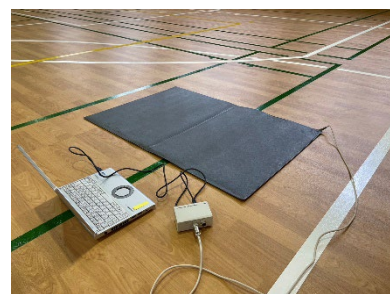
スプリント、アジリティ、ラップ計測などの測定が可能

・パワーマックス

脚や腕の無酸素パワーの計測が可能

・ラクテートプロ2

乳酸値の測定が可能



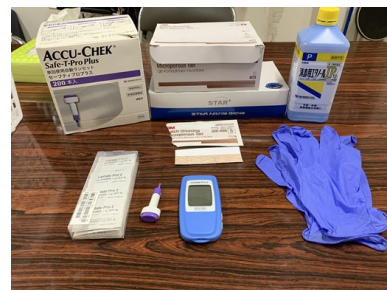
マルチジャンプテスト



ワイヤレス光電管



パワーマックス



ラクテートプロ2

◆企業との接点・共同研究のご提案

大学院生の頃から現在に至るまで研究の他にも多くのアスリート(パラリンピック選手、実業団に所属の選手、2020年東京オリンピックジュニア強化指定選手など)の体力測定を行ってきました。例えば、年2回の体力測定では前回と今回の体力測定の結果を比較し、選手にフィードバックをした経験もあります。体力測定の実施やアスリートのパフォーマンスの向上などに興味があればご連絡ください。

本学では、研究プロジェクトを中心に最先端の研究を行っています。これらは、わが国の科学技術の発展に資することを目的としており、ここでの成果は、民間企業への展開・応用も可能です。

◆研究プロジェクトの推状況

	研究センター名	研究代表者 (職名は2021度)	実施年度									
			'15	'16	'17	'18	'19	'20	'21	'22	'23	'24
本学独自	スマートビークル	下田教授										
	スマートエネルギー技術	大下教授										
	スマート光・物質	大石 副学長										
	スマート情報技術	浮田教授										
文科省	ナノテクノロジー支援事業	佐々木実教授							マテリアル先端リサーチインフラ (2.1億/10年間)			
	戦略的創造研究推進事業 /(CREST)【代表】	竹内教授				異常電子熱伝導度と異常格子熱伝導度の制御 (2.5億)						
	戦略的創造研究推進事業 /(CREST)【代表】	藤 教授			超短赤外パルス光源を用いた顕微イメージング装置の 開発と生命科学への応用(2.7億)							
(NEDO) 経産省	結晶シリコン太陽電池の 研究開発	大下教授	先端複合技術シリコン太陽電池プロセス 共通基盤に関する研究開発(3.5億)					太陽光発電主力電源化推進技術開発 太陽光発電の新市場創造技術開発 移動体用太陽電池の研究開発 (1.7億)				
	超高効率・低コスト太陽電池モ ジュールの研究開発	山口名誉教授 (招聘研究員)	超高効率・低コストIII-V化合物 太陽電池モジュールの研究開発(2.7億)									

(*)：「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」で、金額は学内資金を含む総事業費

◆文部科学省≪国立研究開発法人 科学技術振興機構(JST)≫「戦略的創造研究推進事業(CREST)」

異常電子熱伝導度と異常格子熱伝導度の制御 代表者：教授 竹内恒博（エネルギー材料研究室）

本研究では、非調和振動などに起因する異常格子熱伝導度や、微細電子構造などに起因する異常電子熱伝導度の制御指針を確立し、熱スイッチング素子に代表される革新的な熱利用デバイスの開発を目指しています。

■主な研究テーマ

- ・(Ag, Cu)₂(S, Se, Te)で観測される異常格子熱伝導度の起源解明
- ・(Ag, Cu)₂(S, Se, Te)を用いた世界最高性能熱ダイオードの開発

超短赤外パルス光源を用いた顕微イメージング装置の開発と生命科学への応用

代表者：教授 藤貴夫（レーザ科学研究室）

本研究では、数フェムト秒(10⁻¹⁵秒)という極限的に短い幅の赤外線パルスを使ったイメージング装置の開発を進めます。特に、生体分子や生細胞、生きた動物について、非破壊でリアルタイムに計測する手法を確立することを目指しています。

■主な研究テーマ

- ・フェムト秒赤外線パルスレーザーの開発
- ・生命科学の研究に役立つ先進的なイメージング装置の開発

◆経済産業省 NEDO「太陽光発電主力電源化推進技術開発」

移動体用太陽電池の研究開発(超高効率モジュール技術開発)

研究開発責任者：教授 大下祥雄（半導体研究室）

変換効率35%以上の多接合曲面モジュールを開発し、広く一般の電動自動車に搭載されるための技術開発として、超高効率、低コストを実現できる結晶シリコンとIII-V族化合物半導体太陽電池モジュールの研究開発を目指しています。

■主な研究テーマ

- ①車体形状に合わせた曲面对応Siボトムセル高効率化技術開発
- ②自動車などの移動体用モジュール発電量評価・構造最適化設計
- ③試作セルの他機関への提供によるプロジェクト全体のサポート

◆豊田工業大学研究センター

2021年8月1日付で「スマート情報技術研究センター」を新たに設置いたしました。これまでの「スマートビークル研究センター」、「スマートエネルギー技術研究センター」、「スマート光・物質研究センター」での成果を活用・発展させながら、最先端の成果を創出することを目的として、センターの活動を展開していきます。

スマートビークル研究センター

代表者：教授 下田昌利

“ビークル”は人を運ぶための機械として発達してきました。その時代の技術を基に目的に応じた種々のビークルが開発され、進化を遂げてきました。時代に応じて大型化もしくは小型化、高速化、高機能化、高度化が要求されてきましたが、近年では知能化、省資源化(グリーン化)、軽量化、低コスト化、安心安全化が強く要求されています。更に、未来社会のビークルではこうした要求とAIを利用した高度な知能化が一層進むと考えられます。本研究センターでは研究対象をドローンや移動ロボットも含む移動体全般とし、人や地球への負荷をなくし、持続発展するための未来の移動体に関する研究を、ハードとソフト、要素技術とシステム技術の各面から進めていきます。

スマートエネルギー技術研究センター

代表者：教授 大下祥雄

温室効果ガス排出量を削減し、さらには化石燃料枯渇問題を解決した持続可能な脱炭素社会を実現するには、現在の多くの課題を解決するとともにイノベーションを通じた地球環境にやさしい新たなエネルギーシステムを構築することが必須です。本センターではこれまで培ってきた本学の教員、研究者の知恵を結集して、エネルギー生成・貯蔵・変換・制御などに関する統合的研究を推進します。その結果として、産学官とも連携しながら幅広い領域に渡る研究開発を精力的に進め、地域再生を含むスマートな脱炭素社会の早急な実現、当該分野において国際的に活躍できる次の世代を担う人材の育成に努めます。

スマート光・物質研究センター

代表者：教授 大石泰丈

現在、光は、情報通信、センシング、医療、分析、製造・加工等のいたるところで利用されています。当スマート光・物質研究センターには、本学の光に関わる研究が集結しています。光を創りそして縦横無尽に操り、また光で高精度に測る技術を構築するために必要な物質からデバイスそしてシステムにまで至る研究を進めています。代表的な研究として、独自に開発した特殊ガラスを用いた微細構造光ファイバによる紫外から遠赤外域に亘る光波の創生制御の研究、痛みの分かる材料や構造物のための光ファイバ神経網の研究、光によるスピン制御の研究、石英光ファイバ技術をもとにした高性能光ファイバレーザーの開発、MEMS技術を駆使した光源、センサやアクチュエータ等のデバイス創成の研究、光をプローブとした高感度表面計測法の研究、超短光パルスレーザと光電場波形計測技術の研究、光波を制御するための半導体微小球の研究があり、これら研究を発展させるため精力的に取り組んでいます。

スマート情報技術研究センター

代表者：教授 浮田宗伯

情報技術は、広範な学術分野においてそれぞれの専門家が同時進行的に発展させてきた歴史を有する領域です。この情報技術の中でも、特に最近の機械学習やデータサイエンスは、こうした広範な学術分野において大きく発展しつつあります。小規模な本学においても、情報技術を専門にする研究室だけでなく、その他分野の研究室においても情報技術によるデータ解析などが推進されています。こうした情報分野の基盤研究と活用研究を発展させることが、本スマート情報技術研究センターの目的です。

豊田工業大学 研究プロジェクト

◆文部科学省「マテリアル先端リサーチインフラ」 【2021年度採択】

高度なデバイス機能の発現を可能とするマテリアル

代表者：教授 佐々木 実（マイクロメカトロニクス研究室）

2021年度はナノPF事業の最終年度であり、マテリアル先端リサーチインフラ事業の立ち上げ年度と重なっています。装置共用に加えて、新しく求められる内容は、利用者を支援 する際に得られるプロセス条件や加工結果などのデータを収集し蓄積することです。マテリアルデータは、材料の性質だけでなく、どう加工したらどのような特性が得られるかという加工特性 の意味を含みます。製品であるデバ イスは、何らかの加工が施されて初 めて成立するからです。特性の優れた材料は加工が難しい ことが多々生じますが、適切な加工技術により、高機能デバイスの実現 を支援します。国全体としては、集 められたデータを第三者が利活用で きるように整備し、データ駆動型の 研究開発を加速します。

■支援事業例

- ・薄膜型マイクロヒータの赤外線光源応用(矢崎総業株式会社)
- ・バリ取りツール使用前後における金属表面の微細構造観察(有限会社本間商会) 等

豊田工業大学 教育・研究プロジェクト

次世代文明センター 【2016年度設立】 人文社会系・教養教育系の機関として、「教育」と「研究」両方の機能を併せ持つセンターとして始動中。

センター長：村上 陽一郎

現代は、未来予測が困難な時代と言われます。グローバル化に伴う価値観や人生観の多様化、社会の様々な場面での急速なIT化・自動化・デジタル化など、激しい変化に直面しています。こうした不透明な時代において、未来の文明社会のあり方を模索し、同時に、次世代の文明社会を担うべき人間へと我々自身を高めるための学修・相互啓発を目的として、本センターは設立されました。本センターは、「教育」と「研究」の両方の機能を併せ持った機関として、一方では、「リベラル・アーツ」を軸とした「教養教育」の充実と整備を進め、他方では、科学・技術と人文・社会科学の両方の観点から文理融合型の文明研究を推進し、時流に先んずる創造的かつ先端的な知の拠点の形成に貢献します。

共同利用クリーンルーム（東棟1F）

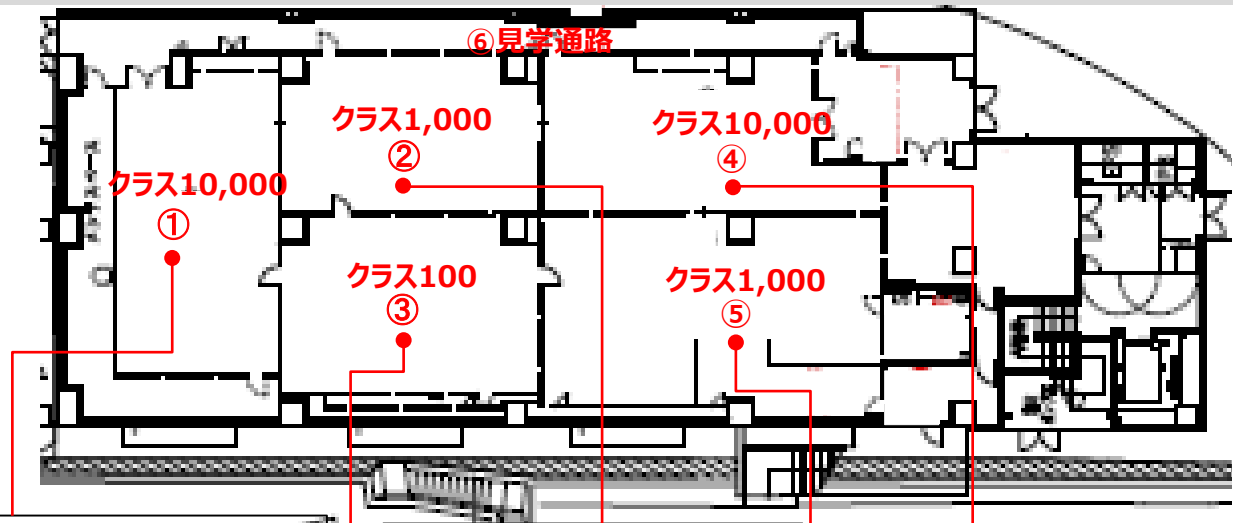
◆「共同利用クリーンルーム」の概要

豊田工業大学では、1985年に本格的なクリーンルームを設け、シリコンなど半導体デバイスや磁性デバイスの作製のための微細加工設備を設置・運用し、教育と研究に活用してきました。

2015年に新設し、教育・学術研究および産学連携の推進への寄与を目的とした「ナノテクノロジーセンター」として運用を開始しました。加工設備に加え、関連の計測・評価装置もクリーンルーム内に置き、共同利用を推進しています。



◆共同利用クリーンルームの各部屋（①～⑤）と見学通路⑥



①気相プロセス室

各種の反応性の気体を用いて緻密な半導体の薄膜の形成や微細なエッチングを行うスペース
 ・原子層堆積装置
 ・塩素系ドライエッチング装置
 ・CBE装置
 ・各種CVD装置

②ドラフト・洗浄室

半導体結晶などを有機溶剤で洗浄したり、薬品を用いてエッチング加工を行うスペース
 ・各種有機・無機ドラフト

③リソグラフィ室

特に清浄な環境でリソグラフィを行うスペース
 ・マスク露光装置
 ・電子線描画装置
 ・UV露光装置

④成膜・加工室

電極や配線などに用いる金属薄膜や絶縁体を蒸着法などで形成し加工を行うスペース
 ・イオン注入装置 ・シート抵抗測定器 ・表面粗さ計
 ・膜厚測定器 ・縦型および横型拡散炉

⑤酸化・拡散炉室

電気炉を用い、シリコンの酸化膜を結晶上に形成したり、電気特性を制御するために不純物を導入するスペース
 ・ドライエッチング装置 ・スパッタ装置
 ・電子ビーム蒸着装置

◆企業・学校関係者を対象とした実習・講習会



本学では開かれた大学として地域社会・産業界に貢献出来る取り組みとして、半導体技術全般の知識を習得するための技術実習・講習会を定期的開催しています。

VR（仮想現実）でクリーンルームを見学できます。



クリーンルーム内の設備利用について、本学は文部科学省「マテリアル先端リサーチインフラ」事業に参画していますので希望される方はお問い合わせください。





【問い合わせ先】

豊田工業大学

研究支援部研究協力グループ

〒468-8511

名古屋市天白区久方二丁目12番地1

TEL : 052-809-1723 FAX : 052-809-1721

E-mail : research@toyota-ti.ac.jp

<https://www.toyota-ti.ac.jp/research/>

豊田工大 産学連携

